

くこと太だ早く、(也)た早からず。十年歸ること得ず。即今什麼の處にか在る、灼然忘卻す來時の道(渠儂自由を得たり、一著を放過す、便ち打たん。這の忘前失後を做すこと莫くんば好し。)

【評唱】 出草入草、誰か尋討することを解せんと。雪竇卻つて他の落處を知る。這裏に到つて、一手

擡一手搦、白雲重重、紅日杲杲、大に草茸茸、煙霧霧に似たり。這裏に

到つて一絲毫の凡に屬する無く、一絲毫の聖に屬する無し。徧界曾て藏さ

ず、一一蓋覆することを得ず、所謂無心の境界なり。寒すれども寒を聞か

ず、熱すれども熱を聞かず、都盧是れ箇の大解脱門、左顧瑕無く、右盼已

に老いたり。懶瓚和尚、衡山石室の中に隱居す、唐の德宗其の名を

聞いて、使を遣して之を召す。使者其の室に至つて宣言す、「天子詔有り、

尊者當に起つて恩を謝すべし。」瓚方に牛糞の火を撥つて、煨芋を尋ねて食

す、寒涕願に垂れて未だ嘗て答へず。使者笑つて曰く、「且く勸む、尊者涕

を拭へ。」瓚曰く、「我れ豈に工夫の俗人の爲に涕を拭ふこと有らん耶」と云つて、竟に起たず、使回

つて奏す。德宗甚だ之を欽嘆す。這般の清寥寥、白的的に似たらば、人の處分を受けず、直に是れ把得

定して、生鐵鑄就すが如くに相似ん。只だ善道和尚の如きんば、沙汰に遭ふて後、更に復僧と作ら

ず、人呼んで石室行者と爲す、碓を踏む毎に歩を移すことを忘る。僧、臨濟に問ふ、「石室行者歩を移

①草茸々煙霧々は、第六則に見ゆ。

②編年通論の十八、歷代通載の十四に傳有り。

③德宗諱は括、代宗の長子、唐の第十主。

④工夫は「てま、ひま」と譯す、我れ俗人の爲に、涕を拭ふの

手間無し之意なり。

⑤二十五則の評に記す。

すことを忘る意旨如何。濟云く、「深坑に没溺す。」法眼圓成實性の頌に云く、「理極つて情謂を忘

す、如何ぞ。喻齊有らん。到頭霜夜の月、任運前溪に落つ。菓熟して猿を兼ねて重く、山長うし

て路の迷ふに似たり。頭を擧すれば殘照在り、元是れ住居の西。」雪竇道く、「君見すや寒山子、行く

こと太だ早し、十年歸ることを得ざれば、來時の道を忘卻す。」寒山の詩に

云く、「安身の處を得んと欲せば、寒山長に保つ可し。微風幽松を吹く、

近く聽けば聲愈好し。下に斑白の人有り、嚙々として黄老を讀む。十年歸

ることを得ざれば、來時の道を忘卻す。」永嘉、又道く、「心は是れ根、法は是

れ塵、兩種猶ほ鏡上の痕の如し。痕垢盡くる時光始めて現す、心法雙べ忘じて性即ち真なり」と。

這裏に到つて、癡の如く兀に似て、方に此の公案を見ん。若し這の田地に到らずして、只だ語言の中

に在つて走らば、甚の了日か有らん。

第三十五則

垂示に云く、龍蛇を定め、玉石を分ち、緇素を別ち、猶豫を決す。若し是れ頂門上に眼あり、肘臂下に符あるにあらずんば、徃徃に當頭に蹉過せん。只如今見聞不味、聲色純真。且く道へ、是れ皂か是れ白か、是れ曲か是れ直か。這裡に到つて作麼生か辨せん。

【本則】 擧す、文殊無著に問ふ、「近離什麼の處ぞ。」(借問せざる可らず、也た這箇の消息有り。)無著云く、「南方。」(草窠裏より出頭す、何ぞ必ずしも眉毛上に擔向せん。大方外無し什麼と爲てか卻つて南方有る。)殊云く、「南方の佛法、如何が住持す。」(若し別人に問はゞ禍生せん、猶ほ唇齒に掛くるま在り。)著云く、「末法の比丘、少しく戒律を奉ず。」(實頭の心得難し。)殊云く、「多少の衆ぞ。」(當時便ち一喝を與へん、一拶に拶倒し了れり。)著云く、「或は三百、或は五百。」(盡く是れ野狐精、果然として漏逗す。)無著文殊に問ふ、「此間如何が住持す。」(拶着便ち鎗頭を回轉し來れり。)殊云く、「凡聖同居、龍蛇混雜。」(敗缺少からず、直に得たり脚忙しく手亂るゝことを。)著云く、「多少の衆ぞ。」(我に話頭を還し來れ、也た放過することを得じ。)殊云く、「前三三後三三。」(顛言倒語、且く道へ、是れ多少ぞ、千手大悲も數へ足らず。)

【評唱】 無著、五臺に遊ぶ、中路荒僻の處に至つて、文殊一寺を化して他を接して宿せしむ。遂に問ふ、「近離甚の處ぞ。」著云く、「南方。」殊云く、「南方の佛法、如何が住持す。」著云く、「末法の比丘、少しく戒律を奉ず。」殊云く、「多少の衆ぞ。」著云く、「或は三百、或は五百。」無著卻つて文殊に問ふ、「此間如何が住持す、凡聖同居、龍蛇混雜。」著云く、「多少の衆ぞ。」殊云く、「前三三後三三。」(顛言倒語、且く道へ、是れ多少ぞ、千手大悲も數へ足らず。)

【本則】 東嶺禪師云く、三十五則、文殊普賢大人の境界、又、我が宗に同じく、五家の用を含むことを明す。

① 事苑第二に云く、「釋の無著、姓は董氏、永嘉の人なり、本州龍泉寺の倚律師に依つて出家す云々、法を金陵牛頭山の融禪師に嗣ぐ云々。」

② 輔教編に、「住持とは人に藉つて其の法を持して、之をして混せざらしむるなり。」

三三後三三」と。卻つて茶を喫せしむ。文殊玻璃の蓋子を舉起して云く、「南方還つて這箇有り麼。」著云く、「無し。」殊云く、「尋常什麼を將てか茶を喫す。」著無語、遂に辭し去る。文殊、均提童子をして送つて門首に出でしむ。無著童子に問うて云く、「適來道ふ前三三後三三と、是れ多少ぞ。」童子云く、「大徳」と。著應諾す。童子云く、「是れ多少ぞ。」又問ふ、「此は是れ何の寺ぞ。」童子金剛の後面を指す、著首を回す、化寺と童子と悉く隠れて見えす、只だ是れ空谷なり、彼の處後來之を金剛窟と謂ふ。後に僧有り、風穴に問ふ、「如何なるか是れ。」清凉山中の主。穴云く、「一句無著の間に違あらず、今に迄るまで猶ほ野盤の僧と作る。」若し參透して平平實實にして、腳實地を踏まんと要せば、無著の言下に向つて薦得せよ。自然に鑊湯爐炭の中に居るも、亦熱を聞かす、寒氷上に居るも、亦冷を聞かす。若し參透して孤危峭峻にして、金剛王寶劍の如くならしめんと要せば、文殊言下に向つて薦取せよ。自然に水灑げども著かす、風吹けども入らず。見すや漳州の地藏、僧に問ふ、「近離甚の處ぞ。」僧云く、「有方。」藏云く、「彼の中の佛法如何。」僧云く、「商量浩浩地。」藏云く、「争か我が這裏田を種る飯に博へて喫するに似ん」と。且く道へ、文殊の答處と是れ同か是れ別か。有る底は道ふ、「無著の答處は、不是、文殊の答處は、也た龍有り蛇有り、凡有り聖有り」と、什麼の交渉か有らん。還つて前三三後三三を辨明得する麼。前箭は猶ほ軽く後箭は深し、且く道へ、是れ多少ぞ。若し這裏に向

① 清凉山は即ち五臺山なり。

② 野盤は方言に草窠なり。

③ 地藏琿珠、法を玄沙に嗣ぐ、傳燈二十一、會元第八に傳あり。

つて、透得せば、千句萬句、只だ是れ一句。若し此の一句下に向つて、截得斷し把得住せば、相次の間に這の境界に到らん。

【頌】千峰盤屈して色藍の如し。(還つて文殊を見るや。誰か謂ふ文殊是れ對談すと。(設使ひ普賢なりとも也た願みす、蹉過了也。笑ふに堪へたり清涼多少の衆、且く道へ什麼をか笑ふ、已に言前に在り。前三三と後三三。(試みに請ふ、脚下に辨じて看よ、爛泥裏に刺有り、碗子地に落ちて椀子七斤と成る。)

【評唱】千峰盤屈して色藍の如し、誰か謂ふ文殊是れ對談すと。有る者は道ふ、雪竇只だ是れ重ねて拈すること一偏す、曾て頌著せず」と。只だ僧の法眼に問ふが如きんば、「如何なるか是れ曹源の一滴水。」眼云く、「是れ曹源の一滴水。」又、僧、郗郎の覺和尚に問ふ、「清淨本然、云何が忽生山河大地。」覺云く、「清淨本然、云何が忽生山河大地。」又、僧、郗郎の覺和尚に問ふ、「清淨本然、云何が忽生山河大地。」覺云く、「清淨本然、云何が忽生山河大地。」

◎郗郎覺は南嶽下十世、汾陽昭の法嗣、會元十二に傳あり。
①此れは楞嚴第四、窟樓那問なり。
◎祖庭事苑第二に云く、「婺州明招德謙禪師、羅山の印記を受けて、一隅に滞らず、玄旨を聖揚す、昔其の敏捷を畏れて、敢て鋒に當る詳し、左目を失ふを以て、遂に獨眼龍と號す。」

の時、喚んで文殊普賢觀音の境界と作して得てん麼。要且つ是れ這箇の道理にあらず、雪竇只だ明招底を改め用ひて、卻つて針線有り。千峰盤屈して色藍の如しと、更に鋒を傷り手を犯さず、句中に權有り實有り、理有り事有り、誰か謂ふ文殊對談すと、一夜對談して、是れ文殊なることを知らず。後來無著、五臺山に在つて典座と作る、文殊毎に粥鍋上に於て現す。無著に攪粥篋を拈じて便ち打せらる。然も是の如くなりとも雖も、也た是れ賊過ぎて後弓を張る。當時他の南方の佛法如何が住持すと道はんを等つて、劈脊に便ち棒せば、猶ほ些子に較らん。笑ふに堪へたり清涼多少の衆ぞ、雪竇笑中に刀有り、若し這の笑處を會得せば、便ち他の前三三と後三三と道ふことを見ん。

第三十六則

【本則】擧す、長沙一日遊山して、歸つて門首に至る。(今日一日、只管に落草、前頭も也た是れ落草、後頭も也た是れ落草。)首座問ふ、「和尚什麼の處にか去來す。」(也た這の老漢を勘過せんことを要す、箭新羅を過ぐ。)沙云く、「遊山し來る。」(草に落つ可らず、敗缺少からず、草裏の漢。)首座云く、「什麼の處に到り來る。」(擣、若し至る所有れば、未だ草に落つることを免れず、相牽いて火坑に入る。)沙云く、「始めは芳草に隨つて去り、又落花を逐うて回る。」(漏逗少からず、元來只だ

【本則】東嶽禪師云く、三十六則、長沙、雪竇、文殊普賢と共に手を把りて行くことを明す。

荆棘林の裏に在つて坐す。座云く、「大に春意に似たり。」(相隨來也、錯を將て錯に就く、一手擡一手搦。)沙云く、「也た秋露の芙蓉に滴るに勝れり。」(土上に泥を加ふ、前箭は猶ほ軽く後箭は深し。什麼の了期か有らん。)雪竇著語して云く、「答話を謝す。」(一火泥團を弄する漢、三箇一狀に領過す。)

【評唱】 長沙鹿苑の招賢大師は、南泉に法嗣す。趙州紫胡の輩と同時に、機鋒敏捷なり。人有つて教を問へば、便ち與に教を説き、頌を要すれば、便ち與に頌す。爾若し作家相見を要すれば、便ち爾が與に作家相見す。仰山尋常機鋒最も第一爲り、一日長沙と同じく月を翫ぶ次、仰山月を指して云く、「人人盡く這箇有り、只た是れ用不得。」沙云く、「恰も是れ便ち爾を倩ひて用ひん那。」仰山云く、「爾試みに用ひよ看ん。」沙則ち一踏に踏倒す。仰山起つて云く、「師叔

①長沙は仰山の法叔なり。
②澧州の夾山即ち國悟所住の處なり。

一に箇の大蟲に似たり。」後來人號して峇大蟲と爲す。因に一日遊山して歸る、首座も亦是れ他の會下の人、便ち問ふ、「和尚什麼の處にか去來す。」沙云く、「遊山し來る。」座云く、「什麼の處に到つてか去來す。」沙云く、「始めは芳草に隨つて去り、又落花を逐うて回る。」須らく是れ十方を坐斷する底の人にして始めて得べし。古人は出入にも未だ嘗て此の事を以て念と爲すんばふらず、看よ他の賓主互換、當機直截、各相饒さす。既に是れ遊山す、什麼と爲てか卻つて問うて道ふ、「什麼の處に到つてか去來す」と。若し是れ如今の禪和子ならば、便ち道はん、「夾山亭に到り來る」と。看よ他の古人、絲毫の道理計較無く、亦住著の處無し。所以に道

ふ、「始めは芳草に隨つて去り、又落花を逐うて回る。」首座便ち他の意に隨つて他に向つて云ふ、「大いに春意に似たり。」沙云く、「也た秋露の芙蓉に滴るに勝れり。」雪竇云く、「答話を謝す」と。最後の語に代れり、也た兩邊に落つ、畢竟這の兩邊に在らず。昔張拙秀才有り、千佛名經を看て乃ち問ふ、「百千の諸佛、但だ其の名を聞く、未審し何の國土にか居す、還つて物を化するや也た無や。」沙云く、「黃鶴樓に崔顥詩を題して後、秀才曾て題すや也た未だしや。」拙云く、「未だ曾て題せず。」沙云く、「閑を得て一篇を題取せば也た好し。」峇大蟲平生人の爲にすること、直に得たり珠回玉轉することを。人の當面に便ち會せんことを要す。頌に云く、

【頌一】 大地纖埃を絶す。(巨牖を豁開して軒に當る者は誰ぞ、盡く這箇を少くことを得ず、天下太平。)何人が眼開けざらん。(頂門上に大光明を放つて始めて得ん、土を撒し沙を撒して什麼か作ん。)始めは芳草に隨つて去り、(漏逗少からず、是れ一回草に落つるのみにあらず、頼に前頭に已に道ひ了るに値ふ。)又落花を逐うて回る。(處處全眞、且喜すらくは歸來するを、脚下泥深きこと三尺。)羸鶴寒木に翹ち、(左之右之一句を添ふ、更に許多閑事の在る有り。)狂猿古臺に嘯く。(卻つて親しく力を着くるに囚る、一句を添ふるも也た得ず、一句を減するも也た得ず。)長沙限り無き意。(便ち打つ、最後の一句什麼とか道はん、一坑に埋卻せん、鬼窟裏に墮在す。)咄。(草裏の漢、賊過ぎて後弓を張る、更に放過す可らず。)

【評唱】 且く道へ、這の公案、^④ 仰山僧に問ふ、「近離甚の處ぞ。」僧云く、「廬山。」仰云く、「曾て五老峯に到る麼。」僧云く、「曾て到らず。」仰云く、「闍黎曾て遊山せず」と云ふと。縑素を辨じて看よ、是れ同か是れ別か。這裏に到つて、須らく是れ機關盡き意識忘じ、山河大地、草芥人畜、些子の滲漏無かるべし。若し此の如くならざれば、古人之を猶ほ勝妙の境界に在りと謂ふ。見すや雲門道く、「直に得たり山河大地、纖毫の過患無きも猶ほ轉句と爲す、一切の色を見ざるも、始めて是れ半提。」更に須らく全提の時節、向上の^⑤ 一竅有ることを知つて、始めて穩坐を解すべし。若し透得せば、舊に依つて山は是れ山、水は是れ水、各自位に住し、各本體に當つて、大拍盲の人の如くに相似ん。趙州道く、「鷄鳴丑、愁ひ見る起き來つて還つて漏逗することを。」裙子褊衫筒も也た無し、袈裟の形相些些有り。褌に袴無く袴に口無し、頭上の青灰三五斗、本修行して人を利濟せんが爲にす。誰か知らん翻つて、不啣喙と成らんとは。若し眞實に這の境界に到ることを得ば、何人か眼開けざらん。七顛八倒するに一任す、一切處都て是れ這の境界、都て是れ這の時節、十方壁落無く、四面亦門無し。所以に道ふ、「始めは芳草に隨つて去り、又落花を逐うて回る」と。雪竇妨げす巧なり、只だ他の左邊に去つて一句を貼け、右邊に一句を貼く、一に一首の詩に似て相似たり。羸鶴寒木に翹ち、狂猿古木に嘯く。雪竇引いて這裏に到つて、自ら漏逗することを覺えて、驀に云く、「長沙限り無き意、咄」と。夢を作して卻つて醒むるが如くに相似たり。雪竇一喝を下すと雖も、未だ勦絶することを得ず。若し是れ山僧ならば即ち然らず、長沙限り無き意、地を掘つて更に深く埋めん。

④ 第三十四則に見ゆ。
 ⑤ 莊子齊物の注に曰く、「竅は關、竅至要の義。
 ⑥ 俗に不慧を不啣喙と云ふ。

第三十七則

垂示に云く、掣電の機、徒に佇思するに勞す。空に當るの霹靂、耳を掩ふも諧ひ難し。腦門上に紅旗を播げ、耳背後に雙劍を輪す。若し是れ眼辨し手親しきにあらんば、争か能く構得せん。有般の底は低頭佇思、意根下に卜度して、殊に知らず鬼を見る無數なることを。且く道へ、意根に落ちず、得失に拘らず、忽ち箇の恁麼に舉覺するあらば、作廢生か祇對せん。試みに舉す看よ。

【本則】 擧す、盤山垂語して云く、「三界無法。(箭既に弦を離れて返回の勢無し、月明照し見る夜行の人、中れり、法を識る者は懼る、好し聲に和して便ち打たん。)何れの處にか心を求めん。」(人を瞞すること莫くんば好し、重ねて擧するに勞せず、自ら點檢して看よ、便ち打つて云く、是れ什麼ぞ。)

【本則】 東嶺禪師云く、三十七則、盤山垂語、直に是れ向上の一句子、一代藏中說不著なることを明す。
 ⑦ 正的に、人物を描畫し、其の形に類せしむるを貌と云ふ。

【評唱】 向北幽州盤山の寶積和尚は、乃ち馬祖下の尊宿なり。後普化一人を出す、師遷化に臨んで衆に謂つて云く、「還つて人の吾が眞を^⑦ 遷得する有り麼。」衆皆眞を寫して師

に呈す、師皆之を叱す。普化出でて云く、「某甲遷得す。師云く、「何ぞ老僧に呈似せざる。」普化使ち筋斗を打して出づ。師云く、「這の漢向後風狂の如くにして人を接し去ること不在らん。」一日衆に示して云く、「三界無法、何の處にか心を求めん。四大本空、佛何に依つてか住せん。瓊璣動せず、寂止として痕無し、靨面相呈す、更に餘事無し。雪竇兩句を拈じ來つて頌す、直に是れ渾金璞玉、道ふことを見ずや、「病を瘥すには驢馳藥を假らず」と。山僧什麼と爲てか道ふ、「聲に和して便ち打たん」と。只だ佗の擔枷過狀なるが爲なり。古人道く、「聲外の句を稱することを聞いて、意中に向つて求むること莫れ」と。且く道へ、他の意作麼生、直に得たり奔流度及、電轉じ星飛ぶことを。若し擬議尋思せば、千佛出世すとも也た他を摸索することを著す。若し是れ深く闢奧に入つて、徹骨徹髓、見得透する底ならば、盤山一場の敗缺、若し言を承けて宗を會し、左轉右轉する底ならば、盤山只だ一概を得たり。若し是れ拖泥帶水、聲色堆裏に轉せば、未だ夢にも盤山を見ざることに在らん。五祖先師道く、「那邊を透過して、方に自由の分有らん。」見すや三祖道く、「之を執すれば度を失して、必ず邪路に入る、之を放てば自然なり、體去住無し」と。若し這裏に向つて、無佛無法と道ふも、又鬼窟裏に打入し去る。古人之を解脱の深坑と謂ふ。本是れ善因なれども、而も惡果を招く。所以に道ふ、「無爲無事の人、猶ほ金鎖の難に遭ふ」と。也た須らく是れ窮めて底に到つて始

①筋斗は俗に「とんぼがへり」を云ふ。

②説文に云く、瓊は、赤玉なり云々、璣は運轉を爲し云々、是れ王者天文を正す器なり云云。

めて得べし。若し無言の處に向つて言ひ得、行不得の處に行じ得ば、之を轉身の處と謂ふ。三界無法、何の處にか心を求めん。爾若し情解を作さば、只だ他の言下に在つて死卻せん。雪竇の見處、七穿八穴、所以に頌出す。

【頌】三界無法、(言猶ほ耳に在り。)何れの處にか心を求めん。(重擧するに勞せず、自ら點檢して看よ、打つて云く、是れ什麼ぞ。)白雲を蓋と爲し、(頭上に頭を安す、千重萬重。)流泉を琴と作す。

(聞くや、相隨ひ來るや、一たび聽いて一たび悲むに堪へたり。)一曲兩曲人の會する無し。(宮商に落ちず角徵に干るに非ず、路を借りて經過す、五音六律盡く分明、自領出去、聽けば則ち響す。)雨過ぎて夜塘秋水澹し。(迅雷耳を掩ふに及ばず、直に得たり拖泥帶水、什麼の處にか在る、便ち打つ。)

【評唱】三界無法、何の處にか心を求めん。雪竇頌し得て、一に華嚴の境界に似たり。有る者は道ふ、「雪竇無中に唱へ出す」と。若し是れ眼皮綻ぶる底ならば、終に恁麼に會せず。雪竇他の傍邊に去つて、兩句を貼けて道く、「白雲を蓋と爲し、流泉を琴と作す。」蘇內翰、照覺に見えて頌有り、云く、「溪聲は便ち是れ廣長舌、山色豈に清淨身に非ざらんや、夜來八萬四千の偈、他日如何が人に舉似せん。」雪竇流泉を借つて一片の長舌頭と作す、所以に道ふ、「一曲兩曲人の會する無し」と。見

③會元十七に云く、「内翰東坡居士蘇軾、字は子瞻、因に東林に宿して、照覺と無情の話を論じて省有り、黎明偈を獻じて曰く、溪聲云々。」

すや 九峯の虔和尚道く、「還つて命を識得する麼、流泉は是れ命、洪寂は是れ身、千波競ひ起る、是れ文殊の家風、一亘の晴空、是れ普賢の境界、流泉を琴と作す、一曲兩曲人の會する無し。」這般の曲調、也た須らく是れ知音にして始めて得べし。若し其の人に非ずんば、徒らに耳を側つるに勞せん。古人道く、「聾人も也た胡家の曲を唱ふ、好惡高低總に聞かず。」雲門道く、「擧するに顧みれば即ち差亘す、思量せんと擬せば何の劫にか悟らん。」擧は是れ體、顧は是れ用、未だ擧せざる已前、朕兆未分已前に見得せば、要津を坐斷せん。若し朕兆總に分れて見得せば、便ち照用有らん。若し朕兆分れて後見得せば、意根に落在せん。雪竇忒煞だ慈悲、更に偏に向つて道ふ、「卻つて雨過ぎて夜塘秋水深きに似たり」と。此の一頌曾て人有つて論量して、雪竇に翰林の才有りと美む。雨過ぎて夜塘秋水深し、也た須らく是れ急に眼を著けて看るべし、更に若し遲疑せば、即ち討ぬるとも見えす。

①九峯虔和尚は、石霜譜の法嗣、傳燈十六、會元第六に傳有り。
 ●安吉州道場山の如訥禪師の語。

第三十八則

垂示に云く、若し漸を論せば、常に返りて道に合す、鬧市裏に七縱八橫。若し頓を論せば、朕迹を留めず。千聖も亦摸索不著。儘し或は頓漸を立せずんば、又作麼生。快人の一言、決馬の一鞭、正恁麼の時、誰か是れ作者。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、風穴郢州の衙内に在つて上堂云く、(公に倚つて禪を説く、什麼と道ふぞ。)
 「祖師の心印、狀鐵牛の機に似たり。(千人萬人撼かせども動かす、誦説節角什麼の處にか在る、三要印開して鋒銛を犯さず。去れば即ち印住し、(正令當行、錯)住すれば即ち印破す。(再犯容さず、令行の時を看取せよ、拶、便ち打つ)只去らず住せざるが如きんば、鈍置の處無きことを看よ、多少の誦訛)印するが即ち是か、印せざるが即ち是か。」(天下の人の出頭するに分有り、文彩已に彰る、但だ請ふ禪床を掀倒し大衆を喝散せんことを。)時に盧陂長老あり出で、問ふ、「某甲に鐵牛の機あり、(一箇の暗曉得を釣り得たり、妨げず奇特なることを。)請ふ師印を搭せざれ。」(好箇の話頭誦説なることを爭奈せん。)穴云く、「鯨鯢を釣つて巨浸を澄ましむるに慣れて、卻つて嗟す蛙歩の泥沙に驟すること。」(鶴の鳩を捉ふるに似たり、寶網空に漫たり、神駒千里。)陂佇思す。(可惜許、也た出身の處有り、惜む可し放過すること。)穴喝して云く、「長老何ぞ進語せざる。」(旗を掲ぎ鼓を奪ふ、炒鬧來也。)陂擬議す。(三回死したる、兩重の公案。)穴打つこと一拂子して云く、「好し打つに、這箇の令須らく是れ恁麼の人にして行じて始めて得べし。」還つて話頭を記得するや、試みに擧せよ看ん。(何ぞ必ずしもせん、雪上に霜を加ふ。)陂口を開かんと擬す。(一死更に再活せず、這の漢、人を鈍置殺す、他の毒手に遭ふ。)穴又打つこと一拂子。牧主云く、「佛法と王法と一般。」(灼然、卻つて

【本則】東嶺禪師云く、三十八則、林才向上の受用、風穴をして拈弄せしむ、盧陂が足らず、故に撰得し難きことを明す。

傍人に觀破せらる。穴云く、「箇の什麼の道理をか見る。」(也た好し一撈を與ふるに、卻つて鎗頭を回し來れり。)牧主云く、「斷るべきに當つて斷らざれば、返つて其の亂を招く。」(似たることは即ち似たり、是なることは則ち未だ是ならず、須らく知るべし傍人眼有ることを、東家の死すれば西家の人哀を助く。)穴便ち下座す。(錯を將て錯に就く、機を見て變ず、且く參學の事畢ることを得たり。)

【評唱】 風穴は乃ち臨濟下の尊宿なり。臨濟當初黃檗の會下に在つて松を栽うる次、葉云く、「深山裏に許多の松を栽ゑて什麼か作ん。」濟云く、「一には山門の與に境致と作し、二には後人の與に標榜と作さん」と。道ひ了つて便ち地を鏤すること一、葉云く、「然も是の如くなりと雖も、子已に二十棒を喫し了れり。」濟又地を打つこと一、下して云く、「嘘嘘。」葉云く、「吾が宗汝に到つて大いに世に興らん」と。瀉山の詰云く、「臨濟恁麼に、大いに平地に喫交するに似たり、然も是の如しと雖も、危きに臨んで變せず、始めて眞の丈夫と稱す。葉云く、「吾が宗汝に到つて大いに世に興らん」と。大いに兒を憐んで醜を覺えざるに似たり。」後來瀉山、仰山に問ふ、「黃檗當時只だ臨濟一人に囑付するか、別に更に在ること有るか。」仰山云く、「有り。只だ是れ年代深遠なり、和尙に舉似するを欲せず。」瀉山云く、「然も是の如しと雖も、吾亦知らんことを要す。但だ舉せよ看ん。」仰山云く、「一人南を指して、吳越に令行せん、大風に遇は

①風穴延沼禪師は、南院惠顛の法嗣にして、臨濟義玄の曾孫なり。

ば即ち止らん」と。此れは乃ち風穴を識するなり。穴初め雪峯に參すること五年、因に、「臨濟、堂に入る、兩堂首座、齊しく一喝を下す。僧、臨濟に問ふ、「還つて賓主有りや也た無しや。」濟云く、「賓主歴然」と云ふ」を請益す、穴云く、「未審し意旨如何。」峯云く、「吾れ昔巖頭欽山と去つて臨濟に見えんとす、途中に在つて已に遷化するを聞く。若し他の賓主の話を會せんと要せば、須らく是れ他の宗派下の尊宿に參すべし。」穴後に又、瑞巖の常に自ら主人公と喚んで、自ら云く、「諾。」復云く、「惺惺著、他後に人の瞞卻を受くること莫れ」と云ふを見て、穴云く、「自拈し自弄す、什麼の難きことか有らん」と。後に襄州の鹿門に在つて、廓侍者と夏を過す。廓他を指し來り、南院に參せしむ。穴云く、「門に入らば須らく主を辨すべし、端的請ふ師分て。」一日遂に南院に見えて前話を舉して云く、「某甲特に來つて親覲す。」南院云く、「雪峰は古佛なり。」一日、鏡清に見ゆ。清問ふ、「近離甚の處ぞ。」穴云く、「自ら東を離れ來る。」清云く、「還つて小江を過ぐるや否や。」穴云く、「大舸獨り空に飄る、小江濟る可き無し。」清云く、「鏡水圓山、鳥飛んで渡らず、子遺言を盜聽すること莫れ。」穴云く、「滄溟尙ほ鯨鱗の勢を怯る、列漢に帆を飛して五湖を渡る。」清拂子を堅起して云く、「這箇を爭奈何せん。」穴云く、「這箇は何ぞ。」清云く、「果然として識らず。」穴云く、「出沒卷舒、師と

②識は説文に、「驗なり、凡そ識緯は皆將來の驗を言ふなり」とあれば、即ち豫言なり。

③此れより以下、端的請ふ師分てまで、福蜀兩本俱に無し。

④瑞巖師彦、巖頭義の法嗣、傳燈十七、會元第七に傳あり。

⑤南嶽下六世興化奥の法嗣、會元十一に傳あり、傳燈第十三風穴章に、「守廓上座は即ち汝

國譯佛果園悟禪師岩巖錄 卷第四

同用なり。「清云く、「杓トして虚聲を聴き、熟睡譚語饒し。」穴云く、「澤廣うして山を藏し、理能く豹を伏す。」清云く、「罪を赦し憊を放す、速かに須らく出で去るべし。」穴云く、「出では即ち失せん。」乃便ち出で、法堂上に至つて、自ら謂ふて言く、「大丈夫、公案未だ了せず、豈に便ち休す可けんや。」卻回して再び方丈に入る。清坐する次、便ち問ふ、「某適來輒ち驥見を呈して尊顔を冒瀆す、伏して和尚の慈悲を蒙る、未だ罪責を賜らず。」清云く、「適來東より来る、豈に是れ翠巖より来るにあらずや。」穴云く、「雪竇親しく棲む寶蓋の東。」清云く、「亡羊を逐うて狂解息まず、卻つて這裏に來つて詩篇を念す。」穴云く、「路に劍客に逢はば須らく劍を呈すべし、是れ詩人にあらずんば詩を獻すること莫れ。」清云く、「詩は速かに秘卻せよ、略劍を借せ看ん。」穴云く、「首を懸ぬる飯人劍を携へて去る。」清云く、「獨り風化に觸るるのみにあらず、亦自ら顛頂を顯す。」穴云く、「若し風化に觸れずんば、焉んぞ古佛の心を明めん。」清云く、「何をか古佛の心と名く。」穴又云く、「再び允容を許す、師今何か有らん。」清云く、「東來の衲子、菽麥をも分たす。」穴云く、「只だ以ますして以むことを聞く、何ぞ抑へて以めて以むことを得ん。」清云く、「巨浪湧くこと千尋、澄波水を離れず。」清云く、「一句截流、萬機寢削す」と。穴便ち禮拜す。清拂子を以て點すること三點して云く、「俊なる哉、且坐喫茶。」風穴初めて南院に到る、門に入つて禮拜せず、院云く、「門に入つては須らく主を辨すべし。」穴云く、「端的請ふ師分て。」院左手を以て膝を拍つこと一下、穴便ち喝す。院右手を以て膝を拍つこと一下、穴亦喝す。院左手を擧げて云く、「這箇は即ち閑黎に従す。」又右手を擧げて云く、「這箇又作麼生。」穴云く、「瞎。」院遂に拄杖を拈す。穴云く、「什麼をか作す、某甲拄杖を奪卻して、和尚を打著せん、言ふこと莫れ道はず」と。院便ち拄杖を擲下して云く、「今日這の黃面の漸子に鈍置一上せらる。」穴云く、「和尚大いに持鉢することを得ずして、許つて飢えずと道ふに似たり。」院云く、「閑黎曾て此間に到ること莫し麼。」穴云く、「何と言ふことぞ歟。」院云く、「好好に借問す。」穴云く、「也た放過することを得ざれ。」院云く、「且坐喫茶」と。爾看よ俊流にして自ら是れ機鋒峭峻なるを、南院亦未だ他を辨得せず。次の日に至つて、南院只だ平生の問を作して、云く、「今夏什麼の處にか在りし。」穴云く、「鹿門にして廓侍者と同じく夏を過す。」院云く、「元來親しく作家に見え來る。」

州南院の侍者なり。」
 ④第十六則に記す。
 ⑤木橋云く、「小江と言ふは、即ち越州の曹娥江なり。」
 ⑥鏡水は即ち鏡湖、圓山は即ち秦望山なり、鏡水圓山、方語に即ち目前に在り。
 ⑦論語陽貨に、「道に聽いて、塗に説くは、徳の棄つるなり。」
 ⑧滄溟は大海なり、祖庭事苑に、「樓船は戰船なり。」
 ⑨列漢は天なり空なり、大虛に帆を飛ばして、自在無碍の貌。
 ⑩祖庭事苑に、「風俗、杓を抛ちて以て吉凶を卜する者、之を杓トと謂ふ。」
 ⑪第四則に記す。
 ⑫疑は疑なり。無智の見處。
 ⑬古鉢に、「寶蓋寺は越の東に在り、雪竇山近く寶蓋に接するなり。」

ぞ抑へて以めて以むことを得ん。」清云く、「巨浪湧くこと千尋、澄波水を離れず。」清云く、「一句截流、萬機寢削す」と。穴便ち禮拜す。清拂子を以て點すること三點して云く、「俊なる哉、且坐喫茶。」風穴初めて南院に到る、門に入つて禮拜せず、院云く、「門に入つては須らく主を辨すべし。」穴云く、「端的請ふ師分て。」院左手を以て膝を拍つこと一下、穴便ち喝す。院右手を以て膝を拍つこと一下、穴亦喝す。院左手を擧げて云く、「這箇は即ち閑黎に従す。」又右手を擧げて云く、「這箇又作麼生。」穴云く、「瞎。」院遂に拄杖を拈す。穴云く、「什麼をか作す、某甲拄杖を奪卻して、和尚を打著せん、言ふこと莫れ道はず」と。院便ち拄杖を擲下して云く、「今日這の黃面の漸子に鈍置一上せらる。」穴云く、「和尚大いに持鉢することを得ずして、許つて飢えずと道ふに似たり。」院云く、「閑黎曾て此間に到ること莫し麼。」穴云く、「何と言ふことぞ歟。」院云く、「好好に借問す。」穴云く、「也た放過することを得ざれ。」院云く、「且坐喫茶」と。爾看よ俊流にして自ら是れ機鋒峭峻なるを、南院亦未だ他を辨得せず。次の日に至つて、南院只だ平生の問を作して、云く、「今夏什麼の處にか在りし。」穴云く、「鹿門にして廓侍者と同じく夏を過す。」院云く、「元來親しく作家に見え來る。」

①亡羊は三教老人の序に註す。
 ②秘却は「かたづけける」と譯す。
 ③懸は、首を懸つて倒に懸くるなり、飯人の故事一百則の評に見ゆ。
 ④祖風の化儀。
 ⑤疑鈍暗昧の義なり、無分曉なり。
 ⑥字彙に、尤は信なり、肯なり。
 ⑦左傳成公十八年に、「周子兄弟ども無惠なり、菽麥を辨すること能はず、故は立つ可らず。」注に菽は大豆なり、豆麥は形を殊にして別ち易し、故に以て癡者の候と爲す。不惠は蓋し世の所謂白癡。
 ⑧會元、歷代共に穴云くに作る。
 ⑨韻會に、「疑は息なり。」

又云く、「它備に向つて什麼とか道ひし。」穴云く、「始終只だ某甲をして一向に主と作らしむ。」院使ち打つて、方丈を推し出して云く、「這般の敗缺を納る、底の漢、什麼の用處か有らん」と。穴此れより服膺す、南院の會下に在つて園頭と作る。一日院園裏に到つて問うて云く、「南方の一棒作麼生か商量する。」穴云く、「奇特の商量を作す。」穴云く、「和尚此間作麼生か商量する。」院棒を拈じ起して云く、「棒下の無生忍、機に臨んで師に譲らす。」穴是に於て豁然として大悟す。是の時五代離亂す、鄂州の牧主、師を請じて夏を度らしむ。是の時臨濟の宗大いに盛なり、他凡そ問答垂示、妨げず語句尖新にして、花を擯し錦を簇めて、字字皆下落有ることを。一日牧主、師を請じて上堂、衆に示して云く、「祖師の心印、狀鐵牛の機に似たり。去れば即ち印住し、住すれば即ち印破す。只だ去らす住せざるが如きんば、印するが即ち是か、印せざるが即ち是か。何が故ぞ、石人木馬の機に似して、直下に鐵牛の機に似るや。備が撼動の處無し、備才かに去れば即ち印住し、備才かに住せば即ち印破す。備をして百雜碎せしむ、只だ去らす住せざるが如きんば、印するが即ち是か、印せざるが即ち是か、看よ他怎麼の垂示、謂つ可し鈎頭に餌有り」と。是の時座下に盧陂長老と云ふもの有り、亦是れ臨濟下の尊宿なり。敢て出頭し來つて、他の與に機に對して、便ち他の話頭を轉じて、箇の間端

① 中庸に云く、「拳を服膺して、之を失はず。」注に服は猶ほ著のごときなり、膺は背なり、之を心背の間に著けて能く守るなり。
 ② 後梁、後唐、後晉、後漢、後周、之を五代と云ふ。
 ③ 牧は民を養ふの官、或は太守と曰ひ、或は刺史と曰ふ。
 ④ 以下印せざるが即ち是か、去らす、蜀福二本共に之れ無し。

を致す、妨げず奇特なることを。「某甲鐵牛の機有り、請ふ師、印を搭せざれ」と。爭奈せん風穴は是れ作家なることを。便ち他に答へて道く、「鯨鯢を釣つて巨浸を澄ましむるに慣れて、卻つて嗟す。蛙歩の泥沙に眠すること。」也た是れ言中に響有り。雲門云く、「鈎を四海に垂れて、只だ獐龍を釣る、格外の玄機、知己を尋ねんが爲なり」と。巨浸乃ち十二頭の水牯牛を鈎餌と爲して、卻つて只だ一蛙を釣り得て出し來る。此の語且く玄妙無く、亦道理計較無し。古人道く、「若し事上に向つて觀ば則ち易し、若し意根下に向つて卜度せば、則ち沒交涉。」盧陂佇思す、之を見て取らずんば、千載にも逢ひ難し、可惜許。所以に道ふ、「直饒ひ千經論を講得するも、一句機に臨んで口を下すこと難し」と。其の實は盧陂好語を討ねて他に對せんと要して、令を行せんと欲せず。風穴に一向に旗を掲ぎ鼓を奪ふ底の機鋒を用ひて、一向に逼め將ち去られて、只だ奈何ともすること沒きことを得たり。俗諺に云く、「陣敗れて苜蓿の掃ふに禁へず。」當初更に鎗法を討ねて他に敵せんことを要す。備が討ね得來るを等たば、即ち頭地に落ちん。牧主亦久しく風穴に參す、佛法王法と一般なりと道ふことを解す。

⑤ 搭は印を押すなり。
 ⑥ 從容錄に云く、「鯨鯢は海に横はる大魚なり。」巨浸は海なり、明矣明神が詩に、「天巨浸に連りて相蕩するかと疑ふ。」書經集註序、蔡沈下の註に、「沈音澄」とあり、其の同音なる知るべし、邵康節漁樵問答に曰く、「樵者漁者に問うて曰く、子何の道を以て魚を得る。曰く、吾れ六物具するを以て魚を得る。其の方を請ひ問ふ。漁者の曰く、六物とは、竿、綸、浮、沈、鈎、餌なり。」又浸は漬なり、滴なり、「大きなひたしものは、何物ぞ、十二頭の水牯牛なり、即ち鈎餌なり、今は之に隨ひ、巨浸に沈す」と點す。
 ⑦ 響、犀牛角の語を類し、復た曰く、「若し清風再び振ひ頭重ねて生ぜんと要せば、請ふ

穴云く、「爾箇の什麼を見見る。」牧主云く、「斷るべきに當つて斷らすんば、返つて其の亂を招く」と。風穴渾て是れ一團の精神、水上の荷蘆子の如くに相似たり。捺著すれば便ち轉じ、捺著すれば即ち動ず、機に隨つて説法することを解す。若し機に隨はずんば、翻つて妄語と成らん、穴便ち下座。

① 只だ臨濟に四賓主の語有るが如きんば、夫れ參學の人、大いに須らく子細にすべし。賓主相見の如きんば、語論賓主往來有り。或は物に應じて形を見し、全體作用し、或は機權を把つて喜怒し、或は半身を現じ、或は獅子に乘じ、或は象王に乘す。眞正の學人有るが如きんば即ち喝して、先づ一箇の膠盆子を拈出す。善知識はれ境なることを辨せずして、便ち他の境上に上つて、摸を作し様を作す、便ち學人又喝す。前人肯て放下せず、此れは是れ膏肓の病、醫治するに堪へず、喚んで賓主を看ると作す。或は是れ善知識、物を拈出せずして、學人の問處に隨つて便ち奪ふ、學人奪はれて、死に抵るまで放たず、此れは是れ主賓を看る。或は學人有り、一箇清淨の境に應じて、善知識の前に出づ、知識はれ境なることを辨得して、他を把つて坑裏に拋向す。學人言く、「大好善知識」と。知識即ち云く、「咄哉、好惡を識らず」と。學人禮拜、此を喚んで

禪客轉語を下せ。」乃ち云く、「扇子既に破るれば、我に犀牛角を還し來れ。」時に僧有り出でて云く、「大衆參堂し去れ。」寶喝して云く、「釣を抛ちて鯨鯨を釣る、箇の野蠲を釣り得たり。驪は、廣韻に、馬土に浴するなり。」

② 幻住曰く、莊子に、任公子五十疇を餌と爲すと、蓋し圓悟此の說に効ふ。

③ 傳燈二十九、龍牙和尚の頌の語なり。

④ 此れより以下其の邪止を知らしむまゝ、蜀福二本、俱に之れ無し。

⑤ 心の上を膏と曰ひ、胸膈の下を膏と云ふ、皆治し難きの處。

主主を看ると作す。或は學人有つて、枷を被し鎖を帯びて、善知識の前に出づ。知識更に他の與に一重の枷鎖を安す、學人歡喜して、彼此辨せず、呼んで賓賓を看ると爲す。大徳山僧が擧する所、皆是れ魔を辨じ異を揀んで、其の邪正を知らしむ。見すや僧、慈明に問ふ、「一喝賓主を分ち、照用一時に行する時如何。」慈明便ち喝す。又雲居の弘覺禪師、衆に示して云く、「譬へば獅子の象を捉ふるも亦其の力を全うし、兎を捉ふるも亦其の力を全うするが如し。」時に僧有つて問ふ、「未審し什麼の力をか全うする。」雲居云く、「欺かざるの力」と。看よ佗の雪竇頌出するを。

【頌】 盧陂を擒得して鐵牛に跨らしむ。(千人萬人の中、也た巧藝を呈せんことを要す。敗軍の將は再び斬らす。)三玄の戈甲未だ輕しく酬いす。

(局に當る者は迷ふ、災を受くる福を受くるが如く、降を受くる敵を受くるが如し。)楚王城畔朝宗の水。(什麼の朝宗の水とか説かん。浩浩として

天地に充塞す、任ひ是れ四海なるも、也た須らく倒流すべし。)喝下曾て卻つて倒流せしむ。(是れ這の一喝、爾が舌頭を截卻するのみにあらず、唯、陝府の鐵牛を驚走し、嘉州の大象を嚇殺す。)

【評唱】 雪竇、風穴に這般の宗風有ることを知つて便ち頌して道く、「盧陂を擒得して鐵牛に跨らしむ。三玄の戈甲未だ輕しく酬いす。臨濟下に三玄三要有り、凡そ一句の中に須らく三玄を具すべし、一玄の中に須らく三要を具すべし。僧、臨濟に問ふ、「如何なるか是れ第一句。」濟云く、「三要印開して

朱點窄し、未だ擬議を容れざるに主賓分る。「如何なるか是れ第二句。」「濟云く、「妙辯豈に無著の問を容れんや、漚和截流の機を負はず。」「如何なるか是れ第三句。」「濟云く、「但だ看よ棚頭に傀儡を弄することを。抽牽全く裏頭の人に藉る。」「風穴一句の中に便ち三玄の戈甲を具す。七事身に随つて、輕しく他に酬いす。若し此の如くならずんば、盧陂を爭奈何せん。後面に雪寶臨濟下の機鋒を出さんことを要す。道ふこと莫れ是れ盧陂と。假饒ひ楚王城畔、洪波浩渺、白浪滔天、盡く去つて朝宗するも、只だ一喝を消して也た須らく倒流せしむべし。」

第三十九則

垂示に云く、途中受用底は、虎の山に靠るに似たり。世諦流布底は、猿の檻に在るが如し。佛性の義を知らんと欲せば、當に時節因縁を觀すべし。百鍊の精金を煨へんと欲せば、須らく是れ作家の爐鞴なるべし。且く道へ、大用現前底は、什麼を將てか試験せん。

【本則】 擧す、僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ清淨法身。」(墟坂堆頭に丈六の金身を見る、斑斑駁駁、是れ什麼ぞ。)門云く、「花藥欄。」(問處真ならざれば、答へ來つて齒芥なり、聖著、聖著、

- ① 七事は猶ほ辨慶の七つ道具と云ふがごとし、詳に第十五則に記す。
- ② 東嶺禪師云く、三十九則、林才向上の機川、若し雲門の調べ無くんば、又格外の旨を缺くことを明す。
- ③ 花藥欄は「花壇の圍のやらい」なり、藥欄は、木、藥園の圍なれども、それより總じて「やらい」の事を云ふ、唐音「やらん」、「やらい」は音の轉じたるなり、古抄に云く、纏なり。

曲、直を藏さず。僧云く、「便ち恁麼にし去る時如何。」(渾崙にして箇の棗を呑む、放憨して麼作せん。)門云く、「金毛の獅子。」(也た褒也た貶、兩采一賽、錯を將て錯に就く、是れ什麼の心行ぞ。)

【評唱】 諸人還つて這の僧の問處と雲門の答處とを知る麼。若し知得せば、兩口同じく一舌無し、若し知らずんば、未だ顛頂を免れず。僧、玄沙に問ふ、「如何なるか是れ清淨法身。」沙云く、「膿滴滴地、金剛眼を具す」と。試みに請ふ辨じて看よ、雲門別人に同じからず、有る時は把定して壁立萬仞、爾が湊泊の處なし。有る時は爾が與に一線道を開いて、同死同生、雲門の三寸甚だ密なり。有る者は道ふ、「是れ彩に信せて答へ去る」と。若し恁麼に會せば、且く道へ、雲門什麼の處にか落在す、這箇は是れ屋裏の事なり、外に向つて卜度すること莫れ。所以に百丈道く、「森羅萬象、一切語言、皆轉じて自己に歸して、轉轉轉地ならしむ。活潑潑の處に向つて便ち道ふ、若し擬議尋思せば、便ち第二句に落ち了れり。」永嘉道く、「法身覺了すれば無一物、本源自性は天真佛」と。雲門這の僧を驗す、其の僧亦是れ他の屋裏の人、戸は是れ久參なり。他の屋裏の事を知つて、進んで云く、「便ち恁麼に去る時如何。」門云く、「金毛の獅子」と。且く道へ、是れ他を肯ふか、是れ他を肯はざるか、是れ他を褒するか、是れ他を貶するか。巖頭道く、「若し戰を論せば、箇箇轉處に立在せん。」又道く、「他活句に參じて、死

- ① 方語に、説不得、畢竟舌頭に在らず。
- ② 正法眼藏に曰く、玄沙因に誤りて藥を喫して、偏身紅爛す、僧問ふ、「如何なるか是れ堅固法身。」沙云く、「膿滴滴地。」
- ③ 三寸は舌なり。
- ④ 圓轉自在の義なり。
- ⑤ 德山圓密の語。

句に參せざれば、活句下に薦得すれば、永劫にも忘れず、死句下に薦得すれば、自救不了」と。又僧、雲門に問ふ、「佛法は水中の月の如しと、是なりや否や。」門云く、「清波透路無し。」進んで云く、「和尚何れよりしてか得る。」門云く、「再問復た何れよりか來る。」僧云く、「正恁麼にし去る時如何。」門云く、「重疊たり關山の路。」須らく知るべし此の事言句上に在らず、擊石火の如く、閃電光に似たり。構得構不得、未だ免れず喪身失命することを。雪竇は是れ其の中の人、便ち當頭に頌出す。

【頌】 花藥欄。(言猶ほ耳に在り) 顛預すること莫れ。(麻の如く粟に似たり、也た此子有り、自領出去) 星は秤に在り盤に在らず。(太だ葛藤、各自に衣單下に向つて返觀せよ、道理を説くことを免れず) 便ち恁麼。(渾崙に箇の棗を呑む) 太だ端なし。(自領出去、灼然、錯りて他の雲門を恠む 莫くんば好し) 金毛の獅子大家看よ。(一箇半箇を放出す、也た箇の狗子、雲門也た是れ普州の人賊を送る。)

【評唱】 雪竇席を相て令を打し、絃を動して曲を別つ、一句一句に判じ將ち去る。此の一頌、拈古の格に異ならず、花藥欄、便ち道ふ、顛預すること莫れ。人皆道ふ、「雲門彩に信せて答へ將ち去る」と、總に情解を作して佗底を會す。所以に雪竇本分の草料を下して便ち道ふ、「顛預すること莫れ」と。蓋し雲門の意、花藥欄の處に在らず、所以に雪竇道く、「星は秤に在つて盤に在らず」と。這の一句忒

煞だ漏逗、水中元月無し、月は青天に在り、星は秤に在つて 盤に在らざるが如し。且く道へ、那箇か是れ秤、若し辨明得出せば、雪竇に辜負せず、古人這裏に到つて、也た妨げず慈悲なることを。分明に偏に向つて道ふ、這裏に在らずんば、那邊に在り去る。且く道へ、那邊は是れ什麼の處ぞ、此れ頭邊の一句を頌了る。後面に這の僧便ち恁麼に去る時如何と道ふことを頌す。雪竇道く、「這の僧也た太だ端無し」と。且く道へ、是れ明頭合か暗頭合か、會し來つて恁麼に道ふか、會し來らずして恁麼に道ふか、金毛の獅子大家看よと。還つて金毛の獅子を見る麼。瞎。

第四十則

垂示に云く、休し去り歇し去る、鐵樹花を開く。有りや有りや、點兒落節。直饒七縱八橫なるも、他に鼻孔を穿たるゝことを免れず。且く道へ、誦訛什麼の處にか在る。試みに擧す看よ。

【本則】 擧す、陸巨大夫、南泉と語話する次、陸云く、「肇法師道く、「天地と我と同根、萬物と我と一體」と。也た甚だ奇怪なり。」(鬼窟裏に活計を作す、畫餅飢に充つ可らず、是れ草裏に商量す) 南泉庭前の花を指して、「什麼とか道はん、咄、經に經師有り、論に論師有り、山僧が事に

定盤星と云ふときは、定盤は「はかりのきなり、此處の盤は「さら」のことを云ふ。
【本則】 東嶺禪師云く、四十則、便ち我が宗向上の大事、此の公案に在り、須らく參取すべきの要路を明すのみ。

干らす、咄。大丈夫當時一轉語を下し得ば、唯だ南泉を截斷するのみにあらず、亦乃ち天下の衲僧の與に氣を出さしめん。大夫を召して云く、「時の人此の一株の花を見ること、夢の如くに相似たり。」(鴛鴦を綉了つて君が看るに従す、金針を把つて人に度與すること莫れ、寤語すること莫れ、黃鶯を引き得て柳條を下らしむ。)

【評唱】 陸巨大夫、久しく南泉に參す、尋常心を理性中に留めて、肇論に游泳す。一日坐する次、遂に此の兩句を拈じて、以て奇特と爲して問うて云く、「肇法師道く、「天地と我と同根、萬物と我と一體。」也た甚だ奇怪なり」と。肇法師は、乃ち晋の時の高僧、生、融、寂と羅什門下に在り、之を四哲と謂ふ。幼年より好んで莊老を讀む、後に古維摩經を寫すに因つて悟處有り、方に莊老の猶は未だ善を盡さざることを知る。故に諸經を綜めて乃ち四論を造る。莊老の意に謂く、「天地は形の大なり、我が形亦爾り、同じく虛無の中に生ず」と。莊生が大意は、只だ齊物を論す、肇公の大意は、性は皆自己に歸することを論す。見ずや他の論中に道く、「夫れ至人は空洞として象無し、而して萬物は我が造に非ざる無し、萬物を會して自己と爲る者、其れ唯だ聖人乎。」神有り人有り、賢有り聖有り、

① 陸巨字は景山、蘇州の人なり、南泉に嗣ぐ。
② 肇法師、梁高僧傳第六に傳有り。
③ 道生、梁の高僧傳第七に傳有り。
④ 道融、梁高僧傳第六に傳有り。
⑤ 僧寂、梁高僧傳第六に傳有り。
⑥ 具には、鳩摩羅什婆、此に童壽と云ふ、梁の高僧傳第二に傳有り。
⑦ 四論とは、物不遷論、不真空論、般若無知論、涅槃無名論、此の四の者を總べて之を肇論と云ふ。
⑧ 夫れ至人より唯だ聖人乎に至る、涅槃無名論通古鶯に出づ。

各別なりと雖も、而も皆同じく一性一體なり。古人道く、「盡乾坤大地、只だ是れ一箇の自己、寒するときは則ち普天普地寒く、熱するときは則ち普天普地熱し。有なるときは則ち普天普地有、無なるときは則ち普天普地無、是なるときは則ち普天普地是、非なるときは普天普地非なり。」法眼云く、「渠は渠が渠、我れは我が我れ、南北東西皆可、不可可、但だ唯り我れ可ならずと云ふこと無し」と。所以に道ふ、「天上天下、唯我獨尊」と。石頭因に肇論を看る、此の萬物を會して自己と爲すと云ふ處に至つて、豁然として大悟す。後に一本の參同契を作る、亦此の意を出す。看よ他の慙麼に問ふことを。且く道へ、什麼の根に同じく、那箇の體に同じき。這裏に到つて也た妨げず奇特なり、豈に他の常人の天の高く、地の厚きことを知らざるに同じからんや、豈に慙麼の事有らん。陸巨大夫慙麼に問ふ、「奇なることは則ち甚だ奇なり。」只だ是れ教意を出す、若し教意是れ極則と道はば、世尊何が故に更に花を拈じ、祖師更に西來して麼をか作ん。南泉の答處、衲僧の巴鼻を用て、佗の與に痛處を拈出して、他の窠窟を破る。遂に庭前の花を指して、大夫を召して云く、「時の人此の一株の花を見て、夢の如くに相似たり」と。人を引いて萬丈の懸崖上に向つて推一推して、他の命をして斷せしむるが如し。爾若し平地の上に推倒せば、彌勒佛下生にも、也た只だ命を斷することを解せず、亦人の夢に在るが如し。覺めんと欲して覺めず、人に喚び醒さるるに相似たり。南泉若し是れ眼目正しからずんば、必定して他に探糊

し將ち去られん。看よ他恁麼の説話、也た妨げず會し難きことを。若し是れ眼目定動して活底ならば、聞き得て醍醐上味の如くならん。若し是れ死底ならば、聞き得て翻つて毒藥と成らん。古人道く、「若し事上に於て見ば、常情に墮在せん、若し意根下に向つて卜度せば、卒に摸索不著こと。巖頭道く、「此れは是れ向上の人の活計、只だ目前の些子を露して、電拂に如同す」と。南泉の大意此の如し、虎兇を擒へ龍蛇を定むる底の手脚有り、這裏に到つて、也た須らく是れ自ら會して始めて得べし。道ふことを見ずや、向上の一路、千聖不傳、學者形を勞すること、猿の影を捉ふるが如しと。看よ他の雪竇の頌出することを。

【頌】 聞見覺知一一に非ず。(森羅萬象一法有ること無し、七花八裂、眼耳鼻舌身意、一時に是れ箇の無孔の鐵鏈。)山河は鏡中に在つて觀す。(我が這裏、這箇の消息無し、長者は自ら長、短者は自ら短、青は是れ青、黄は是れ黄、爾什麼の處に向つてか觀ん。)霜天月落ちて夜將に半ならんとす。(爾を引いて草に入れ了れり、徧界曾て藏さず、切に忌む鬼窟裏に向つて坐することを。)誰と共に澄潭影を照して寒き。(有りや有りや、若し同床に睡るにあらずんば、焉んぞ被底の穿つことを知らん、愁人愁人に向つて説くこと莫れ、愁人に説向すれば人を愁殺す。)

【評唱】 南泉は小睡語、雪竇は大睡語、然も夢を作すと雖も、卻つて箇の好夢を作し得たり。前頭には一體と説き、這裏には不同と説く。聞見覺知一一に非ず、山河鏡中に在つて觀すと。若し鏡中に在つて觀て、然る後方に曉了すと道はば、則ち鏡處を離れず。山河大地、草木叢林、鏡を將て鑑すること莫れ。若し鏡を將て鑑せば、便ち兩段と爲らん。但只だ山は是れ山、水は是れ水、法法位に住して、世間相常住なる可し、山河鏡中に在つて觀す。且く道へ、什麼の處に向つてか觀ん、還つて會す麼。這裏に到つて、霜天月落ちて夜將に半ならんとするに向つて、這邊は爾が與に打併し了れり。那邊は爾自ら相度れ、還つて雪竇本分の事を以て人の爲にすることを知る麼。誰と共に澄潭影を照して寒きと。復た自ら照すと爲んや、復た人と共に照すと爲んや。須らく是れ機を絶し解を絶して、方に這の境界に到るべし。即今也た澄潭を要せず、也た霜天月の落つることを待たず、即今作麼生。

○打併は「とりのける」と譯す。打成と同じ。

國譯佛果園悟禪師碧巖錄卷第四 終

國譯佛果園悟禪師碧巖錄卷第五

第四十一則

垂示に云く、是非交結の處、聖も亦知る能はず。逆順縦横の時、佛も亦辨する能はず。絶世超倫の士として、逸群大士の能を顯す。氷凌上に向つて行き、劍刃上に走る。直下に懸麟の頭角の如く、火裡の蓮華に似たり。宛も超方なるを見て、始めて同道なることを知る。誰か是れ好手の者ぞ。試みに擧す看よ。

【本則】 擧す、趙州投子に問ふ、「大死底の人卻つて活する時如何。」(慙麼の事有り、賊は貧兒の家を打せず、曾て客と作るに慣れて方に客を憐む。)投子云く、「夜行を許さず、明に投じて須らく到るべし。」(樓を看て樓を打す、是れ賊、賊を識る、若し同床に臥すにあらざるば焉んぞ被底の穿つことを知らん。)

【評唱】 趙州 投子に問ふ、「大死底の人卻つて活する時如何。」投子他に對して道ふ、「夜行を許さず、明に投じて須らく到るべし。」且く道へ、是れ什

【本則】 東嶺禪師云く、四十一則、作家の相見別に生涯有ること不明す。
① 舒州投子山大同禪師は、曹原下四世聖觀無學の法嗣なり、傳燈十五、會元第五に傳あり。
② 拍版は、小なる板をつなぎ合せたる樂器なり、麈拍版は毛麈の切れにて作りたるもの、

麼の時節ぞ、無孔笛、麈拍版に撞著す、此れ之を驗主問と謂ひ、亦之を心行問と謂ふ。投子趙州、諸方皆之を逸群の辯を得たりと羨む、二老承嗣同じからずと雖も、看よ他の機鋒相投じて一般なることを。投子一日、趙州の爲に茶筵を置いて相待す、自ら蒸餅を過して趙州に與ふ、州管せず、投子行者をして胡餅を過して趙州に與へしむ、州、行者を禮すること三拜。且く道へ、他の意はれ如何。看よ他盡く是れ根本の上に向つて、此の本分の事を提げて人の爲にすることを。僧有り問ふ、「如何なるか是れ道。」答へて云く、「道。」如何なるか是れ佛。答へて云く、「佛。」又問ふ、「金鎖未だ開かざる時如何。」答へて云く、「開。」金鎖未だ鳴かざる時如何。答へて云く、「這箇の音響無し。」鳴いて後如何。答へて云く、「各自に時を知る」と。投子平生の問答總て此の如し。看よ趙州問ふ、「大死底の人卻つて活する時如何。」他便ち道く、「夜行を許さず、明に投じて須らく到るべし。」直下に擊石火の如く、閃電光に似たり、他の向上の人に還して始めて得ん。大死底の人、都て佛法の道理、玄妙得失、是非長短無し。這裏に到つて、只だ慙麼に休し去る、古人之を平地上死人無數、荆棘林を過得せば是れ好手と謂ふ。也た須らく是れ那邊を透過して始めて得べし。然も是の如しと雖も、如今の人這般の田地に到ること早く是れ得難し。或は若し依倚有り解會有らば、則ち沒交涉。菴和尚は之を見不淨潔と謂ひ、五祖

その音響を發せざる知るべし。無孔笛に同じ。
④ 蒸餅は饅頭なり。
⑤ 以下問答の因縁を引き、投子の語脈元來此くの如きことを知らしむ。
⑥ 靈門大師上堂の語、又竹庵珪禪師小參の語なり。
⑦ 眞如の菴和尚。

先師は之を命根不斷と謂ふ。須らく是れ大死一番して、卻つて活して始めて得べし。①浙中の永光和尚道く、「言録若し差はゞ郷關萬里、直に須らく懸崖に手を撒して、自ら肯ふて承當すべし。絶後に再び甦らば、君を欺くことを得ず、非常の旨、人焉んぞ度さんや。」趙州の問意此の如し、投子は是れ作家、亦他の所問に辜負せず、只た是れ情を絶し迹を絶す、妨げず會し難きことを。只だ面前の些子を露す、所以に ②古人道く、「親切を得んと欲せば、問を將ち來つて問ふ莫れ、問は答處に在り、答は問處に在り」と。若し投子に非ずんば、趙州に問せられて、也た大いに酬對し難からん。只だ他是れ作家の漢なるが爲に、擧著すれば便ち落處を知る。頌に云く、

【頌】 活中に眼あり還つて死に同じ。(兩ながら相知らず、翻來覆去、若し蘊藉にあらずんば、争でか這の漢の細素を辨得せん。)藥忌何ぞ須ひん作家を鑑みること。(若し驗過せずんば、争でか端的を辨せん。遇著して試みに一嚙を與へよ、又且つ何ぞ妨げん、也た問過せんことを要す。)古佛尚ほ言ふ曾て未だ到らずと。(頼に是れ伴有り、千聖も也た傳へず、山僧も亦知らず。)知らず誰か塵沙を撒くことを解す。(即今也た少かず、開眼も也た着、合眼も也た着、闍黎恁麼に擧す、什麼の處にか落在する。)

【評唱】 活中に眼有り還つて死に同じと。雪竈は是れ有ることを知る底の人、所以に敢て頌す。

① 古人道く、「他活句に參じて、死句に參せざれ」と。雪竈道く、「活中に眼有り還つて死漢に同じく相似たり、何ぞ曾て死せん、死中に眼を具して、活人に如同す」と。② 古人道く、「死人を殺し盡して、方に活人を見る、死人を活し盡して、方に死人を見る」と。趙州是れ活底の人、故に死問を作して、投子を驗取す。③ 藥性の忌む所の物を、故に將ち去つて試験するが如くに相似たり。所以に雪竈道く、「藥忌何ぞ須ひん作家を鑑みること。」此れ趙州の問處を頌す、後面は投子を頌す。古佛尚ほ言ふ曾て未だ到らずと。只だ這の大死底の人卻つて活する處、古佛も亦曾て到らず、天下の老和尚も亦曾て到らず。任ひ是れ釋迦老子、碧眼の胡僧も、也た須らく再參して始めて得べし。所以に道ふ、「只だ老胡の知を許して、老胡の會を許さす。」雪竈道く、「知らず誰か塵沙を撒くことを解す」と。見すや僧長慶に問ふ、「如何なるか是れ善知識の眼。」慶云く、「願有つて沙を撒せず。」保福云く、「更に撒す可らず」と。天下の老和尚、曲柔木床上に據つて、棒を行じ喝を行じ、拂を豎て牀を敲き、神通を現じ主宰と作るも、盡く是れ沙を撒す。且く道へ、如何が免れ得ん。

- ① 徳山縁密禪師。
- ② 雲門の語なり。
- ③ 鐵を以て地黃、芍藥の類に當るときは、藥性即ち消するが如し。藥を服用するとき物忌みするをいふ。
- ④ 頌一に眼に作る、從ふべし、音にて書き誤りしならん、頌は去聲、唐音「よふん」、眼は上聲、唐音「よふん」、二字上去の差にて音相同じ。

第四十二則

垂示に云く、單提獨弄、帶水拖泥。敲唱俱に行ず、銀山鐵壁。擬議すれば即ち獨體前に鬼を見る。尋思すれば則ち黑山下に打坐す。明明たる杲日天に麗き、颯颯たる清風地を匝る。且く道へ、古人還つて誦詠の處ありや。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、龐居士、藥山を辭す。(この老漢作怪也)山十人の禪客に命じ、相送つて門首に至らしむ。(也た他を輕せず、是れ什麼の境界ぞ、也た須らく是れ端倪を識る底の衲僧にして始めて得べし。)居士空中の雪を指して云く、「好雪片片、別處に落ちず。」(風無きに浪を起す、指頭に眼有り、這の老漢言中に響有り。)時に全禪客ありて云く、「什麼の處にか落在す。」(中れり、相隨來也、果然として鈎に上り來る。)士打つこと一掌。(着、果然として勾賊破家。)全云く、「居士也た草草なることを得ざれ。」(棺木裏に瞠眼す。)士云く、「汝恁麼に禪客と稱す。閻老子未だ汝を放さざる」と在らん。(第二杓の惡水潑ぎ了る、何ぞ止だ閻老子のみならん、山僧が這裏も也た放過せじ。)全云く、「居士作麼生。」(籠心改めず、又是れ棒を喫せんことを要するか、這の僧頭より尾に到るまで便を着す。)士又打つこと一掌して云く、「果然、雪上に霜を加ふ、棒を喫し了つて欸を呈せよ。」(眼見て盲の如く、口説いて啞の如し。)(更に斷和の句有り、又他の與に判語を讀む。)雪竇別して云く、「初問の處にて但雪團を握つて便ち打せん。」(是は則ち是、賊過ぎて後弓を張る、也た漏逗少から

【本則】東嶺禪師云く、四十二則、藥山龐翁自ら他に異なる用處、作家も亦迷ふことを明す。

す、然も是くの如しと雖も、箭鋒相拄ふを見んと要す、爭奈せん鬼窟裏に落在し了れることを。)【評唱】龐居士、馬祖石頭兩處に參じて頌有り、初め石頭に見えて便ち問ふ、「萬法と侶爲らざる、是れ什麼人ぞ。」聲未だ斷えざるに、石頭に口を掩卻せられて、箇の省處有り。頌を作つて道く、「日用事別無し、唯だ吾れ自ら偶諧す。頭頭取捨に非ず、處處張乖沒し。朱紫誰か號を爲す、青山點埃を絶す。神通并に妙用、水を運び及び柴を搬ぶ」と。後に馬祖に參じて、又問ふ、「萬法と侶爲らざる、是れ什麼人ぞ。」祖云く、「爾が一口に西江水を吸盡せんを待つて、即ち汝に向つて道はん。」士豁然として大悟し、頌を作つて云く、「十方同聚會、箇箇學無爲、此は是れ選佛場、心空及第して歸る。」(佗は是れ作家なるが爲に、後に) 列刹相望んで、至る所競ひ譽む。藥山に到つて、盤桓すること既に久し、遂に藥山を辭す、山佗に至重して、十人の禪客に命じて相送らしむ。是の時雪の下るに値ふ、居士雪を指して云く、「好雪片片、別處に落ちず。」全禪客云く、「什麼の處にか落在す。」士便ち掌す、全禪客既に令を行すること能はず、居士令一半を行す。令行すと雖も、全禪客恁麼に酬對す。也た是れ佗の落處を知らざるにはあらず、各機鋒有つて、卷舒同じからず、然も居士の處に到らざること有り、所以に他の 架下に落ち

【會元第三に襄州の居士龐蘊は衡州衡陽縣の人なり、字は道玄、世々儒業を本とす、少うして塵勞を悟りて、眞諦を志求す、唐の貞元の始め、石頭に謁す、乃ち問ふ云々、後丹叢と友たり。偶諧の二字共に合の義なり。自悟の境界。張乖は順逆の義。朱紫は高官の着るもの。幻住曰く、列刹は猶ほ諸山と言ふが如し、諸寺なり。盤桓は韻會に久なり。馬の屯の卦の註に進まざるの貌。

て他の 發中を出で難し。居士打し了つて、更に與に道理を説いて云く、
「眼見て盲の如く、口説いて啞の如し」と。雪竇前語に別して云く、「初問
の處に但だ雪團を握つて便ち打たん」と。雪竇恁麼に他の問端に辜かざら
んことを要す、只だ是れ機遲し。慶藏主道く、「居士の機掣電の如し、備が
雪團を握るを等たば幾時にか到らん。聲に和して便ち應じ、聲に和して打
たば、方に始めて勦絶せん」と。雪竇自ら佗の打處を頌して云く、

【頌】 雪團打雪團打、爭奈せん第二機に落在すること。拈出するに勞
せず、頭上漫漫脚下漫漫。龐老の機關沒可把。(往往に人の知らざる有り、

① 架は弓矢をつがひたる處を云ふ、八十一則の評に、古石梁有り、弓矢を架して坐す、知るべし、架下はした手になりたるを云ふ、負け口なり、受け身なり、又矢先きに向ひたる意。
② 莊子に云く、羿の發中の中央に遊ぶ者は、中るべき地なり、然るに而も中らざるは、命なり、注に發中は弓を張りて射る箭端、直る所の地なり。

只だ恐らくは不恁麼ならんことを。)天上人間自知せず。(是れ什麼の消息ぞ、雪竇還つて知る麼。)眼裏耳裏絶瀟灑。(箭鋒相拄ふ、眼見て盲の如く、口説いて啞の如し。)瀟灑絶す。(作麼生、什麼の處に向つてか龐老と雪竇とを見ん。)碧眼の胡僧も辨別し難し。(達磨出で來るとも備に向つて什麼とか道はん、打して云く、閑黎什麼と道ふぞ、一坑に埋卻せん。)

【評唱】 雪團打雪團打、龐老の機關沒可把と。雪竇、居士の頭上に在つて行かんことを要す、古人雪を以て一色邊の事を明す。雪竇の意に道く、「當時若し雪團を握つて打たん時、居士縦ひ如何なる機關有るも、亦構得し難からん。」雪竇自ら他の打處に誇る、殊に知らず落節の處有ることを。天上人間自知

せず、眼裏耳裏絶瀟灑。眼裏も也た是れ雪、耳裏も也た是れ雪、正に一色邊に住せず、亦之を普賢の境界一色邊の事と謂ひ、亦之を打成一片と謂ふ。雲門道く、「直に盡乾坤大地、纖毫の過患無きことを得るも、猶は轉句と爲す、一色を見ざるも、始めて是れ半提。若し全提を要せば、須らく向上の一路有ることを知つて、始めて得べし。」這裏に到つて、須らく是れ大用現前、針割不入にして、他人の處分を聽かざるべし。所以に道く、「他活句に參じて死句に參せざれ」と。① 古人道く、「一句合頭の語、萬劫の繫驢概、什麼の用處か有らん。」雪竇此に到つて頌殺し了れり。復た機を轉じて道ふ、只だ此の瀟灑絶、直饒ひ是れ碧眼の胡僧も、也た辨別し難し、碧眼の胡僧すら尙は辨別し難し、更に山僧をして箇の什麼をか説かしめん。

① 船子の語なり。

第四十三則

垂示に云く、乾坤を定むるの句、萬世共に遵ふ。虎兇を擒ふの機、千聖も辨する莫し。直下更に纖翳なく、全機處に隨つて齊しく彰る。向上の鉗鎚を明めんと要せば、須らく是れ作家の爐鞴なるべし。且く道へ、從上來還つて恁麼の家風ありや也た無や。試みに擧す看よ。

【本則】 擧す、僧洞山に問ふ、「寒暑到來、如何が廻避せん。」(是れ這箇の時節にあらず、劈頭劈面、什麼の處にか在る。)山云く、「何ぞ無寒暑の處に向つて去らざる。」(天下の人尋ぬるに得ず、身を藏

して影を露す、蕭何賣卻す假銀城。僧云く、「如何なるか是れ無寒暑の處。」(一船の人を賤殺す、他に随つて轉ず、也た一釣に便ち上る。)山云く、「寒時は閻黎を寒殺す、熱時は閻黎を熱殺す。」(眞偽を掩はず、曲直を藏さず、崖に臨んで虎兇を看る、特地一場の愁、大海を掀翻し、須彌を踢倒す、且く道へ洞山什麼の處にか在る。)

【評唱】 黃龍の新和尚拈じて云く、「洞山袖頭に領を打し、腋下に襟を刺る、爭奈せん這の僧甘はざることを。如今箇の出で來つて黃龍に問ふこと有らば、且く道へ、如何が支遣せん。」良久して云く、「安禪は必ずしも山水を須ひず、心頭を滅卻すれば火も自ら涼し。」諸人且く道へ、洞山の圍績、什麼の處にか落在する。若し明辨得せば、始めて洞山下の五位、回互正偏、人を接すること、妨げず奇特なることを知らん。這の向上の境界に到つて、方に能く此の如く安排を消ひず、自然に恰好なり。所以に道く、「正中偏、三更初夜月明の前、怪むこと莫れ相逢ふて相識らざることを、隠隠として猶ほ舊日の妍を懐く。偏中正、失曉の老婆古鏡に逢ふ、分明觀面更に眞無し、更に頭に迷うて還つて影を認むることを休めよ。

【本則】 東嶽禪師云く、四十三則、洞山向上の宗旨、自ら雲門林才し亦此れより出づる有るを明す、曹洞宗の奥旨は、特に此の則中に在り、爾正受老人曰く、「但だ洞山五位の頌を看よ、毫髮も餘人の説を取ることを莫れ。」

- ① 黃龍の死心悟禪師は、南嶽下十三世、黃龍祖心の法嗣、會元十七に傳あり。
- ② 洞山眞价は、青原下四世、雲巖晟の法嗣、傳燈十五、會元十三に傳あり。方語に尋常の剪裁、言ふは衣を裁するの法、袖幅の中より領を打出して、腋下に於て斜に裁つて襟を出すなり。
- ③ 杜荀鶴夏日悟空上人の院に題して云く、「三伏門を閉ちて一雨を披す、焚れて松竹の房窓を蔽する無し、安禪は必ずしも山水を須ひず、心頭を滅却すれば火も自ら涼し、今此の二句を用ふ。
- ④ 圍績は「わな」「てくだ」と譯す。
- ⑤ 五位は人天眼目に説いて詳かなり。
- ⑥ 失曉は天明を「とりはづしたる」なり。
- ⑦ 楞嚴第四に、演若達多鏡中已れが面目を見ざることを嘆責して、狂走するの故事を用ふ。
- ⑧ 宗門支派圖曹洞宗旨に云く、前朝姓は李、名は知章と云ふもの、如き、利舌の用を得たり、凡そ談論を爲すに人をして舌を結び口を杜ざさしむ。
- ⑨ 折合は屈曲合綫の理、又畢竟の義なり。

正中來、無中路有り塵埃を出づ、但だ能く當今の諱に觸れず、也た前朝斷舌の才に勝れり。偏中正、兩刃鋒を交へて避くることを須ひず、好手還つて火裏の蓮に同じ、宛然として自ら衝天の氣有り。兼中到、有無に落ちず誰か敢て和せん、人人盡く常流を出でんと欲す、折合して還つて炭裏に歸して坐す。浮山の遠録公、此の公案を以て、五位の格を爲る、若し一則を會得せば、餘は自然に會し易し。巖頭道く、「水上の葫蘆子の如くに相似たり、捺著すれば便ち轉ず、殊に絲毫の氣力を消ひず。」曾て僧有り、洞山に問ふ、「文殊普賢來參の時如何。」山云く、「水牯牛の群裏に起向し去らん。」僧云く、「和尚地獄に入ること箇の如し。」山云く、「全く佗の力を得たり。」洞山道く、「何ぞ無寒暑の處に向つて去らざる」と、此は是れ偏中正。僧云く、「如何なるか是れ無寒暑の處。」山云く、「寒時は閻黎を寒殺し、熱時は閻黎を熱殺す、此は是れ正中偏。正なりと雖も卻つて偏、偏なりと雖も卻つて圓、曹洞録中に備に子細を載す。若し是れ臨濟下ならば、許多の事無し、這般の公案、直下に便ち會す。有る者は道く、「大好無寒暑」と、什麼の巴鼻か有らん。古人道く、「若し劔刃上に向つて走らば則ち快ならん、

若し情識の上に向つて見

ば則ち遅し。「見すや僧、翠微に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」微云く、「人無きを待つて來れ、爾に向つて道はん。」遂に園中に入つて行く。僧云く、「此間人無し、請ふ和尚道へ。」微竹を指して云く、「這の一竿竹恁麼に長きことを得たり、那の一竿竹恁麼に短きことを得たり」と。其の僧忽然として大悟す。又曹山、僧に問ふ、「恁麼に熱す、什麼の處に向つてか廻避せん。」僧云く、「鑊湯爐炭裏に廻避せよ。」山云く、「鑊湯爐炭裏如何が廻避せん。」僧云く、「衆苦も到ること能はず、看よ他の家裏の人、自然に他の家裏の人の説話を會することを得。」雪竈他の家裏の事を用ひて頌出す。

【頌】垂手還つて萬仞崖に同じ。(是れ作家にあらずんば誰か能く辨得せん、何の處か圓融せざらん、王勅既に行れて諸侯道を避く。)正偏何ぞ必ずしも安排に在らん。(若し是れ安排せば、何の處にか今日有らん。作麼生か兩頭に涉らざる、風行けば草偃し、水到れば渠成る。)琉璃古殿明月照す。(圓陀陀地、切に忌む影を認むることを、且く當頭なること莫れ。)忍俊たる韓獝空しく階に上る。(是れ這回のみにあらず、蹉過了也、塊を逐うて什麼にか作ん、打して云く、備這の僧と同參。)

【評唱】曹洞下に 出世不出世有り、垂手不垂手有り、若し不出世なれば、目に雲霄を視ん、若し出世なれば、便ち灰頭土面。目に雲霄を視るは、即ち是れ萬仞峯頭、灰頭土面は、即ち是れ垂手邊の事なり。有る時は灰頭土面にして、即ち萬仞峯頭に在り、有る時は萬仞峯頭にして、即ち是れ灰頭土面、其の實は廊に入つて手を垂ると孤峯に獨立すると一般なり。歸源了性と 差別智と異なること無し。切に忌む兩極の會を作すことを、所以に道ふ、「垂手還つて萬仞崖に同じ」と。直に是れ備が淡泊の處無し、正偏何ぞ必ずしも安排に在らん、若し用ふる時に到らば自然に此の如し、安排に在らず、此は洞山の答處を頌す。後面に道ふ、「琉璃古殿明月を照す、忍俊たる韓獝空しく階に上る。」此は正に這の僧の言語を逐うて走ることを頌す。洞下に此の石女、木馬、無底籃、夜明珠、死蛇等の十八般有り、大綱只だ正位を明す。月の琉璃古殿を照すが如きんば、圓影有るに似たり。洞山答へて道く、「何ぞ無寒暑の處に向つて去らざる。」其の僧一に韓獝の塊を逐うて、連忙して階に上り、其の月影を捉ふるに似て相似たり。又問ふ、「如何なるか是れ無寒暑の處。」山云く、「寒時は闇黎を寒殺し、熱時は闇黎を熱殺す」と。韓獝の塊を逐うて、走つて階上に到つて、又卻つて月影を見ざるが如し。韓獝は乃ち戰國策に出づ。云く、「韓氏の獝は駿狗なり、中山の兔は狡兔なり」と。是れ其の獝方に能く其の兔

① 拖泥帶水人の爲にする故に。② 根本智。③ 後得智。④ 安排の二字、莊子に出づ、注に「排は定なり。」⑤ 祖庭事苑第一に云く、「盧は黒なり、黒狗を謂ふ、齊人韓國狗を市に相る、遂に狗有りて號鳴す、而して國其の善を知る。」⑥ 寶鏡三昧に云く、「木人方に歌ひ、石女起つて舞ふ。」⑦ 曹山正中來の頌に曰く、「談裏寒氷結び、楊花九月飛ぶ、泥牛水面に吼え、木馬風を逐うて嘶く。」⑧ 宗門統要續集十七に、杭州佛日和尙、因に夾山大いに普請す、維那師を請じて茶を送らしむ云々、師云く、「大衆鶴望す、請ふ師一言せよ。」山云く、「路に死蛇に逢はば、打殺すること莫れ、無底の籃子に

を尋め、雪竇引いて以て這の僧に喩ふ。只だ諸人の如きんば、還つて洞山爲人の處を識る麼。良久して云く、「甚の兔子をか討ねん。」

第四十四則

【本則】 擧す、禾山垂語して云く、「習學之を聞と謂ひ、絶學之を隣と謂ふ。天下の稍僧跳不出、無孔の鐵鎚一箇の鐵槩子。此の二を過ぐる者、是を眞過と爲す。」(頂門上に一隻眼を具して什麼か作ん。僧出で、問ふ、「如何なるか是れ眞過。」)「什麼と道ふぞ、一筆に勾下す、一箇の鐵槩子有り。」山云く、「解打鼓。」(鐵槩、鐵蒺藜、確確。又問ふ、「如何なるか是れ眞諦。」)「什麼と道ふぞ、兩重の公案、又一箇の鐵槩子有り。」山云く、「解打鼓。」(鐵槩、鐵蒺藜、確確。又問ふ、「即心即佛は問はず、如何なるか是れ非心非佛。」)「什麼と道ふぞ、這箇の坵堆、三段同じからず、又一箇の鐵槩子有り。」山云く、「解打鼓。」(鐵槩、鐵蒺藜、確確。又問ふ、「向の上の人來る時、如何が接せん。」)「什麼と道ふぞ、他の第四杓の惡水に遭ひ來れり。又一箇の鐵槩子有り。」山云く、「解打鼓。」(鐵槩、鐵蒺藜、確

盛り勝ち歸れ、云々。」
① 會元十四同安志の章に云く、先同安將に示寂せんとす、上堂して曰く、「多子塔前宗子秀づ、五老峯前の事如何」と、是くの如く三擧すれども、未だ對ふる者有らず、未後に師出でて曰く、「夜明簾外排班して立つ、萬里歌謠して道太平、」安曰く、「須らく是れ道の驪漢にして始めて得べし。」
② 會元十三青林慶の章に曰く、問ふ、「學人徑に往く時如何、」師云く、「死蛇大路に當る、手に勤む、當頭すること莫れ云云。」
③ 幻住曰く、「洞宗に十八般妙語の一書あり。」
④ 戰國策に云く、齊、魏を伐たんと欲す、淳于髡齊王に謂つて曰く、「韓子の盧は天下の疾犬なり、東郭の俊は海内の狡兔なり、韓子東郭の俊を逐ふ、

確、且く道へ什麼の處にか落在す、朝に西天に到り、暮に東土に歸る。)

【評唱】 禾山垂示して云く、「習學之を聞と謂ひ、絶學之を隣と謂ふ、此の二を過ぐる者、是を眞過と爲す」と。此の一則の語、寶藏論に出でたり、學無學に至る、之を絶學と謂ふ。所以に道ふ、「淺く聞いて深く悟る、深く聞いて悟らず、之を絶學と謂ふ。」一宿覺道く、「吾れ早年より來た學問を積む、亦曾て疏を討ね經論を尋ぬ。習學既に盡く、之を絶學無爲の閑道人と謂ふ。絶學に至るに及んで、方に始めて道と相近し、直に此の二學を過ぐることを得る、是を眞過と謂ふ。」其の僧也た妨げず明敏なることを。便ち此の語を拈じて禾山に問ふ、山云く、「解打鼓」と。所謂言無味、這箇の公案を明めんと欲せば、須らく是れ向上の人にして、方に能く此の語理性に涉らず、亦議論の處無きことを見る。直下に便ち會して、桶底の脱するが如くに相似たらば、方に是れ稍僧安穩の處、始めて祖師西來意に契得せん。所以に雲門道く、「雪峯の棍毬、禾山の打鼓、國師の水碗、趙州の喫茶、盡く是れ向上の拈提。」又問ふ、「如何なるか是れ眞諦。」山云く、「解打鼓。」眞諦は更に一法を立てず、若し是れ俗諦は萬物俱に備る。眞俗無二、是れ

山を環ること三たび、山に懸ること五たび、兎前に極り、犬後に疲る、犬兎俱に疲れて、各々其の處に死す、田父見て、勞苦無うして其の功を擲にす、今齊魏久しく相持して兵を頼し、衆を繁さば、恐らくは強秦大楚其の後に乘じて、田父の功有らん。」
【本則】 東嶺禪師云く、四十四則、即ち宗門向上の大事、禾山用ひ得て人に過ぐるを明す。
① 吉州禾山の無殿禪師は、青原下六世九峰慶の法嗣、傳燈十七、會元第六に傳あり。
② 寶藏論廣照空有品の語なり、開とは、人它方の事を聞いて但だ信じて親しくせざるが如きを云ふ、隣は近なり、生死涅槃二際平等なりと了じて取らず捨てざるを云ふ、前の二の者を過ぐるを、名けて無上

かん。(鐵樵子須らく這の老漢に還して始めて得べし、一子親み得たり。)君に報じて知らしむ。(雪竇も也た未だ夢にだも見ざること有り、雪上に霜を加ふ、備還つて知る麼。)莽鹵なること莫れ。(也た些子有り、備備伺伺。)甜き者甜く苦き者は苦し。(答話を謝す、錯つて注脚を下す、好し三十棒を與ふるに、棒を喫し得るや也た未だしや、便ち打つ、舊に依つて黒漫漫。)

【評唱】 歸宗一日、普請して石を拽く、宗、維那に問ふ、「什麼の處にか

去る。」維那云く、「石を拽き去る。」宗云く、「石は且く汝が拽くに從す、即ち中心の樹子を動著することを得ざれ」と。木平凡そ新到の至る有れば、

先づ三轉の土を般ばしむ。木平頗有り、衆に示して云く、「東山は路窄く西山は低し、新到三轉の泥を辭すること莫れ、嗟す汝が途に在つて目を経ること久し。明明に曉らすんば卻つて迷と成る。」後來僧有り、問うて云く、

「三轉の内は即ち問はず、三轉の外は事作麼生。」平云く、「鐵輪の天子寶中の勅。」僧無語、平便ち打す。所以に道ふ、「一拽石二般土。機を發する」とは、須らく是れ千鈞の弩なるべし。雪竇千鈞の弩を以て此の事に喩へて、他の爲人の處を見せしめんと要す。三十斤を一鈞と爲す、一千鈞は則ち三萬斤なり。若し是れ獐龍虎狼の猛獸には、方に此の弩を用ふ、若し是れ 鷓鴣小可の物には、必ず 輕しく發す可らず。所以に千鈞の弩は、驥鼠の爲に

① 歸宗智常禪師は、南嶽下二世馬祖の法嗣なり、傳燈第七、會元第三に傳あり。
② 木平善道は、青原下六世盤龍文の法嗣、傳燈二十、會元第六に傳あり。
③ 鐵輪は四輪王の一なり。
④ 文選鷓鴣賦に云く、「鷓鴣は小鳥なり、蒿萊の間に生じ、藩籬の間に長す。」和名佐々木。

機を發せず。象骨老師曾て毬を輓す、即ち雪峯一日玄沙の來るを見て、三箇の木毬一齊に輓す。玄沙便ち 斫牌の勢を作す、雪峯深く之を肯ふ。然も總て是れ全機大用の處なりと雖も、俱に禾山の解打鼓に如かず、多少か 徑截なる、只た是れ會し難し。所以に雪竇道く、「争か禾山の解打鼓に似かん」と。又人の只だ話頭上に在つて活計を作して、來由を知らずして、莽莽鹵鹵たらんことを恐る。所以に道く、「君に報じて知らしむ、莽鹵なること莫れ」と。也た須らく是れ實に這般の田地に到つて始めて得べし。若し莽鹵ならざらんことを要せば、甜き者は甜く苦き者は苦し。雪竇然も是の如く拈弄すと雖も、畢竟也た跳不出。

① 斫牌は一説に、毬を拒ぐ勢を作す。又斫牌の義なり。
② 根源を直截す。

第四十五則

垂示に云く、道はんと要すれば便ち道ふ、舉世雙び無し。行すべきに當つては即ち行す、全機讓らず。擊石火の如く、閃電光に似たり。疾焰過風、奔流度及。向上の鉗鎚を拈起するも、未だ免れず鋒を亡じ舌を結ぶことを。一線道を放つて、試みに舉す看よ。

【本則】 舉す、僧、趙州に問ふ、「萬法一に歸す、一何れの處にか歸す。」(這の老漢を撈着す、堆山積嶽、切に忌む鬼窟裏に向つて活計を作すことを。)州云く、「我れ青州に在つて、一領の布衫を作る、

重きこと七斤。」(果然として七縱八横、漫天の網を拽卻す、還つて趙州を見るや、衲僧の鼻孔曾て拈得す、還つて趙州の落處を知るや、若し這裏に見得せば便乃ち天上天下唯我獨尊、水到れば渠成り、風行けば草偃す、苟し或は未だ然らずんば老僧爾が脚跟に在り。)

【評唱】 若し一撃に便ち行く處に向つて會し去らば、天下の老和尚の鼻孔、一時に穿卻せん。爾を奈何ともせず、自然に水到り渠成る、苟し或は躊躇せば、老僧爾が脚跟下に在らん。佛法省要の處、言多きに在らず、語繁きに在らず、只だ這の僧の趙州に問ふが如きんば、「萬法一に歸す、一何の處にか歸す。」他卻つて答へて道く、「我れ青州に在つて、一領の布衫を作る、重きこと七斤」と。若し語句上に向つて辨せば、錯つて定盤星を認む。語句上に向つて辨せずんば、爭奈せん卻つて恁麼に道ふことを。這箇の公案、見難しと雖も卻つて會し易し、會し易しと雖も卻つて見難し。難きときは則ち銀山鐵壁、易きときは則ち直下惺惺、爾が計較是非の處無し。此の話、普化の來日大悲院裏に齋有り、道ふ話と更に兩般無し。一日僧趙州に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」州云く、「庭前の柏樹子。」僧云く、「和尚境を將て人に示すこと莫れ。」州云く、「老僧曾て境を將て人に示さず。」看よ他恁麼に、極則轉不得の處に向つて

【本則】

東嶺禪師云く、四十五、趙州平生受用、只だ是れ向上出身の一路を明すのみ。

會元第四普化の章に云く、師北地に於て行化す、或は城市或は塚間、「鐺を振ふて曰く、「明頭來や明頭打、暗頭來や暗頭打、四方八面來や旋風打、虚空來や連架打。」一日臨濟僧をして投住して、擔に不恁麼に來る時如何と云はしむ、師托開して云く、「來日大悲院裏に齋有り」と、僧回つて濟に舉似す、濟云く、「我れ從來此の漢を疑著す。」

轉得して、自然に蓋天盖地なることを。若し轉不得ならば、途に觸れて滯を成さん。且く道へ、他佛法の商量有りや也た無しや。若し他佛法有りと道はば、他又何ぞ曾て心と説き性と説き、玄と説き妙と説かん。若し他佛法の旨趣無しと道はば、他又曾て爾が問頭に辜負せず。豈に見ずや僧、木平和尙に問ふ、「如何なるか是れ佛法の大意。」平云く、「這箇の冬瓜許の如く大いなり」と。又僧、古徳に問ふ、「深山懸崖、迥絶無人の處、還つて佛法有りや也た無しや。」古徳云く、「有り。」僧云く、「如何なるか是れ深山裏の佛法。」古徳云く、「石頭大底は大、小底は小」と。看よ這般の公案、諸誰什麼の處にか在る。雪竇他の落處を知つて、故に義路を打開して、爾が與に頌出す。

① 廬山歸宗道詮禪師、後に筠陽の九峰に住す、僧問ふ、「九峰山中還つて佛法有りや無や、」師云く、「有り、僧云く、「如何なるか是れ九峯山中の佛法、」師云く、「山中の石頭、大底は大、小底は小。」

【頌】 編辟曾て揆す老古錘。(何ぞ必ずしも這の老漢を撈著せん、揆撈して什麼の處に向つてか去る。) 七斤衫重し幾人か知る。(再來半文錢に直らず、直に得たり口區擔に似たることを。又卻つて他に一籌を贏ち得らる。) 如今拋擲西湖の裡。(雪竇の手脚に還つて始めて得ん、山僧も也た要せず。) 下載の清風誰にか付與せん。(自古自今、且く道へ、雪竇他と酬唱するか他の與に注脚を下すか、一子親み得たり。)

【評唱】 十八問の中、此れ之を編辟問と謂ふ。雪竇道く、「編辟曾て揆す老古錘」と。萬法を編辟して、一致に歸せしむ、這の僧他の趙州を揆撈せんことを要す。州也た妨げず作家なることを。轉不轉の處

に向つて、出身の路有り、敢て大口を開いて便ち道ふ、「我れ青州に在つて、一領の布衫を作る、重きこと七斤」と。雪竇道く、「這箇七斤の布衫、能く幾人有つてか知らん。如今西湖裏に抛擲す。」萬法一に歸す、一も亦要せず、一時に西湖裏に抛在す。雪竇洞庭の翠峰に住す、西湖有り、「下載の清風誰にか付與せん」と。此は是れ趙州衆に示す、「爾若し向北より來らば、爾が與に上載せん。爾若し向南より來らば、爾が與に下載せん。爾若し雪峯雲居より來らば、也た是れ箇の擔板漢」と。雪竇道く、「此の如き清風、阿誰に付するに堪へん。」上載は爾が與に心と説き性と説き、玄と説き妙と説く、種種の方便なり。若し是れ下載は、更に許多の義理玄妙無し。有る底は一擔の禪を擔ふて、趙州の處に到り、一點も也た使ひ著す。一時に他の與に打疊して、灑灑落落として、一星事無からしむ。之を悟了還つて未悟の時に同じと謂ふ。如今の人盡く無事の會を作す。有る底は道ふ、「迷無く悟無し、更に求むることを要せず。只だ佛未だ出世せざる時、達磨未だ此土に來らざる時の如きんば、恁麼ならんばある可らざるなり。佛の出世を用て什麼をか作ん、祖師更に西來して什麼をか作ん。」總に此の如くならば、什麼の干渉か有らん、也た須らく

①太平御覽に云く、零龍山一に射的の山と名く、仙人有り、鶴をして箭を取らしむ、有る時一箭を失ふ、之を求むれども得ず、傍に一樵子有り、箭を求めて仙人に與ふ、仙人云く、「何を以てか之に報答せん、樵子云く、「多歳柴を斫りて舟に棹す、送迎風に難む、仙人之に酬ゆるに東西南北の風を以てす、東南の風、之を上載と謂ひ、西北の風、之を下載と謂ふ。又從容錄註に云く、載は運なり、荷を舟につむを上載と云ひ、荷を舟より下ろすを下載と謂ふ、今は後説を取る。

②打疊は「たたづける」と譯す。

③恁麼は俗に「此くの如し」と同じ。

是れ大徹大悟し了つて、舊に依つて山は是れ山、水は是れ水、乃至一切萬法、悉く皆成現して、方に始めて箇の無事底の人と作るべし。見すや龍牙道く、「學道は先づ須らく悟由有るべし、還つて曾て快龍舟を鬪はしむるが如し。然も舊閑田地に閑くと雖も、一度嵐ち來つて方に始めて休す」と。只た趙州這箇七斤の布衫の話子の如きんば、看よ他の古人恁麼に道ふ、金の如く玉の如くなることを。山僧恁麼に説き、諸人恁麼に聽く、總て是れ上載。且く道へ、作麼生か是れ下載、三條椽下に看取せよ。

第四十六則

垂示に云く、一棧にして便ち成す、凡を超え聖を越ゆ。片言にして折む可し、縛を去り粘を解く。氷凌上に行き、劍刃上に行るが如し。聲色堆裏に坐し、聲色頭上に行く。縱横妙用は則ち且く置く、刹那に便ち去る時は如何。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、鏡清僧に問ふ、「門外是れ什麼の聲ぞ。」(等閑に一釣を垂る、聾を患へずんば問うて什麼ぞ。)僧云く、「雨滴聲。」(妨げず實頭なることを、也た好箇の消息。)清云く、「衆生顛倒して己に迷うて物を逐ふ。」(事生せり、其の便を得るに慣ふ、鏡鈎搭索、他の本分の手脚に還

①荆楚記に云く、「屈原端午の日を以て、汨羅に死す、人其の死を傷んで、舟楫を以て之を極む、今に至りて龍舟の競渡、是れ其の遺俗なり。」大信心を發せば大悟するに譬へる。

【本則】東嶺禪師云く、四十六則、返問工夫、亦向上の大事有り。

す。僧云く、「和尚作麼生。」（果然として敗缺を納る、槍を轉じ來れり、妨げず當り難きことを。卻つて槍頭を把つて倒に人を刺す。）清云く、「泊んど己に迷はず。」（咄、直に得たり分疎不下なることを。）僧云く、「泊んど己に迷はざる意旨如何。」（この老漢を撈著す、人を逼殺す、前箭は猶は軽く後箭は深し。）清云く、「出身は猶は易かるべし。脱體に道ふことは應に難かるべし。」（養子の縁、然も是の如しと雖も、徳山臨濟什麼の處に向つてか去る、喚んで雨滴聲と作さずんば、喚んで什麼の聲とか作ん。直に得たり分疎不下なることを。）

【評唱】 只だ這裏也た好し薦取するに、古人一機一境を垂示して人を接せんことを要す。一日鏡清、僧に問ふ、「門外是れ什麼の聲ぞ。」僧云く、「雨滴聲。」清云く、「衆生顛倒して、己に迷うて物を逐ふ。」又問ふ、「門外什麼の聲ぞ。」僧云く、「鶉鳩の聲。」清云く、「無間の業を招かざることを得んと欲せば、如來の正法輪を誘ふこと莫れ。」又問ふ、「門外什麼の聲ぞ。」僧云く、「蛇、蝦蟇を咬む聲。」清云く、「將に謂へり衆生苦」と。更に苦衆生有り。此の語前頭の公案と更に兩般無し、衲僧家這裏に於て透得し去らば、聲色堆裏に於て、妨げず自由なることを。若し透不得ならば、便ち聲色の所拘を被らん。這般の公案、諸方之を煅煉の語と謂ふ。若し是れ煅煉ならば、只だ心行と成る。他の古人爲人の處を見ず、亦喚んで聲色を透りて、一には道眼を明め、二には聲色を明め、三には心宗を明め、四には妄情を明め、五には ① 展演を明むと作す。然も妨げず子細なり、

① 展開演說。展演度門の説法なり。

爭奈せん窠臼の在る有り。鏡清恁麼に問ふ、「門外什麼の聲ぞ。」僧云く、「雨滴聲。」清卻つて道く、「衆生顛倒して、己に迷うて物を逐ふ」と。人皆錯り會して、喚んで故意に人を轉すと作す。且得沒交涉、殊に知らず鏡清爲人底の手、際有つて、膽大にして一機一境に拘はらず、忒煞だ眉毛を惜まざることを。鏡清豈に是れ雨滴聲なることを知らざらんや。何ぞ更に問ふを消ひん、須らく知るべし古人探竿影草を以て、這の僧を驗みんと要す。這の僧也た善く挨拶して便ち道ふ、「和尚又作麼生」と。直に得たり鏡清泥に入り水に入り道ふことを。泊んど己に迷はず、其の僧己に迷うて物を逐ふは則ち故に是。鏡清什麼と爲てか也た己に迷ふ、須らく知るべし、他を驗むる句中に、便ち出身の處有ることを。這の僧太だ慳慳、此の話を勸絶せんことを要して、更に問うて道く、「只だ箇の泊んど己に迷はずと云ふ意旨如何」と。若し是れ徳山、臨濟門下ならば、棒喝已に行せん。鏡清一線道を通じて、他に隨つて葛藤を打して、更に他に向つて道ふ、出身は猶は易かる可し、脱體に道ふことは應に難かるべし。然も恁麼なりと雖も、古人道く、「相續すること也た大いに難し」と。他の鏡清只だ一句に便ち這の僧の與に、脚跟下の大事を明す。雪竇の頌に云く、

【頌】 虚堂の雨滴聲。（從來間斷無し、大家這裏に在り。）作者酬對し難し。（果然として知らず、山僧從來是れ作者にあらず、權有り實有り、放有り收有り、殺活擒縱。）若し曾て流を入すと謂はば、（頭を刺し膠盆に入る、喚んで雨滴聲と作さずんば、喚んで什麼の聲と作さん。）依然として還つて不會。

(山僧幾くか曾て爾に問ひ來る、這の漆桶我に無孔の鐵鎚を還し來れ。) 會不會。(兩頭坐斷す、兩處分れず、這の兩邊に在らず。) 南山北山轉た秀霈(頭上脚下、若し喚んで雨聲と作さば則ち暗、喚んで雨聲と作さずんば喚んで什麼の聲とか作さん。這裏に到つて須らく是れ脚實地を踏んで始めて得べし。)

【評唱】 虚堂の雨滴聲、作者酬對し難し、若し喚んで雨聲と作さば、則ち是れ己に迷うて物を逐ふ。喚んで雨聲と作さずんば、又如何が物を轉せん。這裏に到つて、任ひ是れ作者も也た酬對し難し。所以に古人道く、

「見師と齊しうして、師の半徳を減す、見師に過ぎて、方に傳授するに堪へたり」と。又南院道く、「棒下の無生忍、機に臨んで師に譲らず、若し曾て流を入すと謂はば、依前として還つて不會」と。教中に道く、「初め聞中に於て、流を入し所を忘す、所入既に寂なれば、動靜の二相、了然として生ぜず」と。若し是れ雨滴聲と道はば、也た不是、若し是れ雨滴聲にあらずと道はば、也た不是。前頭に頌す、「兩喝と三喝と作者機變を知る」と。正に此の頌に類す。若し是れ聲色の流を入すと道はば、也た不是、若し喚んで聲色と作さば、依前として他の意を會せず。譬へば指を以て月を

① 楞嚴第二に云く、「一切衆生無始より來た、己に迷うて物と爲す、本心を失して物の爲に轉ぜらる云々。」
② 楞嚴第二に云く、「若し能く物を轉すれば、則ち如來に同じ。」
③ 馬祖の語なり。
④ 以下了然として生ぜずに至る、楞嚴第六の文、略疏に云く、「聞中は開根の中を指す、謂はゆる湛然不生滅の性なり、此の開性聲を逐うて外に流るれば、便ち無窮の過患有り、今乃ち流を入し聞の自性に返る、水の内に注いで念々

指すが如し、月是れ指にあらず、會と不會と、南山北山轉た秀霈たり。

第四十七則

垂示に云く、天何をか言ふや、四時行はる。地何をか言ふや、萬物生ず。四時の行はるゝ處に向つて、以て體を見る可し。萬物の生ずる處に於て、以て用を見る可し。且く道へ、什麼の處に向つてか衲僧を見得せん。言語動用、行住坐臥を離卻し、咽喉唇吻を併卻して、還つて辨得するや。

【本則】 擧す、僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ法身。」(多少の人疑著す、千聖も跳不出、漏逗少からず。) 門云く、「六不收。」(斬釘截鐵、八角の磨盤空裏に走る、靈龜尾を曳く、朕兆未分の時薦得するも、己に是れ第二頭、朕兆已に生じて後薦得せば、又第三首に落つ、若し更に言語上に向つて辨得せば且喜すらくは沒交渉。)

【評唱】 雲門道く、「六不收」と。直に是れ構し難し、若し朕兆未分の時に向つて構得するも、己に是れ第二頭、若し朕兆已生の後に向つて薦得せば、又第三首に落つ。若し言句上に向つて辨明せば、卒に摸索不著。且く畢竟何を以てか法身と爲さん、若し是れ作家底ならば、聊か擧著するを聞いて、別

息まざるが如し、一旦解心頓に絶して、法性に冥契するときは、則ち所入の相亡す、所入の相亡するときは、則ち所入寂なり、此の寂乃ち無生の眞理なり、本、動有ること無し、安んぞ靜有ることを得ん。故に曰く、「動靜の二相了然として生ぜず」と、長水云く、「入流は猶ほ返流のごとし。」
⑤ 秀霈は大雨の貌。
【本則】 東嶺禪師云く、四十七則、雲門の言句専ら向上の一事を導くことを明す。

起して便ち行かん。苟し或は佇思停機せば、伏して處分を聴け。太原の孚上座、本、講師爲り、一日座に登つて講する次、法身を説いて云く、「豎に三際を窮め、横に十方に亘る」と。一禪客有り、座下に在つて之を聞いて失笑す。孚、座を下つて云く、「某甲適來甚の短所か有る、願はくは禪者爲に説け看ん。」禪者云く、「座主、只だ法身量邊の事を講得して、法身を見ず。」孚云く、「畢竟如何してか即ち是ならん。」禪者云く、「暫く講を罷めて、靜室の中に於て坐す可し、必ず自ら見ることを得ん」と。孚其の言の如く一夜靜坐す、忽ち五更の鐘を打つを聞いて、忽然として大悟す。遂に禪者の門を敲いて云く、「我れ會せり」と。禪者云く、「爾試みに道へ看ん。」孚云く、「我れ今日より去つて、更に父母所生の鼻孔を將て扭捏せじ」と。又、教中に道く、「佛の眞法身、猶ほ虚空の若し、物に應じて形を現すること、水中の月の如し」と。又僧、夾山に問ふ、

① 金光明經四天王品の語。
② 法華方便品の語なり。

「如何なるか是れ法身。」山云く、「法身無相。」如何なるか是れ法眼。」山云く、「法眼瑕無し。」雲門道く、「六不收」と。此の公案、有る者は道ふ、「只だ是れ六根六塵六識、此の六皆法身より生ず、六根他を收し得ず」と。若し恁麼に情解せば、且喜すらくは沒交涉、更に雲門を帶累す。見んと要せば便ち見よ、爾が穿鑿の處無し。見ずや、教中に道く、「是の法は思量分別の能く解する所に非ず」と。他の答話多く人の情解を惹く、所以に一句中に須らく三句を具すべし、更に爾が問頭に辜負せず。時に應じ節に應ず、一言一句、一點一畫、妨げず出身の處有ることを。所以に道く、「一句透れば千句萬句一時

に透る」と。且く道へ、是れ法身か、是れ祖師か、爾に放す三十棒。雪竇頌して云く、

【頌】 一二三四五六(周つて復た始る、滴水滴凍、許多の工夫を費して什麼か作ん。)碧眼の胡僧も數へ足さず。(三生六十劫、達磨何ぞ曾て夢にだも見ん、闍黎什麼としてか知つて故に犯す。)少林謾に道ふ神光に付すと。(一人虚を傳ふれば萬人實を傳ふ、從頭來已に錯り了れり。)衣を卷いて又説く天竺に歸ると。(一船の人を賺殺す、懷懼少からず。)天竺茫茫として尋ぬるに處無し。(什麼の處にか在る、始めて是れ太平、如今什麼の處にか在る。)夜來卻つて乳峰に對して宿す。(爾が眼睛を刺破す、也た是れ風無きに浪を起す、且く道へ、是れ法身か是れ化身か、爾に三十棒を放す。)

【評唱】 雪竇善能く縫罽無き處に於て、眼目を出して頌出して、人をして見せしむ。雲門道く、「六不收。」雪竇什麼と爲てか卻つて道ふ、「一二三四五六」と。直に是れ「碧眼の胡僧も也た數へ足さず」と。所以に道ふ、「只だ老胡の知を許して、老胡の會を許さず、須らく是れ他の屋裏の兒孫に還して始めて得べし。」適來道ふ、「一言一句、時に應じ節に應ず」と。若し透得し去らば、方に言句の中に在らずと道ふことを知らん。其れ或は未だ然らずんば、免れず情解を作すことを。五祖老師道く、「釋迦牟尼佛は、下賤の客作兒、庭前の柏樹子は、一二三四五。」若し雲門の言句下に向つて、諦當に見得せば、相次に這の境界に到らん。少林謾に道ふ神光に付すと。二祖始め神光と名く。後來に至るに及んで、又道ふ天竺に歸ると。達磨熊耳山の下に葬る、時に宋雲使を奉じて西より歸る、西嶺に在つて達磨の手

に隻履を携へて、西天に歸り去るを見る。使回つて聖に奏す、墳を開くに惟だ一隻履を遺下するを見る。雪竇道く、「其の實は此の事作麼生か分付せん。既に分付無し、衣を巻いて又説く天竺に歸る」と。且く道へ、什麼と爲てか、此土に卻つて二三有り、遽に相慙慙に傳へ來る。這裏妨げず。誦訛なり、也た須らく是れ構得して始めて入作するに可なるべし。「天竺茫茫として尋ぬるに處無し、夜來卻つて乳峰に對して宿す」と。且く道へ、即今什麼の處にか在る。師便ち打つて云く、瞎。

第四十八則

【本則】 擧す、王太傅招慶に入つて煎茶す。(作家相聚る、須らく奇特有るべし、等閑に無事ならんや、大家一隻眼を着く、禍を惹き來れり。)時に朗上座、明招のため銚を把る。(一火泥團を弄する漢、煎茶を會せず、別人を帶累す。)朗茶銚を翻卻す。(事生ぜり、果然。)太傅見て上座に問ふ、「茶爐下是れ什麼ぞ。」(果然として禍事。)朗云く、「捧爐神。」(果然として他の箭に中り了れり、妨げず奇特なることを。)太傅云く、「既にはれ捧爐神、什麼としてか茶銚を翻卻す。」(何ぞ他に本分の草料を與へざる、事生ぜり。)朗云く、「官に仕ふること千日、失一朝に在り。」(錯つて指注

●誦訛は、いりくんで、むづかしきを云ふ。

【本則】 東嶺禪師云く、四十八則、茶の湯亦向上出身の作用有ることを明す。

茶道に本末中の三節有り、本は人を成すなり、人皆散亂動の器のみ、故に常の事を以て、自然に定を教ふ、我を説むるを戒と爲し、亂れざるを

す、是れ什麼の語話ぞ、杜撰の禪和麻の如く粟に似たり。)太傅拂袖して便ち去る。(灼然として作家、他に許す一隻眼を具すること。)明招云く、「朗上座招慶の飯を喫卻し了つて、卻つて江外に去つて野腥を打す。」(更に三十棒を與ふるに、この獨眼龍只だ一隻眼を具す、也た須らく是れ明眼の人點破して始めて得べし。)朗云く、「和尚作麼生。」(撻著、也た好し一撻を與ふるに、終に這般の死郎當の見解を作さす。)招云く、「非人其の便を得たり。」(果然として只だ一隻眼を具す、一半を道ひ得たり、一手擡一手擲。)雪竇云く、「當時但茶爐を踏倒せん。」(爭奈せん賊過ぎて後弓を張ることを、然も是の如しと雖も也た未だ徳山門下の客と稱せず。一等に是れ潑朗潑頼中に就いて奇特なり。)

【評唱】 佛性の義を知らんと欲せば、當に時節因縁を觀すべし。王太傅泉州に知たり、久しく招慶に參す。一日因に寺に入る、時に朗上座煎茶の次、茶銚を翻卻す。太傅也た是れ箇の作家、纔かに他の茶銚を翻卻するを見て、便ち上座に問ふ、「茶爐下是れ什麼ぞ。」朗云く、「捧爐神。」妨げず言中に響有り、爭奈せん首尾相違し、宗旨を失却して、鋒を傷り手を犯

定と爲し、事に徹するを慧と爲す、是を以て茶に依り親處を論ずるか。主に五事有り、一には室を掃ひ、二には物を居り、三には具を改め、四には茶を點じ、五には客を攝す。客と作るに五有り、一は室に改め、二は茶を喫し、三は衣物を改め、四は茶を喫し、五は物に徹す。夫れ人平生を精練すれば、作用自ら清し、是れを本を成すと曰ふ、宗旨を參詳すれば、滯仰の理に至る、是れを末を成すと曰ふ、事理に通達して物々悉ふこと無き、是れを中道の理を得ると曰ふ、凡そ三義を得、十道に通ずるときは、則ち茶の道に至究すと謂ひつ可し。此の招慶問答の如き、三義眼瞎して笑ふべきに堪へたるのみ、雪竇の拈語茶道を蘇活す、最も中興の大師爲り。

すことを。惟だ自己に辜負するのみにあらず、亦且つ他人に觸忤す。這箇是れ得失無底の事と雖も、若し拈起し來らば、舊に依つて親疎有り、皂白有り、若し此の事を論せば、言向上に在らず、卻つて言向上に向つて、箇の活處を辨せんことを要す。所以に道ふ、他活句に參じて、死句に參せざれ」と。朗上座の恁麼に道ふに據らば、狂狗の塊を逐ふが如し、太傅拂袖して便ち去る、他を肯はざるに似たり。明招云く、「朗上座招慶の飯を喫卻し了つて、卻つて江外に去つて野樗を打す」と。野樗は即ち是れ荒野の中、火焼く底の木樗、之を野樗と謂ふ。用つて朗上座正處に向つて行かず、卻つて外邊に向つて走ることを明す。朗拶して云く、「和尚又作麼生。」招云く、「非人其の便を得たり。」明招自然に出身の處有り、亦他の所問に辜負せず。所以に道ふ、俊狗人を咬む牙を露さず。鴻山の岳和尚云く、「王太傅大いに相如の壁を奪うて、直に鬚髮冠を衝くことを得るに似たり。」蓋し明招忍俊不禁にして、其の便に逢ひ難し、大瀉若し朗上座と作らば、他の太傅の拂袖して便ち行かんを見て、茶銚を放下して、呵呵大笑せん。何が故ぞ、之を見て取らずんば、千載にも逢ひ難し。見すや寶

① 王は姓、太傅は官、會元第八に云く、「太傅王延彬居士、長慶の稜に嗣ぐ。」
 ② 招慶は即ち長慶を指す、會元第七長慶章に云く、「泉州の刺史王延彬、請じて招慶に住せしむ。」
 ③ 傳燈二十一、長慶法嗣の下に福州報慈院慧明禪師。
 ④ 銚は温器なり。
 ⑤ 古鈔に云く、「猿足に鬼神捧持の狀を作る、之れを捧獵神と云ふ。」
 ⑥ 觸忤は「ふるふ、さぶふ」と訓す、不敬の意なり。
 ⑦ 色は黒なり。
 ⑧ 明招は山號、德讓禪師なり、羅山の閑に嗣ぐ、傳燈二十三に傳あり。
 ⑨ 樗は枯木の根、わけもなくがや／＼發ぐこと。
 ⑩ 維摩經觀衆生品に云く、「譬へば人の畏るゝ時の如し、非人其の便を得ん。」

壽、胡釘鉸に問うて云く、「久しく胡釘鉸と聞く、便ち是なること莫しや否や。」胡云く、「是。」壽云く、「還つて虚空を釘ち得てん麼。」胡云く、「請ふ師打破し將ち來れ。」壽便ち打つ、胡肯はず。壽云く、「異日自ら多口の阿師有つて、爾が爲に點破することぞ在らん。」胡後に趙州に見えて、前話を舉似す。州云く、「爾什麼に因つてか他に打たる。」胡云く、「知らず過什麼の處にか在る。」州云く、「只だ這の一縫、尙ほ奈何ともせず、更に他をして虚空を打破し來らしめんや。」胡便ち休し去る、州代つて云く、「且く這の一縫に釘て。」胡是に於て省有り、京兆の米七師行脚して歸る、老宿有り、問うて云く、「月夜の斷井索、人皆喚んで蛇と作す。未審し七師佛を見る時、喚んで什麼とか作す。」七師云く、「若し所見有らば、即ち衆生に同せん。」老宿云く、「也た是れ千年の桃核。」忠國師紫璠供奉に問ふ、「聞説らく供奉。思益經を解註すと、是なりや否や。」奉云く、「是。」師云く、「凡そ經を註するに當つては、須らく佛意を解して始めて得べし。」奉云く、「若し意を會せずんば、爭か敢て經を註すと言はん。」師遂に侍者をして一椀の水、七粒の米、一隻の筋を將て、椀上に在つて、供奉に送與せしめて、問うて云く、「是れ什麼の義ぞ。」奉云く、「不會。」師

① 蘭相如の故事、善照序に注す。
 ② 此の語、寶錄拈古部に出づ。
 ③ 祖庭事苑第一に云く、「胡釘鉸は唐の散人なり、名を以て顯れず云々。」
 ④ 寶壽延詔は、臨濟の法嗣、傳燈十二、會元十一に傳あり。
 ⑤ 會元第九に、「京兆府の米和尚亦七師と謂ふ、鴻山の靈祐禪師に嗣ぐ云々。」
 ⑥ 宋高僧傳第三に云く、「釋の子鄭姓は范氏、云々。後に經論を解するを求む、開輔の間に至りて、外學兼通して美聲甚なり、名僧の選を以て、肅宗の内殿に入りて應奉す、勅して紫方袍を賜ひて、供奉僧に充つ。」
 ⑦ 思益梵天所問經、全部四卷二十四品、姚秦鳩摩羅什の所譯なり。

云く、「老師が意すら尙ほ會せず、更に甚の佛意をか説かん」と。王太傅と朗上座と此の如く話會一ならず、雪竇未後に卻つて道ふ、「當時但た與に茶爐を踏倒せん」と。明招是れ此の如しと雖も、終に雪竇に如かず。雪峯、洞山の會下に在つて飯頭と作る、一日米を淘る次、山問ふ、「什麼をか作す。」峯云く、「米を淘る。」山云く、「米を淘つて沙を去るか、沙を淘つて米を去るか。」峯云く、「沙米一時に去る。」山云く、「大衆箇の什麼をか喫せん。」峯便ち盆を覆卻す、山云く、「子が因縁此に在らず」と。然も恁麼なりと雖も、爭か雪竇の當時但た茶爐を踏倒せんと云ふには似かん。一等には是れ什麼の時節ぞ、他の用處に到つて、自然に今に騰り古に煥いて、活脱の處有り。頌に云く、

第五則に出づ。

【頌】來問風を成すが若し、(箭虚に發せず、偶爾として文を成す、妨げず要妙なることを。)應機善巧に非ず。(泥團を弄する漢、什麼の限りか有らん、方木圓孔に逗す、妨げず作家に撞着すること)を。(悲むに堪へたり獨眼龍。(只だ一隻眼を具す、只だ一槪を得たり)曾て未だ牙爪を呈せず。(也た牙爪の呈す可き無し、什麼の牙爪とか説かん、也た他を欺くことを得ず。)牙爪開く。(備還つて見るや、雪竇卻つて些子に較れり、若し恁麼の手脚有らば茶爐を踏倒せん。)雲雷を生ず。(盡大地の人一時に棒を喫し、天下の積僧身を著くる處無し。早天の霹靂。)逆水の波幾回をか經る。(七十二棒、翻つて百五十と成る。)

【評唱】來問風を成すが若し、應機善巧に非ず、太傅の間處、斤を運して風を成すに似たり。此は莊子に出づ、郢人壁を泥るに、一小竅を餘す、遂に泥を圓めて擲つて之を補ふ。時に少泥有つて鼻端に落在す。傍に匠者有つて云く、「公、竅を補ふこと甚だ巧なり、我れ斤を運して備の爲に鼻端の泥を取らん。」其の鼻端の泥、蠅子の糞の若し、匠者をして之を斲らしむ。匠者斤を運し風を成して之を斲る、其の泥を盡して鼻を傷けず。郢人立つて容を失はず、所謂二俱に巧妙なり。朗上座其の機に應ずと雖も、語善巧無し。所以に雪竇道く、「來問風を成すが若し、應機善巧に非ず、悲むに堪へたり。獨眼龍、曾て未だ牙爪を呈せず。」明招道ひ得て也た太だ奇特なり、爭奈せん未だ雲を撃ひ霧を攫む底の牙爪有らざることを。雪竇傍に背はず、忍俊不禁にして、他に代つて氣を出す。雪竇暗に去つて他の意に合へり、自ら他の茶爐を踏倒する語を頌す。

①明招德謙禪師なり。

「牙爪開く、雲雷を生ず、逆水の波幾回をか經る」と。雲門道く、「備が逆水の波有ることを望まず、但だ順水の意有らば亦得てん」と。所以に道ふ、「活句下に薦得すれば、永劫にも忘れず。」朗上座と明招と、語句死に似たり、若し活處を見んと要せば、但だ雪竇の茶爐を踏倒せんと云ふを看よ。

第四十九則

垂示に云く、七穿八穴、鼓を攪き旗を奪ふ。百匝千重、前を瞻後を顧みる。虎頭に踞して虎尾を

收むるも、未だ是れ作家ならず。牛頭没して馬頭回るも、亦未だ奇特と爲さず。且く道へ、過量底の人來る時如何。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、三聖雪峰に問ふ、「網を透る金鱗、未審し何を以てか食と爲ん。」(妨げず縦横自在なることを、此の間太高生、爾合に只だ自知すべし、何ぞ必ずしも更に問はん。)峰云く、「汝が網を出で來らんを待つて道はん。」(人の多少の聲價を減ず、作家の宗師天然として自在。)聖云く、「一千五百人の善知識、話頭だも也た識らす。」(迅雷霹靂可煞だ群を驚かす、跨跳するに一任す。)

【本則】東嶺禪師云く、四十九則、作家眞の相見別に生涯有り、師資共に驚く可きことを明す。

峰云く、「老僧住持事繁し。」(勝負に在らず、一著を放過す、此の語最も毒なり。)

【評唱】雪峰三聖、然も一出一入、一挨一拶すと雖も、未だ勝負を分たざること有り。且く道へ、這の二尊宿、什麼の眼目をか具ふ。三聖は臨濟より訣を受けて、諸方に徧歴す、皆高資を以て之を待つ。看よ他の箇の間端を致すことを、多少の人摸索不著。且く理性佛法に涉らず、卻つて問うて道く、「網を透る金鱗、何を以てか食と爲さん。」且く道へ、他の意作廢生、網を透る金鱗、尋常既に他の香餌を食はず、知らず什麼を以てか食と爲ん。」雪峯は是れ作家、匹似閑に只だ一二分を以て他に酬ゆ。卻つて他に向つて道ふ、汝が網を出で來るを待つて、汝に向つて道はん。汾陽之を呈解問と謂ひ、洞下に之を借事問と謂ふ。須らく是れ倫を超え類を絶して、大受用を得て、頂門に眼有り、方に之を網を透

る金鱗と謂ふ。爭奈せん雪峯是れ作家なることを、妨げず人の聲價を減す。卻つて云ふ、「汝が網を出で來るを待つて、汝に向つて道はん」と。看よ他の兩家、封疆を把定して、壁立萬仞なることを。若し是れ三聖にあらずんば、只だ此の一句、便ち去ることを得ず、爭奈せん三聖亦是れ作家なることを。方他に向つて道ふことを解す、「一千五百人の善知識、話頭も也た識らす」と。雪峯卻つて道ふ、「老僧住持事繁し」と。此の語恁麼に頑慢なることを得たり、他の作家相見、一擒一縱、強に逢ふて即ち弱、賤に遇ふては即ち貴。爾若し勝負の會を作さば、未だ夢にだも雪峯を見ざること有らん。看よ他の二人、最初は孤危峭峻、末後は二り俱に死即當なることを。且く道へ、還つて得失勝負有り麼。他の作家の酬唱、必ずしも此の如くならず。三聖臨濟に在つて院主と作る、臨濟遷化に垂示して云く、「吾れ去つて後、吾が正法眼藏を滅することを得ざれ。」三聖出で、云く、「爭か敢て和尚の正法眼藏を滅御せん。」濟云く、「已後人有り、爾に問はば作廢生。」三聖便ち喝す、濟云く、「誰か知らん吾が正法眼藏、這の瞎驢邊に向つて滅御することを。」三聖便ち禮拜す。他は是れ臨濟の眞子、方に敢て此の如く酬唱す。雪資末後に只だ網を透る金鱗を頌して、他の作家の相見の處を顯す。頌に云く、

【頌】網を透る金鱗。(千兵は得易く一將は求め難し、何似生、千聖も奈何ともせず。)云ふことを休めよ水に滯ると。(他の雲外に向つて立す、活潑潑地、且く鈍置すること莫くんば好し。)乾を搖し坤を蕩し。(作家作家、未だ是れ他の奇特の處にあらず、放出すること又何ぞ妨げん。)鬣を振ひ尾を擺

ふ。(誰か敢て端倪を辨せん、箇の伎倆を傲し得たり、賣弄出し來る、妨げず群を驚すことを。)千尺鯨噴いて洪浪飛び、(那邊に轉過し去る、妨げず奇特なることを。盡大地の人口に吞盡す。)一聲雷震うて清颺起る。(眼有り耳有り、聾の如く盲の如し、誰か悚然たらざらん。)清颺起る。(什麼の處に在る、喞)天上人間知ぬ幾幾ぞ。(雪峰は窄く陣頭を把り、三聖は窄く陣脚を把る、土を撒し沙を撒して什麼か作ん、打つて云く、爾什麼の處に在る。)

【評唱】 網を透る金鱗、云ふことを休めよ水に滯ると。五祖道く、「只だ此の一句に頌了れり。」既に是れ網を透る金鱗、豈に水に居滯せんや。必ず洪波浩渺、白浪滔天の處に在り。且く道へ、「二六時中、何を以てか食と爲ん。諸人且く三條椽下、七尺單前に向つて、試みに定當して看よ。雪竇道く、「此の事分に随つて拈弄す」と。金鱗の類の如きんば、鬣を振ひ尾を擺ふ時、直に得たり乾坤動搖すること。千尺鯨噴いて洪浪飛ぶ、此は三聖の一千五百人の善知識、話頭も也た識らずと道ふことを頌す。鯨の洪浪を噴くが如くに相似たり。一聲雷震うて清颺起るとは、雪峯の老僧住持事繁しと道ふことを頌す、一聲雷震うて清颺起るが如くに相似たり。大綱他の兩箇俱に是れ作家なることを頌す。清颺起る、天上人間知ぬ幾幾ぞ。且く道へ、這の一句、什麼の處にか落在する。颺は風なり、清颺起る時に當つて、天上人間能く幾人有つてか知らん。

第五十則

垂示に云く、階級を度越し、方便を超絶す。機々相應じ、句々相投す。儻し大解脫門に入り、大解脫用を得るに非ずんば、何を以て佛祖を權衡とし、宗乘に龜鑑たらん。且く道へ、當機直截、逆順縦横、如何が出身の句を道得せん。試みに請ふ擧す看よ。

【本則】 擧す、僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ塵々三昧。」(天下の衲僧盡く這裏に在りて窠窟を作す、満口に霜を含む、沙を撒し土を撒して什麼か作ん。)門云く、「鉢裏の飯、桶裏の水。」(布袋裏に錐を盛る、金沙混雜す、錯を將て錯に就く、含元殿裏に長安を問はず。)

【本則】 東嶺禪師云く、五十則、便ち雲門の宗旨、別に著到す可きを明す。

【評唱】 還つて定當得する麼、若し定當得せば、雲門の鼻孔、諸人の手裏に在らん。若し定當不得ならば、諸人の鼻孔、雲門の手裏に在らん。雲門斬釘截鐵の句有り、此の一句の中に三句を具す。有る底は問著すれば便ち道ふ、「鉢裏の飯粒粒皆圓に、桶裏の水滴滴皆濕ふ」と。若し恁麼に會せば、且つ雲門端的爲人の處を見ず。頌に云く、

【頌】 鉢裡の飯、桶裏の水。(露也、沙を撒し土を撒して什麼か作ん、口を漱ぐこと三年にして始めて得べし。)多口の阿師拈を下し難し。(舌頭を縮卻す、法を識る者は懼る、什麼と爲て卻つて恁麼に擧

するや。北斗南星位殊ならず。(東を喚んで西と作して什麼か作ん、坐立儼然、長者は長法身、短者は短法身。)白浪滔天平地に起る。(脚下深きこと數丈、賓主互換、驀然として備が頭上に在り、備又作麼生か、打たん。)擬不擬。(蒼天蒼天、咄。)止不止。(什麼をか説く、更に怨苦を添ふ。)箇々無禪の長者子。(郎當少からず、傍觀の者は晒ふ。)

【評唱】雪竇前面に雲門對一説の話を頌して道く、對一説太だ孤絶、無孔の鐵鏈重ねて楔と下す。後面に又馬祖の四句を離れ百非を絶する話を頌して道く、藏頭白、海頭黒、明眼の禪僧會不得。若し此の公案に於て透得せば、便ち這箇の頌を見ん。雪竇當頭に便ち道ふ、「鉢裏の飯、桶裏の水」と。言中に響有り、句裏に機を呈す。多口の阿師拈を下し難し、後に隨つて便ち備が與に注脚を下す。備若し這裏に向つて、玄妙の道理を求めんと要して計較せば、轉た拈を下し難し。雪竇只だ這裏に到つて也た得たり、他恁麼に頭上に先づ把定することを愛す。衆中に具眼の者有つて、戲破せんことを恐れて、後面に到つて須らく一著を放過して、俯して初機の爲に、打開頌出して人をして見せしむべし。北斗は舊に依つて北に在り、南星は舊に依つて只だ南に在り。所以に道ふ、「北斗南星位殊ならず、白浪滔天平地に起る」と。忽然として平地上に波瀾を起さば、又作麼生。若し事上に向つて戲ば則ち易く、若し意根下に向つて尋ねれば、卒に摸索不著ならん。這箇鐵鏈子の如くに相似たり。

第十四則。

第七十三則。

① 戲は「うぢ」ひみるなり。
② 一著を放過しては「ひとてなゆるめて」と譯す。

擺撥することを得ず、拈を挿むことを得ず。備若し擬議して、會せんと欲して會せず、止まんと欲して止まず、亂に懷袋を呈せば、正に是れ箇箇無禪の長者子。寒山の詩に道く、「六極常に苦に嬰る。九維徒に自ら論ず。才有つて草澤に遺てられ、勢無うして蓬門を閉づ。日上つて巖猶は暗く、煙消して谷尙は昏し。其の中の長者子、箇箇總に禪無し。」

③ 韻會に、六極は天地四方なり。

④ 古鈔に云く、「八方に天を并せて九維と曰ふ。」

國譯佛果園悟禪師碧巖錄卷第六

第五十一則

垂示に云く、纔に是非あれば、紛然として心を失す。階級に落ちざれば、又摸索すること無し。且く道へ、放行するが即ち是か、把住するが即ち是か。這裡に到つて、若し一絲毫の解路あつて、猶ほ言詮に滞り、尙ほ機境に拘らば、盡く是れ依草附木。直饒ひ便ち獨脱の處に到るも、未だ免れず萬里郷關を望むことを。還つて構得するや、若し未だ構得せずんば、且く只現成公案を理會せよ。試みに舉す看よ。

【本則】 擧す、雪峰住菴の時、兩僧あり、來つて禮拜す。(什麼を制作す、一狀に領過す。)峯來るを見て、手を以て菴門を托し、身を放つて出でて云く、「是れ什麼ぞ。」(鬼眼睛、無孔の笛子、頭を擧げ角を戴く。)僧亦云く、「是れ什麼ぞ。」(泥彈子、氈拍板、箭鋒相拄ふ。)峰低頭して菴に歸る。

【本則】 東嶺禪師云く、五十一則、巖頭初め最後の巴尾を顯す、此の因縁最も參詳す可きの大事を明す。

(爛泥裏に刺有り、龍の足無きが如く、蛇の角有るに似たり、中に就いて措置するに難爲なり。)僧後に巖頭に到る。(也た須らく是れ問過して始めて得べし、同道方に知る。)頭問ふ、「什麼の處よりか來

る。」(也た須らく是れ作家にして始めて得べく、この漢往往に敗關を納る、若し是れ同參にあらざるば、泊乎と放過せん。)僧云く、「嶺南より來る。」(什麼の消息をか傳へ得來る、須らく是れ箇の消息を通すべく、還つて雪峰を見るや。)頭云く、「曾て雪峰に到るや。」(勘破し了ること多時、到らずと道ふ可らず。)僧云く、「曾て到る。」(實頭の人得難し、打つて兩槩と作す。)頭云く、「何の言句かありし。」(便ち恁麼に去るや。)僧前話を擧す。(便ち恁麼に去るや、重重敗關を納る。)頭云く、「他什麼とか道ひし。」(好し劈口に便ち打たん、鼻孔を失卻し了れり。)僧云く、「他無語、低頭して菴に歸る。」(又敗關を納る、彌且く道へ、他は是れ什麼ぞ。)頭云く、「噫、我れ當初悔らくは、他に向つて最後の句を道はざりしことを。(洪波浩渺、白浪滔天。)若し伊に向つて道はましければ、天下の人、雪老を奈何ともせざらん。」(癡兒伴を牽く、必ずしもせず、須彌も也た須らく粉碎すべし、且く道へ、他の園續什麼の處に在る。)僧夏末に至つて、再び前話を擧して請益す。(已に是れ惺惺ならず、正に賊去り了る多時、賊過ぎて後弓を張る。)頭云く、「何ぞ早く問はざる。」(好し與に禪床を掀倒するに、過也。)僧云く、「未だ敢て容易にせず。」(這の棒本、是れ這の僧喫せん、鼻孔を穿卻す、因に停めて智を長せしむ、已に是れ兩重の公案。)頭云く、「雪峰我れと同條に生ずと雖も、我れと同條に死せず。(漫天網地。)最後の句を識らんと要せば、只這れ是れ。」(一船の人を賺殺す、我れも也た信せず、泊乎と分疎不下ならん。)

【評唱】大凡そ宗教を扶堅せんには、須らく是れ箇の當機を辨じ、進退是非を知り、殺活擒縱を明むべし。若し忽ち眼目迷黎麻羅して、到處間に逢ふては便ち問ひ、答に逢ふては便ち答へば、殊に知らず鼻孔別人の手裏に在ることを。只だ雪峰巖頭の如きんば、同じく徳山に參す、此の僧、雪峰に參す、見解只だ恁麼の處に到る、巖頭に見ゆるに及んで、亦曾て一事を成し得ず、虚しく他の二老宿を煩し、一問一答、一擒一縱、直に如今に至るまで、天下の人節角誦訛と成して、分疎不下。且く道へ、節角誦訛、什麼の處にか在る。雪峰諸方を遍歴すと雖も、末後に鰲山店に於て、巖頭因つて之を激して、方に勦絶して大徹することを得たり。巖頭後に沙汰に値ふて、湖邊に於て渡子と作り、兩岸に各一板を懸く。人有り、過ぎて板を敲くこと一下すれば、頭云く、「爾那邊にか過ぐ」と。遂に葦葦の間より棹を舞して出づ。雪峰嶺南に歸つて住庵す、この僧亦是れ久參底の人なり、雪峰來るを見て、手を以て庵門を托し、身を放つて出でて云く、「是れ什麼ぞ。」如今有る底は、恁麼に問著すれば、便ち他の語下に去つて咬嚼す。この僧も亦怪なり、也た只だ他に向つて道ふ、「是れ什麼ぞ。」峰低頭して庵に歸る、往々に喚んで無語の會と作し去る。この僧便ち摸索不著、有る底は道ふ、「雪峰這の僧に一問せられて、直に得たり無語歸庵」と。殊に知らず、雪峰の意毒害の處有ることを。雪峰便宜を得ると雖も、爭奈せん身を藏して影を露すことを。この僧後に雪峰を辭す、此の公案を持して、巖頭をして判せしむ。既に彼に到る、巖頭問ふ、「什麼の處より來る。」頭云く、「曾て雪峰に到る麼」と。若し雪峰を見んと要せば、只だ此の一問、也た好し急に眼を著けて看るに、僧云く、「曾て到る。」頭云く、「何の言句か有りし」と。此の語亦空しく過ぎす。この僧曉らず、只管に他の語脈を逐ふて轉ず。頭云く、「他什麼とか道ひし。」僧云く、「他低頭無語歸庵す。」この僧殊に知らず、巖頭草鞋を著けて、他の肚皮裏に在つて、行くこと幾回し了ることを。巖頭云く、「噫我れ當初悔らくは他に向つて最後の句を道はざりしことを。若し他に向つて道はば、天下の人雪老を奈何ともせじ」と。巖頭也た是れ強を扶けて弱を扶けず、この僧舊に依つて黒漫漫地にして、縑素を分たす、一肚皮の疑を懐いて、眞箇に道ふ、「雪峰會せず」と。夏末に至つて再び前話を舉げて、巖頭に請益す。頭云く、「何を早く問はざる」と。この老漢、計較生ぜり。僧云く、「未だ敢て容易にせず。」頭云く、「雪峰我れと同條に生ずと雖も、我れと同條に死せず。最後の句を識らんと要せば、只だ這れ是れ。」巖頭太煞だ眉毛を惜まず、諸人畢竟作麼生か會せん。雪峰、徳山の會下に在つて飯頭と作る。一日齋晚し、徳山托鉢して、法堂に下り至る。峯云く、「鐘未だ鳴らす鼓未だ響かず、この老漢托鉢して、什麼の處に向つてか去る。」山無語、低頭して方丈に歸る。雪峰

- ① 迷黎麻羅、方語に眼睛全く暗し。按するに、四字反切語ならん、迷黎の切、音昧、麻羅の切、音摩、麻の叶音、漫録に兩眼尙ほ昧麻すとあり、昧は「目にもものいる」なり、めいりはずがめ、もらは、色盲、すべて無眼子ないふ。
- ② 分疎不下は「いひほどきえず」と譯す。わかりかぬ也。
- ③ 唐の武宗皇帝年中、佛法を沙汰するの時なり、沙汰の解前に出せり。
- ④ 嶺南は飛猿嶺、即ち閩中なり。
- ⑤ 托は手を以て門を推し開くなり。
- ⑥ 往々は往くさき往くさきに、「かすかすある」と譯す。ときどき也。

に一問せられて、直に得たり無語歸庵」と。殊に知らず、雪峰の意毒害の處有ることを。雪峰便宜を得ると雖も、爭奈せん身を藏して影を露すことを。この僧後に雪峰を辭す、此の公案を持して、巖頭をして判せしむ。既に彼に到る、巖頭問ふ、「什麼の處より來る。」頭云く、「曾て雪峰に到る麼」と。若し雪峰を見んと要せば、只だ此の一問、也た好し急に眼を著けて看るに、僧云く、「曾て到る。」頭云く、「何の言句か有りし」と。此の語亦空しく過ぎす。この僧曉らず、只管に他の語脈を逐ふて轉ず。頭云く、「他什麼とか道ひし。」僧云く、「他低頭無語歸庵す。」この僧殊に知らず、巖頭草鞋を著けて、他の肚皮裏に在つて、行くこと幾回し了ることを。巖頭云く、「噫我れ當初悔らくは他に向つて最後の句を道はざりしことを。若し他に向つて道はば、天下の人雪老を奈何ともせじ」と。巖頭也た是れ強を扶けて弱を扶けず、この僧舊に依つて黒漫漫地にして、縑素を分たす、一肚皮の疑を懐いて、眞箇に道ふ、「雪峰會せず」と。夏末に至つて再び前話を舉げて、巖頭に請益す。頭云く、「何を早く問はざる」と。この老漢、計較生ぜり。僧云く、「未だ敢て容易にせず。」頭云く、「雪峰我れと同條に生ずと雖も、我れと同條に死せず。最後の句を識らんと要せば、只だ這れ是れ。」巖頭太煞だ眉毛を惜まず、諸人畢竟作麼生か會せん。雪峰、徳山の會下に在つて飯頭と作る。一日齋晚し、徳山托鉢して、法堂に下り至る。峯云く、「鐘未だ鳴らす鼓未だ響かず、この老漢托鉢して、什麼の處に向つてか去る。」山無語、低頭して方丈に歸る。雪峰

- ① 噫は痛聲、又恨聲。
- ② 飯頭は典座なり。

巖頭に擧似す、頭云く、「大小の徳山、末後の句を會せず。」山聞いて侍者をして喚んで方丈に至らしめて、問うて云く、「汝老僧を肯はざる那。」頭密に其の語を啓す、山來日に至つて上堂、尋常と同じからず。頭、僧堂前に於て、掌を撫して大笑して云く、「且喜すらくは老漢末後の句を會することを。他後に天下の人、他を奈何ともせじ、然も是の如くなりと雖も、只だ三年を得ん」と。此の公案の中、雪峰の如きんば、徳山の語無きを見て、將に謂へり便宜を得ると。殊に知らず、賊を著け了ることを。蓋し他曾て賊を著け來るが爲に、後來亦賊と做ることを解す。所以に古人道く、「① 末後の一句、始めて牢關に到る」と。有る者は道ふ、「巖頭、雪峰に勝れり」と。則ち錯つて會し了れり。巖頭常に此の機を用て衆に示して云く、「明眼の漢、窠臼没し、物を卻くるを上と爲し、物を逐ふを下と爲す。」この末後の句、設便ひ親しく祖師に見え來るも、也た理會することを得ず。徳山齋晚し、老子自ら鉢を捧げて法堂に下り去る。巖頭道く、「大小の徳山、未だ末後の句を會せざることに在り」と。雪竇拈じて云く、「曾て聞説らく箇の獨眼龍、元來只だ一隻眼を具す。殊に知らず、徳山是れ箇の② 無齒の大蟲なることを。若し是れ巖頭の識破するにあらずんば、争か昨日と今日と同じからざることを知得せん。諸人末後の句を會せんと要する麼、只だ老胡の知を許して、老胡の會を許さず」と。古より今に及ぶまで、公案萬別千差、荆棘林の如くに相似たり。爾若し透得し去らば、

① 傳燈十六、樂普の安禪師案に示して云く、「末後の一句始めて牢關に到る、要津を鎖斷して、凡聖を通ぜず云々。」
② 無齒の大蟲は「こうへた、古き虎」なり。無語低頭のところな云ふ。

天下の人奈何ともせず。三世の諸佛、下風に立在せん。爾若し透不得ならば、巖頭道く、「雪峯我れと同條に生ずと雖も、我れと同條に死せず。」只だこの一句、自然に出身の處有らん。雪竇頌して云く、「**【頌】** 末後の句、已に言前に在り、將に謂へり眞箇と、觀着すれば則ち瞎す。」君が爲めに説く。「舌頭落ちぬ、説不着、頭有りて尾無く、尾有りて頭無し。」明暗雙々底の時節。(葛藤の老漢、牛の角無きが如く、虎の角有るに似たり、彼此是れ恁麼。)同條生也共に相知る。(是れ何の種族ぞ、彼此没交渉、君は瀟湘に向ひ我れは秦に向ふ。)不同條死還つて殊絶。(拄杖子我が手裏に在り、争か山僧を怪み得ん、爾が鼻孔什麼と爲てか別人の手裏に在る。)還つて殊絶。(還つて棒を喫せんと要するや、什麼の摸索する處か有らん。)黃頭碧眼須らく頭別すべし。(盡大地の人鋒を亡じ舌を結く、我れも也た恁麼、他人は卻つて不恁麼、只だ老胡の知を許して老胡の會を許さず。)南北東西歸去來。(收、脚跟下猶ほ五色の線を帯びること、在り、爾に一條の拄杖子を乞へん。)夜深けて同じく看る千巖の雪。(猶ほ半月程に較れり、從他あれ大地雪漫漫たることを、溝に填ち壑に塞がる人の會する無し、也た只だ是れ箇の漢、還つて末後の句を識得すや、便ち打つ。)

【評唱】 「末後の句君が爲に説く」と。雪竇此の末後の句を頌す、他の意極めて落草相爲ること有り。頌することは則ち煞だ頌す、只だ毛彩の些子を頌す。若し透見せんと要せば也た未だ。更に敢て大口を開いて便ち道ふ、「明暗雙雙底の時節」と。爾が與に一綫路を開く、亦爾が與に一句に打殺し了れ

り、末後更に憫が與に注解す。① 只だ招慶の如きんば、一日羅山に問うて云く、「巖頭道く、「慙慙慙慙、不慙慙慙」と、意旨如何。」羅山召して云く、「大師。」師應諾す。山云く、「雙明亦雙暗。」慶禮謝して去る。三日の後又問ふ、「前日和尙の垂慈を蒙る、只だ是れ看不破。」山云く、「情を盡して憫に向つて道ひ了れり。」慶云く、「和尚是れ火を把つて行け。」山云く、「若し慙慙ならば大師の疑處に據つて問ひ將ち來れ。」慶云く、「如何なるか是れ雙明亦雙暗。」山云く、「同生亦同死。」慶當時禮謝して去る。後に僧有り、招慶に問ふ、「同生亦同死の時如何。」慶云く、「狗口を合取せよ。」僧云く、「大師口を收取して飯を喫せよ。」其の僧卻來して羅山に問うて云く、「同生亦同死の時如何。」山云く、「虎の角を戴くが如し。」末後如し。僧云く、「同生不同死の時如何。」山云く、「虎の角を戴くが如し。」末後の句、正に是れ這箇の道理、羅山の會下に僧有り、便ち這箇の意を用て、問を招慶に致す。慶云く、「彼此皆知る、何が故ぞ、我れ若し東勝身洲に一句を道へば、西瞿耶尼洲にも也た知る、天上に一句を道へば、人間にも也た知る、心心相知り、眼眼相照す」と。同條生は則ち猶は見易く、不同條死は也た還つて殊絶なり。釋迦達磨も也た摸索不著、南北東西歸去來。些子の好境界有り、夜深うして同じく看る千巖の雪。且く道へ、是れ雙明か雙暗か、是れ同條生か、是れ同條死か。具眼の衲僧、試みに甄別して看よ。

① 傳燈、會元、統要の三錄に皆保福從展禪師羅山に問ふに作る、今招慶と曰ふは、蓋し保福招慶に住する時か。

② 甄は察なり。

第五十二則

【本則】 擧す、僧、趙州に問ふ、「久しく趙州の石橋と響く。到り來れば只だ略約を見る。」(也た人有りて來りて虎鬚を拵づ、也た是れ衲僧本分の事。) 州云く、「汝只だ略約を見て、且つ石橋を見ず。」(其の便を得るに慣へり、這の老漢身を賣り去る。) 僧云く、「如何なるか是れ石橋。」(釣に上り來れり、果然。) 州云く、「驢を渡し馬を渡す。」(一網に打就す、直に得たり盡大地の人、氣を出す處無きことを、一死更に再活せず。)

【本則】 東嶺禪師云く、五十二則、趙州左之右之、只だ此の事を擧揚することを明す。

【評唱】 趙州に石橋有り、蓋し李膺造れり、今に至つて天下に名有り。略約は即ち是れ獨木橋なり。其の僧故意に他の威光を減じて他に問うて道く、「久しく趙州の石橋と響く、到り來れば只だ略約を見る。」趙州便ち道ふ、「汝只だ略約を見て、且つ石橋を見ず」と。他の問處に據らば、也た只だ是れ平常の説話に相似たり。趙州用ひ去つて他を釣る。這の僧果然として釣に上つて、後に隨つて便ち問ふ、「如何なるか是れ石橋。」州云く、「驢を渡し馬を渡す」と。妨げず言中に自ら出身の處有ることを。趙州は臨濟徳山の棒を行じ喝を行するに似ず、他只だ言句を以て殺活す。這の公案好好に看來らば、只だ是れ尋常機鋒を闘はしむるに相似たり。然も是の如くなりとも雖も、也た妨げず湊泊し難し。一日首

座と石橋を看る、州乃ち首座に問ふ、「是れ什麼人か造れる。」座云く、「李膺造れり。」州云く、「造る時什麼の處に向つてか手を下す。」座對無し。州云く、「尋常石橋を説く、問著すれば手を下す處も也た知らず。」又一日州掃地の次、僧問ふ、「和尚は是れ善知識、什麼と爲てか塵有る。」州云く、「外來底。」又問ふ、「清淨の伽藍、什麼と爲てか塵有る。」州云く、「又一點有り。」又僧問ふ、「如何なるか是れ道。」州云く、「牆外底。」僧云く、「這箇の道を問はず、大道を問ふ。」州云く、「大道長安に透る」と。趙州偏に此の機を用ふ。他平實安穩の處に到つて人の爲にするに、更に鋒を傷り手を犯さず、自然に孤峻にして、此の機を用ひ得て甚だ妙なり。雪竇頌して云く、

【頌】孤危立せず道方に高し。(須らく是れ這の田地に到りて始めて得べし、言猶ほ耳に在り、他に自分の草料を還さん。)海に入つて還つて須らく巨鼈を釣るべし。(要津を坐斷して凡聖を通せず、蝦蟇螺蚌問ふに足らず、大丈夫の漢、兩兩三三なる可らず。)笑ふに堪へたり同時の灌溪老。(也た恁麼の人の有りて、曾て恁麼に來る、也た恁麼に機關を用ふる底の手脚有り。)劈箭と云ふことを解するも亦徒らに勞す。(猶ほ半月程に較れり、似たることは則ち似たり、是なることは則ち未だ是ならす。)

【評唱】「孤危立せず道方に高し」と。雪竇、趙州尋常爲人の處を頌す。玄妙を立せず、孤危を立せず、諸方の虚空を打破し、須彌を擊碎し、海底に塵を生じ、須彌に浪を鼓すと道つて、方に他の祖師の道

と稱するに似ず。所以に雪竇道く、「孤危立せず道方に高し」と。壁立萬仞にして、佛法の奇特靈驗を顯す。然も孤危峭峻なりと雖も、如かじ孤危を立せざるには。但だ平常自然に轉機機地に、立せずして自ら立し、高ぶらずして自ら高し。機孤危を出でて、方に玄妙を見る。所以に雪竇云く、「海に入つて還つて須らく巨鼈を釣るべし。」看よ他の具眼の宗師、等閑に一語を垂れ、一機を用て、蝦蟇螺蚌を釣らず、直に巨鼈を釣る。也た妨げず是れ作家なことを。此の一句用ひて前面の公案を顯す。「笑ふに堪へたり同時の灌溪老。」見すや僧灌溪に問ふ、「久しく灌溪と響く、到來するに及んで、只だ箇の 瀉麻池を見る。」溪云く、「汝只だ瀉麻池を見て、且つ灌溪を見ず。」僧云く、「如何なるか是れ灌溪。」溪云く、「劈箭急なり。」又僧 黃龍に問ふ、「久しく黃龍と響く、到來するに及んで、只だ箇の赤斑蛇を見る。」龍云く、「子只だ赤斑蛇を見て、且つ黃龍を見ず。」僧云く、「如何なるか是れ黃龍。」龍云く、「拖拖地。」僧云く、「忽ち金翅鳥の來るに遇ふ時如何。」龍云く、「性命存し難し。」僧云く、「恁麼ならば則ち他の食噉に遭ひ去らん。」龍云く、「子が供養を謝す」と。此れ總に是れ孤危を立す、是なることは則ち也た是、力を費すことを免れず。終に趙州の尋常に用ふる底には如かず。所以に雪竇道く、「劈箭と云ふことを解するも亦徒らに勞す」と。

① 灌溪志閑禪師は、南嶽下四世臨濟義玄禪師の法嗣、傳燈十ニ、會元十一に傳あり。
② 瀉は説文に、久漬なり、詩の陳風に、東門の池、以て瀉を瀉す可し。瀉を治するには水を以て之を瀉す。
③ 劈箭急なりは、溪水の速きに喩ふ。灌溪の水の。
④ 黃龍晦機は曹原下七世、玄泉彦の法嗣、傳燈二十三、會元第八に傳あり。
⑤ 拖拖地は「のたのた」と譯す、龍の行く貌。

只だ灌溪黃龍の如きんば即ち且く致く。趙州云く、「驢を渡し馬を渡す」と。又作麼生か會せん、試みに辨じて看よ。

第五十三則

垂示に云く、徧界藏さす、全機獨露。途に觸れて滯る無し。著々出身の機あり。句下に私無し、頭々殺人の意あり。且く道へ、古人畢竟什麼の處に向つてか休歇する。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、馬大師百丈と行く次、野鴨子の飛び過ぐるを見る。(兩)

箇落草の漢、草裏に輓す、驀ちに顧みて什麼にか作ん。大師云く、「是れ什麼ぞ。」(和尚合に知るべし、這の老漢鼻孔も也た知らず。)丈云く、「野鴨子。」(鼻孔已に別人の手裏に在り、只管欸を供す、第二の惡水更に毒なり。)大師云く、「什麼の處に去るや。」(前箭は猶ほ輕く、後箭は深し、

【本則】東嶺禪師云く、五十三則、馬大師傳ふる所、別に他事無し、初めの入處、終りの耳聾に至る、只だ是れ向上出身の一路を明すのみ。

第二回啗啄す、也た合に自知すべし。)丈云く、「飛び過ぎ去れり。」(只管他の後に隨つて轉ず、當面に蹉過す。)大師遂に百丈の鼻頭を扭る。(父母所生の鼻孔、別人の手裏に在り、鎗頭を振轉す、鼻孔を裂轉し來れり。)丈忍痛の聲を作す。(只だ這裏に在り、還つて喚んで野鴨子と作し得んや、還つて痛痒を識るや。)大師云く、「何を曾て飛び去らん。」(人を瞞すること莫くんば好し、這の老漢元來

只だ鬼窟裏に在りて活計を作す。)

【評唱】正眼に觀來れば、卻つて是れ百丈。正因を具す。馬大師風無きに浪を起す、諸人佛祖の與に師と爲らんことを要せば、百丈に參取せよ。自救不了ならんことを要せば、馬大師に參取せよ。看よ他の古人、二六時中、未だ嘗て箇の裏に在らすんばあらず。百丈、卍歲にして塵を離れて、三學該練す。大寂の化を南昌に闡くに屬して、乃ち心を傾けて依附す。二十年侍者と爲る、再參するに至るに及んで、喝下に於て方に始めて大悟す。而今有る者は道ふ、本、悟處無し、箇の悟門を作つて、此の事を建立す。と。若し恁麼の見解ならば、獅子身中の蟲の自ら獅子の肉を食ふが如し。見すや古人道く、「源深からざれば流長せず、智大いならざれば見遠からず」と。若し用て建立の會を作さば、佛法豈に如今に到らんや。看よ他の馬大師百丈と行く次、野鴨子の飛び過ぐるを見る。大師豈に是れ野鴨子と知らざらんや、什麼と爲てか卻つて恁麼に問ふ。且く道へ、他の意什麼の處にか落在する。百丈只管に他の後に隨つて走る、馬祖遂に他の鼻孔を扭る。丈忍痛の聲を作す。馬祖云く、「何を曾て飛び去らん」と。百丈、便ち省す。而今有る底は錯り會して、纔かに問著すれば、便ち忍痛の聲を作す、且喜すらくは跳不出。宗師家人の爲にせんには、須らく爲に徹せしむべし。他の會せざるを見て、免

- ① 正因佛性、了因佛性、緣因佛性、是れを三因佛性と云ふ。
② 卍は字彙に云く、東髮兩角の如き貌。毛傳に卍は幼稚なり。
③ 三學は戒定慧、該は成なり、皆なり、兼なり。
④ 馬祖を元和中に大寂禪師と謚す。
⑤ 管子に出づ。

れず鋒を傷り手を犯すことを。只だ他をして此の事を明めしめんと要す。所以に道く、「會するときば途中受用、會せざるときんば世諦流布」と。馬祖當時若し扭住せずんば、只だ世諦流布と成らん。也た須らく是れ境に逢ひ縁に遇ひ、宛轉して自己に歸せしむべし。十二時中、空缺の處無し、之を性地明白と謂ふ。若し只だ依草附木、箇の驢前馬後を認めば、何の用處か有らん。看よ他の馬祖百丈恁麼に用ふることを。昭昭靈靈に似たりと雖も、卻つて昭昭靈靈の處に住せず。百丈忍痛の聲を作す、若し恁麼に見去らば、徧界藏さず、頭頭成現せん。所以に道ふ、「一處透れば千處萬處一時に透る」と。馬祖次の日陞堂す、衆纒かに集る、百丈出でて拜席を卷卻す。馬祖便ち下座。方丈に歸る次、百丈に問ふ、「我れ適來上堂、未だ曾て說法せず、徧什麼と爲てか、便ち席を卷卻する。」丈云く、「昨日和尚に鼻孔を扭得せられて痛し。」祖云く、「徧昨日甚の處に向つてか心を留めし。」丈云く、「今日鼻頭又痛からず。」祖云く、「徧深く今日の事を知る。」丈乃ち作禮す。卻つて侍者寮に歸つて哭す。同事の侍者問うて云く、「徧哭して什麼か作ん。」丈云く、「徧去つて和尚に問取せよ。」侍者遂に去つて馬祖に問ふ、祖云く、「徧去つて他に問取して看よ。」侍者卻つて寮に歸つて百丈に問ふ、丈卻つて呵呵大笑す。侍者云く、「徧適來は哭す、而今什麼と爲てか卻つて笑ふ。」丈云く、「我れ適來は哭す、如今は卻つて笑ふ」と。看よ他悟つて後、阿鞞鞞地、羅籠

●會元第三、百丈章に云く、「夫れ讀經、看經、語言、皆須らく宛轉して自己に歸就すべし。」ころくの意。
●驢前馬後は、前の後のと認むることなり、驢馬に用なし、驢馬事の類の如し。

すれども住らす、自然に玲瓏たることを。雪竇の頰に云く、

【頰】野鴨子。(群を成し隊を作す、又一隻有り。)知んぬ何許ぞ。(用て什麼か作ん、麻の如く粟に似たり。)馬祖見來つて相共に語る。(葛藤を打せば什麼の了期か有らん、箇の什麼をか説く、獨り馬祖のみ有りて箇の俊底を識る。)語り盡す山雲海月の情。(東家の杓柄は長く西家の杓柄は短し、知んぬ葛藤を打すること多少ぞ。)依然として會せず還つて飛び去る。(因、道ふ莫れ他言ふことを會せずと、什麼の處にか飛び過ぎ去る。)飛び去らんと欲す。(鼻孔別人の手裏に在り、已に是れ他の與に註脚を下し了れり。)卻つて把住す。(老婆心切、更に什麼とか道はん。)道へ道へ。(什麼か道はん、也た山僧をして道はしむ可らず、野鴨子の叫びを作す可らず、蒼天蒼天、脚跟下好し三十棒を與ふるに、知らず什麼の處に向つてか去る。)

【評唱】雪竇劈頭に便ち頰して道く、「野鴨子、知んぬ何許ぞ」と。且く道へ、多少か有る。「馬祖見來つて相共に語る」と。此は馬祖、百丈に問うて云く、「是れ什麼ぞ。」丈云く、「野鴨子」と云ふを頰す。語り盡す山雲海月の情。再び百丈に問ふ、「什麼の處にか去る」と云ふを頰す。馬大師他の爲にする意旨、自然に脱體なり。百丈依前として會せず、卻つて道ふ、「飛び過ぎ去る」と。兩重に蹉過す、飛び去らんと欲す、卻つて把住す。雪竇歎に據つて案に結す。又云く、「道へ道へ」と。此は是れ雪竇轉身の處なり。且く道へ、作麼生か道はん、若し忍痛

●禪月詩中の一句なり。非常に美句。

の聲を作さば則ち錯、若し忍痛の聲を作さずんば、又作麼生か會せん。雪竇然も頌し得て甚だ妙なりと雖も、爭奈せん也た跳不出なることを。

第五十四則

垂示に云く、生死を透出し、機關を撥轉す。等閑に截鐵斬釘 隨處に蓋天盖地。且く道へ、是れ什麼人の行履の處ぞ。試みに擧す看よ。

【本則】 擧す、雲門、僧に問ふ、「近離甚の處ぞ。」(也た西禪と道ふ可らず、探竿影草、東西南北と道ふ可らず)僧云く、「西禪。」(果然として可歎だ實頭、當時好し本分の草料を興ふるに)門云く、「西禪近日何の言句かある。」(擧せんと欲すれども恐らくは和尚を驚さんことを。深く來風を辨す、也た和尚に似て寐語するに相似たり)僧兩手を展ぶ。(敗闕し了れり、勾賊破家、人をして疑著せしむるを妨げず)門打つこと一掌。(令に據つて行す、好打、快便逢ひ難し)僧云く、「某甲話在り。」(備翻歎を要することを待つ、那卻つて旗を搥き鼓を奪ふ底の手脚有るに似たり)門卻つて兩手を展ぶ。(嶮、青龍に駕與すれども騎ることを解せず)僧無語。(惜むべし)門便ち打つ。(放過す可らず、此の棒合に是れ雲門喫すべし、何が故ぞ、斷るべきに當つて斷らざれば返つて其の亂を招く、閑黎合に多少を喫すべし、一着を放過す、若し放過せずんば合に作麼生。)

【本則】 東嶺禪師云く、五十四則は、便ち豈に馬大師のみならん、從上祖師、雲門、林才、亦只だ此の事を擧揚することを明す。

ざれば返つて其の亂を招く、閑黎合に多少を喫すべし、一着を放過す、若し放過せずんば合に作麼生。

【評唱】 雲門這の僧に問ふ、「近離甚れの處ぞ。」僧云く、「西禪」と。這箇は是れ當面の話、閃電の如くに相似たり。門云く、「近日何の言句か有りし」と。也た只だ是れ平常の說話なり、這の僧也た妨げず是れ箇の作家なることを。卻つて倒に去つて雲門を驗みて、便ち兩手を展ぶ。若し是れ尋常の人ならば、此の一驗に遭ふて、便ち手忙脚亂を見ん。他の雲門石火光の機有つて、便ち打つること一掌す。僧云く、「打つことは即ち故に是、爭奈せん某甲に話在ることを。」這の僧轉身の處有り、所以に雲門放開して、卻つて兩手を展ぶ。其の僧無語、門便ち打す。看よ他の雲門、自らは是れ作家なることを。一步を行すれば一步の落處を知る、前を顧みること會し亦後を顧みることを解す。蹤由を失せず、這の僧只だ前を瞻ることを解して後を顧みる能はず。頌に云く、

傳燈卷の十に、蘇州西禪和尚南泉に副ぐ。

【頌】 虎頭虎尾一時に收む。(殺人刀活人劍、須らく是れ這の僧にして始めて得べし、千兵は得易く、一將は求め難し)凛々たる威風四百州。(天下の人の舌頭を坐斷す、蓋天盖地)卻つて問ふ知らず何ぞ太だ嶮なる。(盲枷瞎棒す可らず、雪竇元來未だ知らざること任り、閑黎相次着也)師云く、「一著を放過す。」(若し放過せずんば又作麼生、盡大地の人一時に落節す、禪床を撃つこと一下。)

【評唱】雪竇此の話を頌して得て極めて會し易し、大意只だ雲門の機鋒を頌す。所以に道く、「虎頭虎尾一時に收む」と。古人云く、「虎頭に據つて虎尾を收むるは、第一句下に宗旨を明む」と。雪竇只だ欺に據つて案に結す、雲門の虎頭に據ることを會して、又能く虎尾を收むることを愛す。僧兩手を展ぶ、門便ち打す、是れ虎頭に據るなり。雲門兩手を展ぶ、僧無語、門又打す、是れ虎尾を收むるなり。頭尾齊しく收めて、眼流星に似たり、自然に擊石火の如く、閃電光に似たり。直に得たり凜凜たる威風四百州、直に得たり盡大地世界風颯颯地なることを、「卻つて問ふ知らず何ぞ太だ嶮なる」と。妨げず嶮處有ることを。雪竇云く、「一著を放過す」と。且く道へ、如今放過せざる時、又作麼生。盡大地の人、總に須らく棒を喫すべし。如今禪和子、總に道ふ、「他の手を展ぶる時を等つて、也た他に自分の草料を還さん」と。似たることは則ち也た似たり、是なることは則ち未だ是ならず。雲門只だ恁麼に働をして休せしむ可らず、也た須らく別に事の在る有るべし。

第五十五則

垂示に云く、穩密全眞、當頭に取證し、涉流轉物、直下に承當す。擊石火閃電光中に向つて、詭訛を坐斷し、虎頭に據つて虎尾を收むる處に於て、壁立千仞なることは則ち且く置く。一線道を放つ

て還つて爲人の處有りや也た無や。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、道吾漸源と一家に至つて弔慰す。源棺を拍つて云く、「生か死か。」(什麼と道ふぞ、好し惺惺ならず、這の漢猶は兩頭に在り)吾云く、「生とも也た道はじ、死とも也た道はじ。」(龍吟すれば霧起り虎嘯けば風生す、帽を買ふに頭を相す、老婆心切)源云く、「什麼としてか道はざる。」

(蹉過了也、果然として錯つて會す)吾云く、「道はじ、道はじ。」(惡水鷄頭に澆ぐ、前箭は猶は軽く、後箭は深し)回つて中路に至つて、(太だ惺惺)源云く、「和尚快かに某甲が與に道へ、若し道はずんば、和尚を打し去らん。」(卻つて些子に較れり、穿耳の客に逢ふこと罕に、多く舟を刻むの人に遇ふ、這般不啣喙の漢に似らば、地獄に入ること箭の如し)吾云く、「打つことは即ち打つに任す、道ふことは即ち道はじ。」(再三須らく事を重すべく、就身打劫す、這の老漢滿身泥水、初心改めず)源便ち打つ。(好打、且く道へ、他を打つて什麼を作す、屈棒元來人の喫する有る在り)後に道吾遷化す。源、霜に到つて、前話を擧示す。(知つて故に犯す、知らざるが是か不是か、是ならば也太奇)霜云く、「生とも也た道はじ、死とも也た道はじ。」(可飲だ新鮮、這般の茶飯卻つて元來人の喫する有り)源云く、「什麼としてか道はざる。」(語一般なりと雖も意に兩種無し、且く道へ前來の問と是れ同か

【本則】東嶺禪師云く、五十五則、即ち參禪は、本、生死到來の爲に此の事を用ひ得て、出身の一路有ることを要するのみ、是を以て須らく道吾漸源の一則を究むべし、今時の人皆輕薄にして古人の則を失ふことを明す。

是れ別か。霜云く、「道はじ道はじ。」(天上天下、曹溪の波浪如し相似たらば、限り無き平人も陸沈せられん。)源言下に於て省あり。(瞎漢、且つ山僧を瞞すること莫くば好し。)源一日鐵子を將て法堂上に於て、東より西に過ぎ、西より東に過ぐ。(也た是れ死中に活を得たり、好し先師の與に氣を出すに、他に問ふこと莫れ、且く這の漢一場の懷懼するを看よ。)霜云く、「什麼をか作す。」(隨後叟叟)源云く、「先師の靈骨を覓む。」(喪車背後に藥袋を懸く、悔ゆらくは當初を慎まざりしことを。爾什麼と道ふぞ。)霜云く、「洪波浩渺、白浪滔天、什麼の先師の靈骨をか覓めん。」(也た須らく他の作家に還して始めて得べし、群を成し隊を作して什麼か作ん。)雪竇著語して云く、「蒼天蒼天。」(太遲生、賊過ぎて後弓を張る、好し與に一坑に埋卻するに。)源云く、「正に好し力を著くるに。」(且く道へ、什麼の處にか落在す、先師曾て爾に向つて什麼とか道ひし。這の漢頭より尾に到り、直に如今に至るまで出身することを得ず。)太原の孚云く、「先師の靈骨猶ほ在り。」(大衆見るや、閃電相似たり、是れ什麼の破草鞋ぞ、猶ほ些子に較れり。)

【評唱】 道吾 漸源と一家に至つて弔慰す。源棺木を拍つて云く、「生か死か。」吾曰く、「生とも也た道はじ、死とも也た道はじ。」若し句下に向つて便ち入得し、言下に便ち歸を知らば、只だ這れ便ち是れ生死を透脱する底の關鍵なり。其れ或は未だ然らずんば、徃往當頭に蹉過せん。看よ他の古

① 道吾は、青原下三世藥山の法嗣、傳燈十四、會元第五に傳あり。
② 漸源は青源下四世道吾の法嗣、傳燈十五、會元第五に傳あり。

人、行住坐臥、妨げず此の事を以て念と爲すことを。纒かに人家に至つて弔慰す、漸源便ち棺を拍つて道吾に問うて云く、「生か死か。」道吾一絲毫を移易せず、他に對して道ふ、「生とも也た道はじ、死とも也た道はじ。」漸源當面に蹉過して、他の語句を逐ふて走つて、更に云く、「什麼と爲てか道はざる。」吾云く、「道はじ道はじ」と。吾謂つ可し赤心片片、錯を將て錯に就く。源猶ほ自ら惺惺ならず。回つて中路に至つて、又云く、「和尚快かに某甲が與に道へ、若し道はずんば和尚を打し去らん。」這の漢什麼の好惡をか識らん、所謂 ① 好心好報を得ずと。道吾舊に依つて老婆心切なり、更に他に向つて道ふ、「打つことは即ち打つに任す、道ふことは即ち道はじ」と。源便ち打つ、然も是の如くなりとも雖も、卻つて是れ他一籌を贏ち得たり。道吾恁麼に血滴滴地に他の爲にす、漸源恁麼に警地ならざることを得たり。道吾既に他に打たれ、遂に漸源に向つて云く、「汝且く去れ、恐らくは院中の知事探得して、爾が與に禍を作さんことを。」密に漸源をして出で去らしむ、道吾忒煞だ ② 傷慈なり。源後來一小院に至つて、行者の觀音經を誦して、「應以比丘身得度者、即現比丘身而爲說法」と云ふを聞いて、忽然大悟して云く、「我れ當時錯つて先師を怪む、争か知らん此の事言句上に在らざることを。」古人道く、「沒量の大人も語脈裏に轉卻せらる」と。有る底は情解して道ふ、道吾道はじ道はじと云ふ、便ち是れ道ひ了れり。喚んで背翻の筋斗を打つて、

① 大惠書に、「百不思の時惺惺」と云ふ、又靜中不昧を惺と云ふ。
② 好心好報を得ずは、常語なり、恩を仇で報ずるといふこと。
③ 傷慈は慈悲過ぎて、慈悲にきずが付くの義なり。

人をして摸索不著ならしむと作す。若し恁麼に會せば、作麼生か平穩なることを得去らん。若し脚實地を踏まば、一絲毫を隔てず。見すや七賢女、屍陀林に遊び、遂に屍を指して問うて云く、「屍這裏に在り、人什麼の處にか在る。」大姉云く、「作麼作麼。」一衆齊しく、無生法忍を證す。且く道へ、幾箇か有る、千箇萬箇、只だ是れ一箇。漸源後に石霜に到つて前話を擧す、石霜依前として云く、「生とも道はじ、死とも道はじ。」源云く、「什麼と爲てか道はざる。」霜云く、「道はじ道はじ。」他便ち悟り去る。一日鎌子を將て、法堂上に於て、東より西に過ぎ、西より東に過ぎ、意己が見解を呈せんと欲す。霜果して問うて云く、「什麼をか作す。」源云く、「先師の靈骨を覓む。」霜便ち他の脚跟を截斷して云く、「我が這裏洪波、浩渺、白浪滔天、什麼の先師の靈骨をか覓めん」と。石霜什麼と爲てか卻つて恁麼に道ふ、這裏に到つて、若し生とも道はじ、死とも道はじと云ふ處に於て、言下に薦得せば、方に始めより終に至るまで、全機受用することを知らん。爾若し道理を作して擬議尋思せば、直に是れ見難し。漸源云く、「正に好し力を著くるに」と。看よ他悟つて後道ひ得て自然に奇特なり。道吾一片の頂骨金色の如し、擊つ時銅聲を作す。雪竇著語して云く、「蒼天蒼天。」其の意兩邊に落在す。太原の孚云く、「先師の靈骨猶ほ在り」と、自然に道ひ得て穩當なり。這の一落索、一時に一邊に拈向す。且く道へ、作麼生か是れ

◎名義集三に云く、「尸陀正は尸多婆耶と云ふ、此に塚林と云ふ、其の林間遠にして寒し、僧祇に云く、「此の林に死屍多し、入れば寒畏す、此の緣類衆尼女門に出づ。喪處はほかば也。」

◎無生法忍は、無漏の眞智を發し、眞如實相を證するを云ふ。大悟した。

◎浩渺は遠水の貌。

省要の處、作麼生か是れ著力の處、道ふことを見すや、一處透れば千處萬處一時に透ると。若し道はじ道はじと云ふ處に向つて透得し去らば、便乃ち天下の人の舌頭を坐斷せん。若し透不得ならば、也た須らく此れ自ら參じ自ら悟るべし。容易に日を過す可らず、許の時光を惜む可し。雪竇の頌に云く、

【頌】 兔馬に角あり。(斬、可煞だ奇特、可煞だ新鮮。)牛羊に角なし。(斬、什麼の模様をか成す、別人を瞞することは即ち得たり。)毫を絶し毫を絶す。(天上天下唯我獨尊、爾什麼の處に向つてか摸索せん。)山の如く嶽の如し。(什麼の處にか在る、平地に波瀾を起す、爾が鼻孔を塞着す。)黄金の靈骨今猶ほ在り。(舌頭を截卻し、咽喉を塞卻す、一邊を拈向す、只だ恐らくは人の伊を識得すること無きことを。)白浪滔天何の處にか著けん。(一着を放過す、脚跟下に蹉過す、眼裏耳裏着くること得ず。)著くるに處無し。(果然、卻つて些子に較れり、果然として深坑に没溺す。)隻履西に歸つて曾て失卻す。(祖禪了せざれば、累兒孫に及ぶ、打して云く、什麼と爲てか卻つて這裏に在る。)

【評唱】 雪竇偏に注脚を下すことを會す、他は是れ雲門下の兒孫なり。凡そ一句の中に三句底の鉗錘を具す。道ひ難き處に向つて道破し、撥不開の處に向つて撥開し、他の緊要の處に去つて頌出す。直に道ふ、「兔馬に角有り、牛羊に角無し」と。且く道へ、兔馬什麼と爲てか角有り、牛羊什麼と爲てか卻つて角無き。若し前話を透得せば、始めて雪竇爲人の處有ることを知らん。有る者は錯り會して

道ふ、「道はじとは便ち是れ道ふ、無句は是れ有句、兔馬角無きに卻つて角有り」と云ひ、牛羊角有るに却つて角無しと云ふ」と。且得没交涉。殊に知らず、古人千變萬化、此の如く神通を現す、只だ偏が這の精靈の鬼窟を打破せんが爲なり。若し透得し去らば、一箇の了の字を消せず。兔馬に角有り、牛羊に角無し、毫を絶し釐を絶す、山の如く嶽の如し。這の四句、摩尼寶珠の一顆に似て相似たり。雪竇渾淪地に偏が面前に吐在し了れり。末後は皆是れ欸に據つて案に結す。黄金の靈骨今猶在り、白浪滔天何の處にか著けん。此れ石霜と大原孚との語を頌す。什麼と爲てか著くるに處無き、隻履西に歸つて曾て失卻す、靈龜尾を曳く、此は是れ雪竇轉身爲人の處。古人道く、「他活句に參じて死句に參せざれ」と、既に是れ失卻す。他の一火什麼と爲てか、却つて頭を競うて争ふ。

第五十六則

垂示に云く、諸佛曾て出世せず、亦一法の人に與ふるなし。祖師曾て西來せず、未だ曾て心を以て傳授せず。自らは是れ時人了せず、外に向つて馳求す。殊に知らず、自己腳跟下、一段の大事因縁、千聖も亦摸索不著なることを。只だ如今見不見、聞不聞、說不說、知不知、什麼の處よりか得來る。若し未だ洞達すること能はずんば、且く葛藤窟裡に向つて會取せよ。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、良禪客、欽山に問ふ、「一鐵破三關の時如何。」(嶮、妨げず奇特なることを、妨げず是れ箇の猛將なることを。)山云く、「關中の主を放出せよ看ん。」(劈面來也、也た大家知らんことを要す、主山は高く按山は低し。)良云く、「慙麼ならば即ち過を知つて必ず改めん。」(機を見て作す、已に第二頭に落つ。)山云く、「更に何の時をか待たん。」(擒有り縱有り、風行けば草偃す。)良云く、「好箭放つて所在を著す」と、便ち出づ。(果然、翻欸を待たんと擬す、那第二棒人を打すれども痛からず。)山云く、「且來闍黎。」(呼ぶことは則ち易く遣ふことは則ち難し。喚び得て頭を回せば什麼を作すにか堪へん。)良首を回す。(果然として把不住、中れり。)山把住して云く、「一鐵破三關は即ち且く止く、試みに欽山が與に箭を發せよ看ん。」(虎口裏に身を横ふ、逆水の波、義を見て爲ざるは勇無きなり。)良擬議す。(果然として摸索不着、打して云く、可惜許。)山打つこと七棒して云く、「且く聽す這の漢、疑ふこと三十年ならんことを。」(令合に慙麼なるべし、始有り終有り、頭正しければ尾正し、這箇の棒合に是れ欽山喫す。)

【評唱】良禪客、也た妨げず是れ一員の戰將なることを。欽山の手裏

【本則】東嶺禪師云く、五十六則、古人達道の言句見難し、是を以て兩子能く言句に通ずる、是れ第一と爲すことを明す。今、欽山の如きは、始めは師法に依るも、動もすれば智用を失ふ、趙州に如かず、又良禪客の如きは、既に此の事他に異なること有るを知ると雖も、全く雪峰、三聖、翠巖に在る時と、雲門の乾峰、翠巖に在る時との、受用自在の如くなるに似かず、是の故に彼此知音を得ず、喝拍時を失ふ、笑ふ可きの事有り、是れ此の一則見難く明め難し、講師大いに錯る、一擧一貶正意を得ず、先師深く察し、別に此の旨を通づ、書して以て鏡を後昆に垂る、貴ぶべし。

に向つて、左盤右轉して、^①鞭を墜して鞆を閃す。末後可惜許、弓折れ箭盡く。然も是の如しと雖も、^②李將軍自ら嘉聲の在る有り、封侯を得ざれば、也た是れ閑なり。這箇の公案、一出一入、一擒一縱、當機觀面に提げ、觀面當機に疾し、都て有無得失に落ちず、之を玄機と謂ふ。稍や些子の力量を虧かば、便ち顛蹶有らん。這の僧亦是れ箇の英靈底の弟子、箇の問端を致す、妨げず群を驚すことを。欽山は是れ作家の宗師、便ち他の問頭の落處を知る。鐵は箭鐵なり、一箭三關を射透する時如何。欽山の意に道く、「爾が射透得することは則ち且く置く、試みに關中の主を放出せよ看ん。」良云く、「恁麼ならば則ち過を知つて必ず改めん、妨げず奇特なることを。」欽山云く、「更に何の時をか待たん。」看よ他恁麼の祇對、欽山の所問、更に些子空缺の處無し。後頭に良禪客卻つて道ふ、「好箭放つて所在を著す」と云つて、拂袖して便ち出づ。欽山纔かに他恁麼に道ふを見て、便ち喚んで云く、「且來問黎」と。良禪客果然として把不住、便ち首を回す。欽山擒住して云く、「一鐵破三關は則ち且く止く、試みに欽山が與に箭を發せよ看ん。」良擬議す。欽山便ち打つこと七棒して、更に後に隨つて他の與に一道

① 佛祖宗派圖禪門達者有名放時的部に、良禪客、欽山相見とあり。

② 澧州欽山の文選禪師は、青原下五世洞山の法嗣、傳燈十七、會元十三に傳あり。

③ 此の句、欽山に「は、墜は」とりおとすなり、閃は「ふみはづす」なり、閃は電光の「ひらり」とするより轉じて、「わきへかはす」とになる、故に増約「彈避なり」と注す、夫れより不仕合せにあふな、閃と云ふふつもりのはづれたるなり、脚をくじきたるを閃と云ふ、「骨のはづれたる」なり、故に閃を「あぶみなふみはづす」と譯して可なり、人の爲に鞭撻をとりあつかふは、賤者の業なり、是れを一轉して、人の鞭撻を自由にする意にて、やはり欽山の鞭撻を良禪客が自由にするなり。

の咒を念じて云く、「且く聽す這の漢疑ふこと三十年せんことを。如今の禪和子盡く道ふ、「什麼と爲てか打つこと八下せず、又打つこと六下せずして、只だ打つこと七下す」と。然らずんば他問うて、試みに欽山が與に箭を發せよ看んと道ふを等つて便ち打たん」と。似たることは則ち也た似たり、是なることは則ち未だ是ならざること有り。這箇の公案、須らく是れ曾襟裏に些子の道理計較を懐かず、語言の外に超出して、方に能く一句下に三關を破すること有り、及び箭を放つ處有るべし。若し是と非とを存せば、卒に摸索不著ならん。當時這の僧、若し是れ箇の漢ならば、欽山也た大いに峻ならん。他既に此の令を行すること能はず、免れず倒に行せらるゝことを。且く道へ、關中の主、畢竟是れ什麼人ぞ。看よ雪竇の頌に云く、

【頌】 君が與に放出す關中の主。(中れり、當頭に蹠過す、退後退後。) 放箭の徒莽鹵なること莫れ。(一死再活せず、大いに誦訛、過ぎ了る。) 箇の眼を取れば耳必ず聾す。(左眼半斤、一著を放過す、左邊前まず右邊後れず。) 箇の耳を拾つれば目雙べ替す。(右眼八兩、只だ一路を得たり、進前するんば坑に墮ち壟に落つ、退後する則んば猛虎脚を銜む。) 憐む可し一鐵破三關。(全機恁麼に來る時如何、什麼と道ふぞ、破也墮也。) 的々分明なり箭後の路。(死漢、咄、打つて云く、還つて見るや。) 君見すや、(癩兒伴を牽く、葛藤を打し去る。) 玄沙言へることあり。(那箇か是れ玄沙にあらざる。) 大丈夫

夫天に先つて心の祖と爲ると。(一句截流萬機寢削、鼻孔我が手裏に在り、未だ天地世界有らざる已前、什麼の處に在つてか安身立命する。)

【評唱】此の頌の數句、歸宗の頌中の語を取る。歸宗昔日此の頌を作るに因つて、號して歸宗と曰ふ、宗門中之を宗旨の説と謂ふ。後來同安之を聞いて云く、「良公善能く箭を發す、要且つ的に中ることを解せず。僧有り、便ち問ふ、「如何が的に中ることを得ん。」安云く、「關中の主は是れ什麼人ぞ」と。後に僧有り、欽山に舉似す、山云く、「良公若し慙慙なるも也た未だ欽山の口を免れ得ず。然も是の如しと雖も、同安是れ好心にあらず。雪竇道く、「君が與に放出す關中の主」と。開眼も也た著たり、合眼も也た著たり。有形無形盡く斬つて三段と爲す、「放箭の徒莽鹵なること莫れ」と。若し善能く箭を放たば、則ち莽鹵ならず。若し善く放たずんば、則ち莽鹵なること知る可し。「箇の眼を取れば耳必ず聾す、箇の耳を捨つれば目雙べ聾す。」且く道へ、箇の眼を取れば、什麼と爲てか卻つて耳聾す。箇の耳を捨つれば、什麼と爲てか卻つて雙べ聾す。此の語取捨無くんば、方に能く透得せん、若し取捨有らば則ち見難し。「憐む可し一鐵破三關、的的

傳燈二十九、歸宗昔至眞禪師の頌に云く、「宗に歸すれば事理絶す、日輪正に午に當る、自在なることは師子の如く、物と依怙せず、四山の頂に獨歩し、三大の路に優游す、欠味すれば飛禽墜ち、頓呻すれば衆邪怖る、機變て箭及び鳥影没して手覆し難し、施張工伎の若く、塊前尺度の如し、巧に萬般の名を鑪るも宗に歸すれば還つて上に似たり、語默音聲絶す、旨妙にして情指き難し、箇の眼を棄つれば還つて聾し、箇の耳を取れば還つて聾す、一鐵破三關、分明なり箭後の路、憐む可し大丈夫、天に先つて心の祖と爲る。」

分明なり箭後の路」と。良禪客問ふ、「一鐵破三關の時如何。」欽山云く、「關中の主を放出せよ看ん」と。乃至末後同安の公案、盡く是れ箭後の路なり、畢竟作麼生。君見すや。玄沙言へること有り、大丈夫天に先つて心の祖と爲る。尋常心を以て祖宗の極則と爲す、這裏什麼と爲てか卻つて天地未生已前に於て、猶ほ此の心の祖と爲る。若し這箇の時節を識破せば、方に關中の主を識得せん。的的分明なり箭後の路、若し的に中らんと要せば、箭後分明に路有り。且く道へ、作麼生か是れ箭後の路、也た須らく是れ自ら精彩を著けて始めて得べし。大丈夫天に先つて心の祖と爲る。玄沙常に此の語を以て衆に示す。此れ乃ち是れ歸宗此の頌有り、雪竇誤つて用て玄沙の語と爲す。如今の參學者、若し此の心を以て祖宗と爲さば、參じて彌勒佛下生に到るも、也た未だ會せざること存らん。若し是れ大丈夫の漢ならば、心猶ほ是れ兒孫、天地未分も已に是れ第二頭。且く道へ、正當恁麼の時、作麼生か是れ天地に先せん。

同安常察禪師は、青原下六世九峰皮の法嗣、傳燈十七、會元第六に傳あり。
傳燈に、「真公若し慙慙なることを解せば、欽山が口を免れ得ん」に作る。未の字は倒るべしと。
祖庭事苑第二に云く、「愚此の頌を觀るに、正しく常歸宗の語を用ふ、其の意甚だ詳なり、今玄沙言へること有り」と云ふは、玄沙又歸宗に得るのみ、玄沙の頌に云く、「一二三四五、日輪正に午に當る、憐む可し大丈夫、天に先つて心の祖と爲る」と。

第五十七則

垂示に云く、未だ透得せざる已前は、一に銀山鐵壁に似たり。透得し了るに及んでは、自己元來是

れ鐵壁銀山。或は人あり、且つ作麼生と問はゞ、但他に向つて道はん。若し這の裡に向つて一機を露得し、一境を看得せば、要津を坐斷して、凡聖を通せざるも、未だ分外と爲さず。苟し或は未だ然らずんば、古人の様子を看取せよ。

【本則】 擧す、僧、趙州に問ふ、「至道無難、唯嫌揀擇」と、如何なるか是れ不揀擇。」(這の鐵蒺藜、多少の人呑むことを得ず、大いに人の疑着する有る在り、満口に霜を含まむ) 州云く、「天上天下、唯我獨尊。」(平地上に骨堆を起す、衲僧の鼻孔一時に穿卻す、金剛鐵券を鑄る) 僧云く、「此れ猶ほ是れ揀擇。」(果然として他に隨つて轉じ了れり、這の老漢を撻着す) 州云く、「田庫奴、什麼の處か是れ揀擇。」(山崩れ石裂く) 僧無語。(備に三十棒を放す、直に得たり目瞪して口呿すること)。

【評唱】 僧、趙州に問ふ、「至道無難、唯嫌揀擇」と。三祖の信心銘劈頭に便ち這の兩句を道ふ、多少の人有つて錯つて會す。何が故ぞ、至道本難きこと無く、亦難からざること無し、只だ是れ唯だ揀擇を嫌ふと。若し恁麼に會せば、一萬年にも也た未だ夢にも見ざること存らん。趙州常に此の語を以て人に問ふ、這の僧此の語を將て、倒に去つて他に問ふ。若し語上に向つて覺めば、此の僧卻つて天を驚し地を動す。若し語句上に在らずんば、又且つ如何。更に參せよ三十年、這箇些子の 關楔子、須らく

①關楔子は、からくりのれぢなり、通雅に、關楔は機杼なり。

く是れ轉じ得て始めて解すべし。虎鬚を捋づることとは也た須らく是れ本分の手段にして始めて得べし。這の僧也た危亡を顧みず、敢て虎鬚を捋でて便ち道ふ、「此れ猶ほ是れ揀擇。」趙州劈口に便ち塞いで道ふ、「田庫奴、什麼の處か是れ揀擇」と。若し別底を問著せば、便ち腳忙手亂することをけん。爭奈せん這の老漢是れ作家なることを。動不得の處に向つて動じ、轉不得の處に向つて轉ず。備若し透得せば、一切惡毒の言句、乃至千差萬狀、世間の戲論、皆是れ醍醐の入味なり。若し著實の處に到らば、方に趙州赤心片片たることをけん。田庫奴は乃ち福唐人の郷語に、人の無意智に似て相似たるを罵る。這の僧道く、「此れ猶ほ是れ揀擇。」趙州道く、「田庫奴、什麼の處か是れ揀擇」と。宗師の眼目、須らく恁麼に至つて金翅鳥の海を撃いて直に龍を取つて呑むが如くなるべし。雪竇の頌に云く、

【頌】 海の深きに似たり。(是れ什麼ぞ、度量して淵源測ること難し、未だ一半を得ざること存らん) 山の固きが如し。(什麼人が撼得せん、猶ほ半途に在り) 蚊蠅空裡の猛風を弄し。(也た恁麼底有り、果然として力を料らず、可煞な自ら量らず) 螻蟻鐵柱を撼す。(同坑に異土無し、且得沒交涉、闍黎他と同參) 揀たり擇たり。(水を擔つて河頭に賣る、什麼と道ふぞ、趙州來也) 當軒の布鼓。(已に言前に在り、一坑に埋卻す、麻の如く粟に似たり、打して云く、備が咽喉を塞卻す)

【評唱】 雪竇兩句を注して云く、「海の深きに似たり、山の固きが如し。」僧云く、「此れ猶ほ是れ揀擇」

と。雪竇道く、「この僧一に蚊蟲空裏の猛風を弄し、螻蛄鐵柱を撼すに似たり。雪竇他の膽大なることを賞す。何が故ぞ、此は是れ上頭の人の用ふる底。他敢て恁麼に道ふ、趙州亦他を放さず。便ち云く、「田庫奴、什麼の處か是れ揀擇」と。豈に是れ猛風鐵柱にあらずや、「揀たり擇たり、當軒の布鼓」と。雪竇最後に提起して活せしむ。若し識得して明白ならば、十分に爾自ら將ち來り了れり。何が故ぞ、道ふことを見すや、親切を得んと欲せば、問を將ち來つて問ふこと莫れと。是の故に當軒の布鼓。

第五十八則

【本則】 擧す、僧、趙州に問ふ、「至道無難、唯嫌揀擇。是れ時の人の窠窟なりや否や。(兩重の公案、也た是れ人を疑はしむる處、秤鎰に踏着すれば硬きこと鐵に似たり、猶ほ這箇の有る在り、己を以て人を方ふる莫れ。州云く、「曾て人有つて我れに問ふ、直に得たり五年分疎不下なることを。)(面の赤からんより語の直からんには如かず、胡孫毛蟲を喫す、蚊子鐵牛を咬む。)

【評唱】 趙州平生、棒喝を行せず、用ひ得て棒喝に過ぎたり。この僧問ひ得て來る、也た甚だ奇怪なり。若し是れ趙州にあらずんば、也た伊に答へ難からん。蓋し趙州は是れ作家、只だ伊に向つて道

① 祖庭事苑第三に云く、漢の王尊、東平の相と爲る、王の太傅に謂つて曰く、「布鼓を待つて雷門に向ふこと母れ」と。布鼓は布を以て鼓を爲る、聲無きなり。きればり太鼓で、日本のはりこの虎じや、無用物。【本則】 東嶺禪師云く、五十八則、又趙州の智用、大いに他師に異なることを明す。

ふ、「曾て人有り我れに問ふ、直に得たり五年分疎不下なることを。問處壁立千仞なれば、答處も亦他を輕せず。只だ恁麼に會せば、直に是れ當頭、若し會せずんば、且く道理計較を作すこと莫れ。見すや、投子の宗道者、雪竇の會下に在つて書記と作る。雪竇至道無難、唯嫌揀擇に參せしむ、此に於て省有り。一日雪竇他に問ふ、「至道無難、唯嫌揀擇、意作麼生。」宗云く、「畜生畜生。」後に投子に隱居す。凡そ去つて住持するに、袈裟を將て草鞋と經文とを裹む。僧問ふ、「如何なるか是れ道者の家風。」宗云く、「袈裟に草鞋を裹む。僧云く、「未審し意旨如何。」宗云く、「赤脚にして、桐城を下る」と。所以に道ふ、「佛に獻するは香の多きに在らず」と。若し透得脱し去らば、縦奪我れに在り、既に是れ一問一答、歴歴現成す。什麼と爲てか趙州卻つて道ふ、「分疎不下」と。且く道へ、是れ時人の窠窟なりや否や。趙州窠窟の裏に在つて他に答ふるか、窠窟の外に在つて他に答ふるか、須らく知るべし此の事言句上に在らざることを。或は箇の漢有つて、徹骨徹髓、信得及し去らば、龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似ん。頌に云く、

【頌】 象王嘖呻し。(富貴の中の富貴、誰人か悚然たらざらん、好箇の消息。)獅子哮吼す。(作家の中の作家、百獸腦裂す、好箇の入路。)無味の談(相罵ることは爾に饒す荷を接げ、鐵欄子に相似た

① 會元十六に、投子の法宗禪師、時に道者と稱す、青原下十世、雪竇顯の法嗣なり。② 不二云く、桐城は即ち桐郷を謂ふなり、勝覽に、桐郷は淮西路の舒州に在り、投子山も亦舒州に在り。③ 五祖の演上堂云く、「淺聞深悟、深聞は悟らず、爭奈何ん爭奈何ん、佛に獻するは香の多きに在らず。」

り、什麼の咬嚼の處か有らん、分疎不下五年強、一葉舟中に大唐を載す、渺渺兀然として波浪起る、誰か知る別に好思量有ることぞ。人口を塞斷す。(相唾することは備に饒す水を潑げ、啖、閑黎甚麼をか道はん。)南北東西。(有りや有りや、天上天下、蒼天蒼天。)鳥飛び兎走る。(自古自今一時に活埋せん。)

【評唱】 趙州道く、「曾て人有り我れに問ふ、直に得たり五年分疎不下なることを。」象王嘯呻し、獅子哮吼するに似たり。無味の談、人口を塞斷す。南北東西、鳥飛び兎走る」と。雪竇若し末後の句無くんば、何の處にか更に雪竇有つて來らん。既に是れ鳥飛び兎走る。且く道へ、趙州雪竇山僧、畢竟什麼の處にか落在する。

第五十九則

垂示に云く、天を該ね地を括り、聖を越え凡を超ゆ。百草頭上に涅槃妙心を指出し、干戈叢裡に、衲僧の命脈を點定す。且く道へ、箇の什麼人の恩力を承けてか、便ち恁麼なることを得たる。試みに擧す看よ。

【本則】 擧す、僧、趙州に問ふ、「至道無難、唯嫌揀擇、(再運前來、什麼と道ふぞ、三重の公案。)纔かに語言あれば是れ揀擇、(滿口に霜を含む。)

【本則】 東嶺禪師云く五十九則、前三則と同じく、共に趙州逸群の辯、後人驚く可し、當に勸め進めて益々修すべきを明す。

和尚如何が人の爲にせん。」(這の老漢を拶着す、囚。)州云く、「何ぞ這の語を引き盡さざる。」(賊は是れ小人、智君子に過ぎたり、白拈賊、賊馬に騎つて賊を趁ふ。)僧云く、「某甲只だ念すること這裡に至る。」(兩箇泥團を弄する漢、箇の賊に逢着す、探根敵手し難し。)州云く、「只だ這の至道無難、唯嫌揀擇。」(畢竟這の老漢に由る、他に眼睛を換卻せらる、捉敗了也。)

【評唱】 趙州道く、「只だ這の至道無難、唯嫌揀擇、擊石火の如く、閃電光に似たり。擒縱殺活、恁麼に自在なることを得たり。諸方皆謂ふ、「趙州逸群の辯有り」と。趙州尋常衆に示すに、此の一篇有り、云く、「至道無難、唯嫌揀擇、纔かに語言有れば是れ揀擇、是れ明白。老僧は明白裏に在らす、是れ汝等還つて護惜するや也た無や。」時に僧有り問うて云く、「既に明白裏に在らすんば、箇の什麼をか護惜せん。州云く、「我も亦知らず。」僧云く、「和尚既に知らずんば、什麼と爲てか明白裏に在らすと道ふ。」州云く、「事を問ふことは即ち得たり。禮拜し了つて退け。」(後來這の僧、只だ他の覺辯の處を拈じ、去つて他に問ふ、問ひ得て也た妨げず奇特なり、爭奈せん只だ是の心行なることを。若し是れ別人ならば、他を奈何ともすることを得じ。爭奈せん趙州は是れ作家、便ち道ふ、「何ぞ這の語を引き盡さざる」と。這の僧也た身を轉じて氣を吐くことを會して便ち道ふ、「某甲只だ念じて這裏に到る」と、一に安排するに似て相似たり。趙州聲に隨つて拈起して便ち答ふ、計較を須ひず、古人之を相續すること也た大いに難しと謂ふ。他龍蛇を辨じ、休咎を別つことは、他の本分の作家に還す。趙州這の僧の眼睛を換

卻して、鋒銛を犯さず、計較を著けず、自然に恰好なり。爾喚んで有句と作すことも也た得ず、喚んで無句と作すことも也た得ず、喚んで不有不無の句と作すことも也た得ず、四句を離れ百非を絶す。何が故ぞ、若し此の事を論せば、擊石火の如く、閃電光に似たり。急に眼を著けて看ば方に見ん。若し或は擬議躊躇せば、免れず喪身失命することを。雪竇の頌に云く、

【頌】 水灑げども著かす、(什麼をか説く、太深遠生、什麼の共に語處か有らん。)風吹けども入らず。(虚空の如く相似たり、硬剝剝地、空を望んで啓告す。)虎のごとく歩み龍のごとく行く、(他家自在を得たり、妨げず奇特なることを。)鬼號び神泣く。(大衆耳を掩はん、草偃せば風行く、閻黎是れ他と同參なること莫しや。)頭長きと三尺知んぬ是れ誰ぞ。(怪底の物、何れの方の聖者ぞ、見るや見るや。)相對して無言獨足にして立つ。(咄、頭を縮めて去る、一著を放過す、山麴放過せば即ち不可、便ち打つ。)

【評唱】 水灑げども著かす、風吹けども入らず、虎歩み龍行き、鬼號び神泣く、爾が喙啄の處無し。此の四句、趙州の答話、大いに龍馳せ虎驟るに似たることを。這の僧只だ一場の懺悔を得たり。但だ這の僧のみに非ず、直に得たり鬼も也た號び、神も也た泣くことを。風行けば草偃すに相似たり。末後の兩句、謂つ可し一子親しく得たりと。「頭長きと三尺知んぬ是れ誰ぞ、相對して無言獨足にして立つ」と。見ずや僧、古徳に問ふ、「如何なるか是れ佛。」古徳云く、「頭長きこと三尺、頸長きこと二寸」と。雪竇引用す、未審し諸人還つて識る麼。山僧も

① 洞山价の語なり。

也た識らず、雪竇一時に脱體に趙州を畫卻す、眞箇裡に在り了れり。諸人須らく子細に眼を著けて看るべし。

第六十則

垂示に云く、諸佛衆生、本來異なることなし。山河自己、寧ぞ等差あらん。什麼としてか卻つて渾て兩邊となり去るや。若し能く話頭を撥轉し、要津を坐斷するも、放過せば即ち不可。若し放過せずんば、盡大地一捏を消せず。且く作麼生か是れ話頭を撥轉する處。試みに擧す看よ。

【本則】 擧す、雲門拄杖を以て衆に示して云く、(點化は時に臨むに在り、殺人刀活人劍、爾が眼睛を換卻し了れり。)
拄杖子化して龍と爲り、(何ぞ周遮することを用ひん、化することを用て什麼か作ん。)
乾坤を吞卻し了れり。(天下の衲僧性命存せず、還つて咽喉を碍著するや、閻黎什麼の處に向つてか安身立命せん。)
山河大地、甚の處よりか得來る。(十方壁落無く、四面亦門無し。)
東西南北四維上下、這箇を爭奈何せん。)

【本則】 東嶺禪師云く、第六十則、便ち之を兼れ用ふる者、彼の乾峰三種樹の因縁、翠巖眉毛の話の如き、臨機應變、企及すべからざるの知用、以て師法と爲すに堪へたるのみ。是れ雲門大師を曰ふ。

【評唱】 只だ雲門の拄杖子化して龍と爲り、乾坤を吞卻し了れり。山河大地、甚の處よりか得來ると道ふが如きんば、若し有と道はば則ち瞎す、若し無と道はば則ち死す。還つて雲門爲人の處を見る麼、

我れに拄杖子を還し來れ。如今の他人の雲門獨露の處を會せずして卻つて道ふ、「色に即して心を明め、物に附いて理を顯す」と。且く釋迦老子四十九年の説法の如きんば、此の議論を知らずんばある可らず。何が故ぞ、更に拈花を用ひ、迦葉微笑する。這の老漢使ち探胡して道く、「吾に正法眼藏、涅槃妙心有り、摩訶大迦葉に分付す。」更に何ぞ必ずしも心印を單傳せん。諸人既に是れ祖師門下の客、還つて單傳底の心を明得する麼。智中若し一物有らば、山河大地 縱然として現前せん。智中若し一物無くんば、外則ち了に絲毫無し。什麼の理と智と冥し、境と神と會すとか説かん。何が故ぞ、一會一切會、一明一切明。長沙道く、「學道の人眞を識らざることは、只だ從前識神を認むるが爲なり。無量劫來生死の本、癡人喚んで本來の人と作す。」忽ち若し 陰界を打破して 身心一如、身外無餘なるも、猶ほ未だ一半を得ざること有り。什麼の色に即して心を明め、物に附いて理を顯すとか説かん。古人道く、「一塵纔かに起つて、大地全く收る」と。且く道へ、是れ那箇の一塵ぞ、若し這の一塵を識得せば、便ち拄杖子を識得せん。纔かに拄杖子を拈起すれば、便ち縱横の妙用を見ん。恁麼の説話、早く是れ葛藤し了れり。何ぞ況んや更に化して龍と爲らんや。慶藏主云く、「五千四十八卷、還た曾て恁麼の説話有り麼」と。雲門毎に拄杖の處に向つて全機大用を拈擻して、活潑潑地に人の爲にす。

① 宗鏡の普義に、縱然ば森然なり、隆起の貌。

② 五陰、十八界。

③ 以下二句、忠國師の語、會元第二に見ゆ。

④ 洛浦和尚の語、雲門錄上卷に見ゆ。

⑤ 芭蕉慧清は、南嶽下六世、南塔涌の法嗣、會元第九に傳あり。

芭蕉衆に示して云く、「衲僧の 巴鼻、盡く拄杖頭上に在り」と。永嘉亦云く、「是れ形を標して慮し、事擬するにあらず、如來の寶杖親しく蹤跡す」と。如來昔然燈佛の時に於て、髮を布き泥を掩ふて、以て彼の佛を待す。然燈曰く、「此の處當に梵刹を建つべし」と。時に一の天子有り、遂に一莖草を標して云く、「梵刹を建て竟んぬ」と。諸人且く道へ、這箇の消息那裏より得來る。祖師道く、「棒頭に取證し、喝下に 承當す。」且く道へ、箇の什麼をか承當する。忽ち人有つて如何なるか是れ拄杖子と問はば、是れ筋斗を打すること莫し麼、是れ掌を撫して一下すること莫し麼。總に是れ精魂を弄す。且喜すらくは沒交涉。雪竇の頌に云く、

【頌】 拄杖子乾坤を呑む。(什麼と道ふぞ、只だ用て狗を打たん。)徒らに説く桃花の浪に奔ると。(向上の一竅を撥開すれば、千聖齊しく下風に立つ。也た雲を拈ひ霧を攫む處に在らず、説得して千徧萬徧せんより、如かじ手腳羅籠一徧せんには。)尾を燒く者は雲を拈へ霧を攫むに在らず。(左之右之、老僧只管看る、也た只た是れ一箇の乾柴片。)腮を嚙する者は何ぞ必ずしも膽を喪して魂を亡せん。(人人氣宇王の如し、自らは是れ爾が千里萬里、爭奈せん悚然たることを。)拈了也。(慈悲を謝す、老婆心切。)聞不聞。(草に落つることを免れず、聞くことを用て什

⑥ 巴は把の轉音、道具の柄なり、鼻は「つまみ」なり、「とらまへ」どころ、つかまへどころ、し又は、しよつこと譯す。

⑦ 宗門統要續集第一に云く、「世尊因地に髮を布き泥を掩ふて華を然燈に獻す云々。」

⑧ 雪竇洞庭録に、疎座して云く、云々、六代の祖師も全提し起さず、所以に棒頭に取證し、喝下に承當す、云々。承當は、ひきうけて、吾が物にする」と譯す。

麼か作ん。直に須らく灑々落落たるべし。(殘羹餽飯、乾坤大地甚の處よりか得來る。更に紛々たることを休めよ。(令を擧する者は先づ犯す、相次に彌が頭上に到る、打つて云く、放過せば則ち不可。七十二棒且く輕恕す。(山僧曾て此の令を行せず、令に據つて行す、頼に山僧を得るに値ふ。)一百五十君を放し難し。(正令當行、豈に只だ恁麼に了る可けんや。直饒ひ朝打三千、暮打八百するも、什麼を作すにか堪へん。)師蔘に拄杖を拈じて下座。大衆一時に走散す。(雪竇龍頭蛇尾にして什麼か作ん。)

【評唱】 雲門は委曲に人の爲にす、雪竇は截徑に人の爲にす。所以に化して龍と爲ることを撥却して、恁麼に道ふことを消せず、只だ是れ拄杖子乾坤を呑むと。雪竇の大意、人の情解を免る。更に道ふ、「徒らに説く桃花の浪に奔る」と、更に必ずしも化して龍と爲らす。蓋し禹門に三級の浪有り、三月に至る毎に、桃花の浪漲る、魚能く水に逆ふて躍つて浪を過ぐる者は、即ち化して龍と爲る。雪竇道く、「縦ひ化して龍と爲るも、亦是れ徒らに説く、尾を焼く者は雲を撃ひ霧を攫むに在らず」と。魚禹門を過ぐれば、自ら天火有りて其の尾を焼く、雲を撃ひ霧を攫んで去る。雪竇の意に道ふ、「縦ひ化して龍と爲るも、亦雲を撃ひ霧を攫むに在らず、腮を曝す者も何ぞ必ずしも膽を喪し魂を亡せん。」清凉疏の序に云く、「積行の菩薩、尙ほ乃ち腮を龍門に曝す」と。大意華嚴の境界は、小徳小智の造詣する所に非ず、猶ほ魚

①文苑集卷四に、魚龍と化する時、必ず雷爲に其の尾を燒き、乃ち化するを得る。

龍門を過ぐるに、透り過ぎざる者は、點頭して回り、死水沙磧の中に困じて、其の腮を曝すが如くなるを明す。雪竇の意に道く、「既に點頭して回る、必ずしも膽を喪し魂を亡せん」と。拈了也、聞不聞、重ねて注脚を下して、一時に彌が與に掃蕩し了れり。諸人直に須らく灑洒落落にし去るべし、更に紛々たることを休めよ。彌若し更に紛紛紜紜たらば、拄杖子を失却し了らん。七十二棒且く輕恕すと。雪竇彌が爲に重を捨て輕に従ふ。古人道く、「七十二棒、翻つて一百五十と成る」と。如今の人錯つて會して、「卻つて只だ數目を算す、合に是れ七十五棒なるべし、什麼と爲てか卻つて只だ七十二棒なる」と。殊に知らず、古人の意言外に在ることを。所以に道ふ、「此の事言句の中に在らず」と。後人の去つて穿鑿することを免る、雪竇所以に引用す。直饒ひ眞箇灑洒落落たるも、正に好し彌に七十二棒を與ふるに、猶ほ是れ輕恕す。直饒ひ總に此の如くならざるも、一百五十君を放し難しと。一時に頰し了れり、卻つて更に拄杖を拈じて、重重に相爲にす。然も恁麼なりと雖も、也た一箇の皮下に血有る無し。

國譯佛果園悟禪師碧巖錄卷第六終

國譯佛果園悟禪師碧巖錄卷第七

第六十一則

垂示に云く、法幢を建て、宗旨を立つることは、他の自分の宗師に還す。龍蛇を定め、縑素を別つことは、須らく是れ作家の知識なるべし。劍及上に殺活を論じ、棒頭上に機宜を別つことは、則ち且く置く。且く道へ、獨り寰中に據るの事、一句作麼生か商量せん。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、風穴垂語して云く、(雲を興し雨を致す、也た主と爲り賓と爲らんことを要す。)「若し一塵を立すれば、(我れ法王と爲て法に於て自在なり、花簇簇、錦簇簇。)家國興盛し、(是れ他の屋裏の事にあらず。)一塵を立せずんば、(蹤を掃ひ跡を滅す、眼睛を失却す、鼻孔に和して失す。)家國喪亡す。」(一切處光明、家國を用て什麼か作ん、全く是れ他家屋裏の事。)雪竇拄杖を拈じて云く、(須らく是れ壁立千仞にして始めて得べし、達磨來也。)^①「還つて同生同死底の衲僧ありや。」(我れに話頭を還し來れ、然も是の如しと雖も、不平の事を平げんと要せば、須らく雪竇

【本則】東嶺禪師云く、六十一則、便ち林才の宗風、向上の機有りて、諸方を坐斷す、而れども後人に至りては之を知らず、故に只だ龜強の會を作して、林才宗と爲す、是に於て風穴之を拿び、別に一則の因縁を設けて以て後規を垂れ永く有力の兒孫を待つことを明す。

に商量して始めて得べし。還つて知るや、若し知らば偏に許す自由自在なることを、若し知らずんば朝打三千暮打八百。

【評唱】只だ風穴の衆に示して云ふが如きんば、「若し一塵を立すれば、家國興盛し、一塵を立せずんば、家國喪亡す」と。且く道へ、一塵を立するが即ち是か、一塵を立せざるが即ち是か、這裏に到つて、須らく是れ大用現前して始めて得べし。所以に道ふ、設使ひ言前に薦得するも、猶ほ是れ殼に滯り封に迷ふ。直饒ひ句下に精通するも、未だ途に觸れて狂見することを免れず。他は是れ臨濟下の尊宿、直下に自分の草料を用ふ。若し一塵を立すれば、家國興盛し、野老顰蹙す。意國を立し邦を安するは、須らく謀臣猛將に藉るべし。然る後に麒麟出で鳳凰翔ける、乃ち太平の祥瑞なり。他の三家村裏の人、争か恚廢の事有ることを知らん。「一塵を立せざれば、家國喪亡す」と、風颯颯地、野老什麼と爲てか出で來つて謳歌す、只だ家國喪亡するが爲なり。洞下に之を轉變の處と謂ふ、更に佛無く衆生無く、是無く非無く、好無く惡無し、音響蹤跡を絶す。所以に道ふ、「金屑貴しと雖も、眼に落ちて賢と成る。」又云く、「金屑は眼中の賢、衣珠は法上の塵、己靈猶ほ重んぜず、佛祖是れ何人ぞ」と。七穿八穴、神通妙用、奇特と爲さず、箇裏に到つて、^②「衲被蒙頭萬事休す。此の時山僧都て不會、若し更に心と説き性と説き、玄と説き妙と説くも、都て用不着、何が故ぞ、他家に自ら神仙の

① 以下四句は、徳山の密裏を頌する句なり、載せて雲門錄の後にあり。
② 以下、二句、石頭和尚師庵の歌、傳燈第三十、諸祖偈頌下

境有り。南泉衆に示して云く、「黃梅七百の高僧、盡く是れ佛法を會する底の人、他の衣鉢を得ず。唯だ盧行者のみ有つて、佛法を會せず、所以に他の衣鉢を得。」又云く、「三世の諸佛有ることを知らず、狸奴白牯御つて有ることを知る。」野老或は鬚鬢し、或は謳歌す。且く道へ、作麼生か會せん。且く道へ、他什麼の眼を具してか御つて恁麼なる。須らく知るべし野老門前、別に條章有ること。雪竇雙提し了つて、卻つて拄杖を拈じて云く、「還つて同生同死底の衲僧有り麼。」當時若し箇の漢有つて出で來つて、一句を道ひ得て、互に賓主と爲らば、雪竇這の老漢の後面に自ら點習することを免れ得ん。

● 卷に載す。
● 古尊新錄十二、南泉語要に出づ。

● 從洋錄第五、南泉、衆に示して云く、「三世の諸佛云々。」

【頌】野老從教あれ眉を展べざることを。(三千里外箇の人有り、美食飽人の喫に中らす。)且く闢る家國雄基を立することを。(太平の一曲大家知る、行かんと要すれば即ち行き、住らんと要すれば即ち住る、盡乾坤大地是れ箇の解脫門、偏作麼生か立せん。)謀臣猛將今何にか在る。(有りや有りや、土曠く人稀にして、相逢ふ者少し、且く點習すること莫れ。)萬里の清風只だ自知す。(傍若無人誰をして掃地せしめん、也た是れ雲居の羅漢。)

【評唱】適來は雙提し了れり、這裏は卻つて只だ一邊を拈じ、一邊を放す。長を裁ち短を補ひ、重を捨て輕に従ふ。所以に道ふ、「野老從教あれ眉を展べざることを。我れ且く家國の雄基を立てんことを闢る。謀臣猛將今何にか在る」と。雪竇拄杖を拈じて云く、「還つて同生同死底の衲僧有り麼。」一に還つて謀臣猛將有り麼と道ふに似たり、一口に一切の人を吞卻し了れり。所以に道ふ、「土曠く人稀にして、相逢ふ者少しなり。」還つて相知る者有り麼、出で來れ一坑に埋卻せん。萬里の清風只だ自知す、便ち是れ雪竇の點習の處なり。

第六十二則

垂示に云く、無師の智を以て、無作の妙用を發し、無縁の慈を以て不請の勝友と作る。一句下に向つて、殺あり活あり。一機中に於て、縦あり擒あり。且く道へ、什麼人か曾て恁麼にし來る。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、雲門衆に示して云く、「乾坤の内、(土曠く人稀にして、六合收むることを得ず。)宇宙の間、(鬼窟裏に向つて活計を作すことを休めよ、蹉過了也。)中に一寶あり、(什麼の處にか在る、光生せり、切に忌む鬼窟裏に向つて覓むることを。)形山に秘在す。」(拶、點)燈籠を拈じて佛殿裏に向ひ、(猶ほ商量しつ可し。)三門を將て燈籠上に來す。(雲門大師是なることは則ち是、妨げず語訛なることを。猶ほ些子に較れり、若し子細に檢點し將ち來らば、未だ屎臭の氣を免れず。)

● 傳燈第六、中邑恩禪師、因に仰山問答の語なり、師曰く、「譬へば蠅螟の蚊子の眼睫上に在りて、窠を作して、十字街頭に向つて叫喚して、土曠く人稀にして、相逢ふ者少しなりと云ふが如し。」

【評唱】雲門道く、「乾坤の内、宇宙の間、中に一寶有り、形山に秘在す」と。且く道へ、雲門の意釣竿頭に在るか、意燈籠上に在るか。此れ乃ち肇法師の寶藏論の數句、雲門拈じ來つて衆に示す。肇公時に後秦の逍遙園に於て論を造る、維摩經を寫して、方に莊老の未だ其の妙を盡さざることを知る。肇乃ち羅什を禮して師と爲す。又瓦棺寺の跋陀婆羅菩薩の、西天二十七祖の處より、心印を傳へ來るに參す。肇深く其の堂奥に造る。肇一日難に遭ふ、刑に臨むの時、七日の暇を乞うて、寶藏論を造る。雲門便ち論中の四句を拈じて衆に示す。大意に云く、「如何ぞ無價の寶を以て、陰界の中に陰在す」と。論中の語言、皆宗門の説話と相符合す。見すや鏡清、曹山に問ふ、「清虛の理、畢竟身無き時如何。」山云く、「理は即ち是の如し、事は作麼生。」清云く、「如理如事。」山云く、「曹山一人を瞞することは即ち得たり、諸聖の眼を爭奈何せん。」清云く、「若し諸聖の眼無くんば、爭か不恁麼なることを知らん。」山云く、「官には針をも容れず、私に車馬を通ず」と。所以に道ふ、「乾坤の内、宇宙の間、中に一寶有り、形山に秘在す」と。大意人人具足、箇箇圓成することを明す。雲門便ち拈じ來つて衆に示す、已に是れ十分に現成す、更に座主に似て相似て、爾が與に注解し去る可らず。他慈悲爾が與に注脚を下して道く、「燈籠を拈じて

① 梁高僧傳第二に云く、佛跋跋陀羅、此には覺賢と云ふ、本姓は釋氏、迦維羅衛の人、甘露飯王の苗裔なり、佛大先に受業す云々。
② 西天二十七祖、般若多羅尊者。
③ 禪林類聚十三に云く、肇法師、秦主の難に遭ひ、刑に就くに臨み、偈を説いて云く、「四大元主無く、五陰本來空、頭を將つて白刃に臨む、猶ほ春風を斬るに似たり。」
④ 此の語、寶藏論廣照空有品に出づ。

佛殿裏に向ひ、三門を將て燈籠上に來す」と。且く道へ、雲門恁麼に道ふ意作麼生。見すや、古人云く、「無明の實性即佛性、幻化の空身即法身」と。又云く、「凡心に即して佛心を見る」と。形山は即ち是れ四大五蘊なり、中に一寶有り、形山に秘在す。所以に道ふ、「諸佛心頭に在り、迷人外に向つて求む、内に無價の寶を懷いて、識らずして一生休す」と。又道く、「佛性堂として顯現す、住相の有情は見難し。若し衆生無我なるを悟らば、我が面何ぞ佛面に殊ならん。心は是れ本來心、面は是れ娘生の面、劫石は移動す可くとも、箇の中改變無し」と。有る者は只だ箇の昭昭靈靈を認めて寶と爲す。只だ是れ其の用を得ず、亦其の妙を得ず。所以に動轉することを得ず、開撥し行せず。古人道く、「窮すれば則ち變じ、變すれば則ち通す」と。燈籠を拈じて佛殿裏に向ふ、若し是れ常情ならば、測度し得べし。三門を將て燈籠上に來す、還つて測度し得てん麼。雲門爾が與に一時に情識意想、得失是非を打破し了れり。雪竇道く、「我れは愛す韶陽新定の機、一生人の與に釘を抜き楔を抜くことを。」又云く、「曲木位に據る知んぬ幾何ぞ、利刃翦却して人をして愛せしむ。」他道く、「燈籠を拈じて佛

⑤ 永嘉の證道歌。
⑥ 清涼の華嚴大疏序文の語。
⑦ 長沙岑禪師の偈、傳燈第十に見ゆ。
⑧ 以下南嶽懶瓚和尚の歌、傳燈三十に見ゆ、歌に云く、「謾りに眞佛を求むること莫れ、眞佛見る可らず、妙性及び靈臺、何ぞ曾て重鍊を受けん、心は是れ無事の心、面は是れ娘生の面、劫石は移動すべくとも、箇の中改變無し。」
⑨ 易蒙辭下篇の文なり。
⑩ 雪竇祖英集に、勝因長老を送る偈に云く、「黃梅の散席三百載、續煥聯芳事空しく在り、宗分派分異端を生ず、華分葉分太だ煩碎す、韶陽間出して慷慨多し、權要雄雄として曾て絶待す、曲木位に據る知んぬ幾何ぞ、利刃翦却して人をして愛せしむ。」

殿裏に向ふ、這の一句、已に截斷し了れり。又三門を將て燈籠上來す」と。若し此の事を論せば、擊石火の如く、閃電光に似たり。①雲門道く、「汝若し相當り去らずんば、且く箇の入路を覓めよ、微塵の諸佛、爾が脚跟下に在り、②三藏の聖教、爾が舌頭上に在り、如かじ悟り去るの好からんには。和尙子妄想すること莫れ、天は是れ天、地は是れ地、山は是れ山、水は是れ水、僧は是れ僧、俗は是れ俗。」良久して云く、「我が與に面前の按山を拈じ來れ看ん。」便ち僧有り、出でて問うて云く、「學人山は是れ山、水は是れ水と見る時如何。」門云く、「三門什麼と爲てか這裏より過ぐ」と。③爾が死卻せんを恐れて、遂に手を以て劃一劃して云く、「識得する時は、是れ醍醐の入味、若し識不得ならば、反つて毒藥と爲らん。」所以に道く、「了了の時了す可き無し、玄玄の處直に須らく呵すべし。」雪竇又拈じて云く、「乾坤の内、宇宙の間、中に一寶有り、形山に秘在す。」壁上に掛在す、達磨九年、敢て正眼に覷著せず、而今猶僧見んと要すや、劈脊に便ち棒せん。看よ他の本分の宗師、終に實法を將て、人を繫綴せざることを。④玄沙云く、「羅籠すれども肯て住らす、呼喚すれども頭を回さず、

①本録垂示代語の部に由づ。
 ②三藏は、經、律、論。
 ③和尙子より以下、這裏より過ぐに至る迄、雲門錄の對機部に見ゆ。
 ④幻住曰く、此の一段語意未だ極かならざること有り、今圓悟心要に云ふ所を以て、此の錄に映對するに、爾が死却せんを恐れてとは、圓悟の評詞なり、遂に手を以て劃一劃すとは、雲門の爲す所を記するなり、識得する時云云は、正に是れ雲門の語を評するなり。
 ⑤已下同安十玄談、傳燈二十九に載す。
 ⑥幻住曰く、雪竇後錄及び福本に「形山に秘在し」の句無し、當に刪るべし。
 ⑦會元玄沙の本傳に見ゆ。

然も恁麼なりと雖も、也た是れ靈龜尾を曳く。雪竇の頌に云く、

【頌】 看よ看よ。(高き眼を著けよ、看ることを用て什麼か作ん、驪龍珠を玩ぶ。)古岸何人か釣竿を把る。(孤危は甚だ孤危、壁立は甚だ壁立、賊過ぎて後弓を張る、腦後に腮を見れば、與に往來すること莫れ。)雲冉冉。(打斷して始めて得ん、百匝千重、炙脂帽子、鶴臭布衫。)水漫々。(左之右之、前に遮り後に擁す。)明月蘆花君自ら看よ。(看着すれば則ち晴す、若し雲門の語を識得せば、便ち雪竇末後の句を見ん。)

【評唱】 若し雲門の語を識得せば、便ち雪竇爲人の處を見ん。他雲門の衆に示す後面の兩句に向つて、便ち爾が與に箇の注脚を下して云ふ、「看よ看よ。」爾便ち瞠眉瞠眼の會を作す、且得沒交涉。古人道く、「靈光獨り耀いて、適に根塵を脱す、體露眞常、文字に拘らず、心性無染、本自ら圓成、但だ妄縁を離るれば、即ち如如佛」と。若し只だ瞠眉努眼の處に向つて坐殺せば、豈に能く根塵を脱得せんや。雪竇道く、「看よ看よ。」雲門古岸に在つて釣竿を把るが如くに相似たり、雲又冉冉、水又漫漫、明月蘆花に映じ、蘆花明月に映す。正當恁麼の時、且く道へ、是れ何の境界ぞ。若し便ち直下に見得せば、前後只だ是れ一句に相似たり。

①古雲の神讚の偶、傳燈第九に見ゆ。
 ②廣韻に冉冉は行く貌。
 ③廣韻に漫漫は廣大の貌。

第六十三則

垂示に云く、意路不到、正に好し提撕するに。言詮不及、宜しく急に眼を著くべし。若し也た電轉じ星飛ばゞ、便ち傾湫倒嶽すべし。衆中辨得する底あることなしや。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、南泉一日、東西の兩堂猫兒を争ふ。(是れ今日合關なるのみにあらず、一場の漏逗)南泉見て遂に提起して云く、「道ひ得ば即ち斬らす。」(正令當行、十方坐斷、這の老漢龍蛇を定むるの手脚有り)衆對なし。(惜む可し放過するを、一隊の漆桶什麼を作すにか堪へん、杜撰の禪和麻の如く粟に似たり。)泉猫兒を斬つて兩段と爲す。(快哉快哉、若し此の如くならずんば、盡く是れ泥團を弄するの漢、賊過ぎて後弓を張る、已に是れ第二頭、未だ擧起せざる時好し打つに。)

【本則】東嶺禪師云く、六十三則、便ち古人只だ向上の一機を賞ぶ、事上に於て、全提止令の作用を明す。

【評唱】宗師家、看よ他の一動一靜、一出一入、且く道へ、意旨如何。這の斬猫兒の話、天下の叢林、商量浩浩地なり。有る者は道ふ、「提起の處便ち是」と、有る底は道ふ、「斬處に在り」と。且得都て沒交涉。他若し提起せざる時も、亦匪匠地に道理を作し盡さんや。殊に知らず、他の古人、乾坤を定むる底の眼有り、乾坤を定むる底の劍有ることを。爾且く道へ、畢竟是れ誰か猫兒を斬る、只だ南泉提起して道ひ得ば即ち斬らすと云ふが如きんば、當時忽ち人有りて道ひ得ば、且く道へ南泉斬るか斬らざるか。所以に道ふ、「正令當行、十方坐斷」と。天外に出頭して看よ、誰か是れ箇の中の人、其れ實に當時元斬らす、此の話亦斬と不斬との處に在らず。此の事軒かに知んぬ、此の如く分明なることを。情塵意見の上に在つて討ねざれ、若し情塵意見の上に向つて討ねば、則ち南泉に辜負し去らん。但だ當鋒劍刃上に向つて看よ、是れ有も也た得たり、無も也た得たり、不有不無も也た得たり。所以に古人道く、「窮する則んば變じ、變する則んば通す」と。而今の人變通を解せずして、只管に語句上に向つて走る。南泉恁麼に提起す、人をして合に甚の語をも下し得せしむ可らず。只だ人をして自ら薦み、各自自ら用ひ自ら知らしめんことを要す。若し恁麼に會せずんば、卒に摸索不著ならん。雪竇當頭に頰して云く、

【頰】兩堂俱に是れ杜禪和。(親言は親口より出づ、一句に道斷す、欸に據つて案に結す。)煙塵を撥動して奈何ともせず。(看よ爾什麼の折合をかせさん、現成公案、也た些子有り)頼に南泉の能く令を擧ぐることを得て、(拂子を擧して云く、一に這箇に似たり、王老師猶ほ些子に較れり、好箇の金剛王寶劍、用て泥を切り去る。)一刀兩段偏頗に任す。(百雜碎、忽ち人有り刀を按住せば、看よ他什麼をか作ん、放過す可らず、便ち打つ。)

【評唱】兩堂俱に是れ杜禪和、雪竇句下に向つて死せず、亦驢前馬後を認めず、撥轉の處有つて、便ち道ふ、「煙塵を撥動して奈何ともせず」と。雪竇、南泉と手を把つて共に行く、一句に説き了れり。

兩堂の首座、歇頭の處没し、到る處に只管煙塵を撥動して、奈何ともすることを得ず。頼に南泉他の與に這の公案を斷じて、收得淨盡することを得たり。他爭奈せん。前村に構らず、後店に迭らざることを。所以に道ふ、「頼に南泉能く令を擧することを得たり、一刀兩段偏頗に任す」と。直下に一刀兩段す、更に偏頗有ることを管せず。且く道へ、南泉什麼の令にか據る。

第六十四則

【本則】 擧す、南泉復た前話を擧して趙州に問ふ。(也た須らく是れ同心同意にして始めて得べし、同道の者方に知る。)州便ち草鞋を脱して、頭上に戴いて出づ。(免れず拖泥滯水なることを。)南泉云く、「子若し在りしかば、恰も猫兒を救ひ得ん。」(唱) 拍相隨ふ、知音の者少し、錯を將て錯に就く。

①方語に「兩頭不到」と云ふ、撰述ともに及字の義なり、旅人の宿をとりそこなうて、後へも前へも行かれぬこと」の常語なり。
【本則】 東嶺禪師云く、六十四則、便ち古人受用、機中句を藏し、全く後賢の企及するところ、非ず、虛堂門下別に道理有る者、此の事有るを以てなり、兒孫後人をして、知らしめざる可らざることを明す。

【評唱】 趙州は乃ち南泉の的の子なり、頭を道へば尾を會す、擧著すれば便ち落處を知る。南泉晩間に復た前話を擧して趙州に問ふ、州は是れ老作家、便ち草鞋を脱して、頭上に於て戴いて出づ。泉云く、「子若し在りしかば卻つて猫兒を救ひ得ん」と。且く道へ、眞箇恁麼か不恁麼か、南泉云く、「道ひ得ば即ち斬らす」と。擊石火の如く、閃電光に似たり。趙州便ち草鞋を脱し

て、頭上に於て戴いて出づ。佗活句に參じて死句に參せず、日は新に時時新なり、千聖も一絲毫を移易することを得ず、須らく是れ自己の家珍を運出して、方に他の全機大用を見るべし。他道ふ、「我れ法王と爲つて法に於て自在なり」と。人多く錯り會して道ふ、「趙州權に草鞋を將て猫兒と作す」と、有る者は道ふ、「他の道ひ得ば即ち斬らす」と云

①法華譬喻品の語。

はんを待つて、便ち草鞋を戴いて出で去る。自らは是れ彌猫兒を斬る、我が事に干らす」と。且得沒交涉、只だ是れ精魂を弄す。殊に知らず古人の意、天の普く蓋ふが如く、地の普く撃ぐるに似たることを。他父子相投じ、機鋒相合ふ、那箇頭を擧せば他便ち尾を會す。如今の學者、古人の轉處を識らず、空しく意路上に去つて卜度す。若し見んと要せば、但だ他の南泉趙州の轉處に去つて便ち見ば好し。頌に云く、

【頌】 公案圓にし來つて趙州に問ふ。(言猶ほ耳に在り、更に斬ることを消ひず、喪車の背後に藥袋を懸く。)長安城裡閑遊に任す。(恁麼に快活を得たり、恁麼に自在を得たり、手に信せて草鞋を拈じ來る、備をして恁麼に去らしめずんばある可らず。)草鞋頭に戴く人の會する無し。(也た一箇半箇あり、別にはれ一家風、明頭も也た合し暗頭も也た合す。)歸つて家山に到つて即便ち休す。(脚跟下好し三十棒を與ふるに、且く道へ、過什麼の處にか在る、只だ備が風無きに浪を起すが爲なり、彼此放下す、只だ恐らくは不恁麼ならんことを、恁麼ならば也太奇。)

【評唱】 公案圓にし來つて趙州に問ふ、慶藏主道く、「人の案に結するが如くに相似たり、八棒は是れ八棒、十三は是れ十三、已に斷り了れり」と。卻へて拈じ來つて趙州に問ふ、州は是れ他の屋裏の人、南泉の意旨を會す。他は是れ透徹底の人、壑著磻著、便ち轉ず、本分作家の眼腦を具す。纔かに擧著するを聞いて、剔起して便ち行く。雪竇道く、「長安城裏閑遊に任す」と、漏逗少からず。古人道く、「長安樂しと雖も、是れ久居するにあらず。」又云く、「長安甚だ鬧し、我が國晏然」と。也た須らく是れ機宜を識り休咎を別つて始めて得べし。草鞋頭に戴く人の會する無し。草鞋を戴く處、這の些子、許多の事無しと雖も、所以に道ふ、「唯だ我れ能く知り、唯だ我れ能く證す」と。方に南泉・趙州・雪竇、同得同用の處を見得せん。且く道へ、而今作麼生か會せん、歸つて家山に到つて即便ち休す。什麼の處か是れ家山、他若し會せずんば、必ず恁麼に道はじ、他既に會せば、且く道へ、家山什麼の處にか在る。便ち打つ。

第六十五則

垂示に云く、無相にして形れ、十虛に充ちて方廣たり。無心にして應ず、刹海に徧うして煩しからず。

す。舉一明三、目機鉢兩、直に得たり棒兩點の如く、喝雷奔に似たるも、也た未だ向上の人の行履に當得せざるにあり。且く道へ、作麼生か是れ向上の人の事。試みに擧す看よ。

【本則】 擧す、外道、佛に問ふ、「有言を問はず、無言を問はず。」(然も是の如しと雖も、屋裏の人もた些子の香氣有り、雙劍空に倚つて飛ぶ、頼に是れ問はず。)世尊良久す。(世尊を誘ふこと莫れ、其の聲雷の如し、坐者立者皆他を動すことを得ず。)外道讚歎して云く、「世尊大慈大悲、我が迷雲を開いて、我をして得入せしむ。」(伶俐の漢一撥すれば便ち轉ず、盤裏の明珠。)外道去つて後、阿難、佛に問ふ、「外道何の所證あつてか得入と言ふ。」(妨げず人をして疑著せしむることを、也た大家知ることを要す、銅鑊生鐵を着く。)佛云く、「世の良馬の鞭影を見て行くが如し。」(且く道へ什麼を喚んでか鞭影と作す、打つこと一拂子、棒頭に眼有り、明かなること日の如し、眞金を識らんと要せば火裏に看よ、口を拾得して飯を喫せよ。)

【本則】 東嶺禪師云く、六十五則、便ち四大是れ萬病の倉、一大増損百一の病生ず、若し有と道はゞ則ち因果に落ち、無と道はゞ則ち惡見に墮す、此の二途を離れて如何が身を保せん、若し此の受持を明めず、念念の間、四威儀の中、地に是れ凡夫の行にして、賢聖の事を失ふ、是の故に外道佛前に請益して、佛に向つて決し了れり、衲僧平生、知らざる可らざるの大事を明すのみ。已下言句無からんに至る、雲門の語。

【評唱】 此の事若し言句上に在らば、三乘十二分教、豈に是れ言句無からんや。或は無言使ち是と道はば、又何ぞ祖師西來を消して什麼をか作ん。只だ從上來許多の公案の如きんば、畢竟如何が其

の下落を見ん。這の一則の公案、話會する者少からず、有る底は喚んで良久と作し、有る底は喚んで據坐と作し、有る底は喚んで默然不對と作す。且喜すらくは沒交涉、幾ぞ曾て摸索得著し來らん。此の事其れ實に言句上に在らず、亦言句の中を離れず、若し稍擬議有らば、則ち千里萬里にし去らん。

看よ他の外道省悟の後、方に知んぬ亦此に在らず、亦彼に在らず、亦是に在らず、亦不是に在らず。且く道へ、是れ箇の什麼ぞ。天衣懷和尚頌して云く、「維摩默せず良久せず、據坐商量過咎を成す、吹毛匣裏冷光寒じ、外道天魔皆手を拱す。」百丈の常和尚、法眼に參す、眼此の話を看せしむ。法眼一日問ふ、「爾什麼の因縁をか看る。常云く、「外道問佛の話。」眼云く、「爾試みに舉せよ看ん。」常口を開かんと擬す、眼云く、「住みね住みね、爾良久の處に向つて會せんと擬するや。」常言下に於て忽然として大悟す。

後に衆に示して云く、「百丈三訣有り、喫茶、珍重、歇、擬議して更に思量せば、知んぬ君が猶ほ未だ徹せざることを。」翠巖の眞點胸拈じて云く、「六合九有、青黃赤白、一一交雜す」と。外道四維隨典論を會して、自ら云く、「我れは是れ一切智人」と。在處に人の論議を索む、他問端を致して、釋迦老子の舌頭を坐斷せんと要す。世尊鐵毫の氣力を費さず、他便ち省し去る。讚歎して云く、「世尊大慈大悲、我が迷雲を開いて、我れをして得入せしむ。」

「六合九有、青黃赤白、一一交雜す」と。外道四維隨典論を會して、自ら云く、「我れは是れ一切智人」と。在處に人の論議を索む、他問端を致して、釋迦老子の舌頭を坐斷せんと要す。世尊鐵毫の氣力を費さず、他便ち省し去る。讚歎して云く、「世尊大慈大悲、我が迷雲を開いて、我れをして得入せしむ。」

「六合九有、青黃赤白、一一交雜す」と。外道四維隨典論を會して、自ら云く、「我れは是れ一切智人」と。在處に人の論議を索む、他問端を致して、釋迦老子の舌頭を坐斷せんと要す。世尊鐵毫の氣力を費さず、他便ち省し去る。讚歎して云く、「世尊大慈大悲、我が迷雲を開いて、我れをして得入せしむ。」

①天衣懷、青原下十世雪竇頌の法嗣、會元十六に傳あり。
②百丈常は、青原下九世泚眼登の法嗣、傳燈二十五、會元第十に傳あり。
③翠巖眞點胸は、南嶽下十一世慈明圓の法嗣、會元十二に傳あり。
④名義集第五に云く、「章陀亦吠陀と名づく、此に智論と云ふ、此れを知れば智を長す、即ち邪智の論なり、章陀に四あり云云。」

む」と。且く道へ、作麼生か是れ大慈大悲の處。世尊隻眼三世に通じ、外道の雙眸五天を貫く。瀛山の眞如拈じて云く、「外道懷に至實を藏す、世尊親ら爲に高く提ぐ、森羅顯現し萬象歷然たり。且く畢竟して外道箇の什麼をか悟る、狗を遶ふて牆に逼らしむるが如し。極則無路の處に至つて、他須らく回り來つて便乃ち活潑潑地なるべし。若し計較是非、一時に放下して、情盡き見除かば、自然に徹底分明ならん。外道去つて後、阿難、佛に問うて云く、「外道何の所證有つてか、而も得入と言ふ。」佛云く、「世の良馬の鞭影を見て行くが如し」と。後來諸方便ち道ふ、「又風に別調の中に吹かる」と。又云く、「龍頭蛇尾」と。什麼の處か是れ世尊の鞭影、什麼の處か是れ鞭影を見る處。雪竇云く、「邪正分たす、過鞭影に由る。」眞如云く、「阿難金鐘再び撃つ、四衆共に聞く、然も是の如くなりと雖も、大いに二龍の珠を争ふに似たり、他の智者の威勢を長す」と。雪竇の頌に云く、

【頌】機輪曾て未だ轉せず。(這裏に在り、果然として一絲毫を動かさず)轉すれば必ず兩頭に走る。(有に落ちざれば必ず無に落つ、東にあらざれば則ち西す、左眼半斤右眼八兩)明鏡忽ち臺に臨む。(還つて釋迦老子を見るや、一撥すれば便ち

①統要第一に、道普眞、外道問佛の話を拈じて云く、以下二句。
②統要第一に載す、至實を寶鏡と作る。
③方語に去る處無し。
④那瑪の覺、當則を拈じて云く、「依稀として曲に似て機に聽くに堪へたり。」又「風に別調の中に吹がる。」此の句、元、高駢が風琴に題して意を寄するの詩の結末なり。
⑤洞庭錄及び統要第一に出づ。
⑥幻住曰く、「楞嚴第四を按ずるに、鐘を撃つ者、羅刹羅にして阿難に非ざるなり、然れども意を得て言を忘るときは、則ち何ぞ穿鑿を容れんや。」

轉す、破也破也、敗也敗也。當下に妍醜を分つ。(盡大地是れ箇の解脱門、好し三十棒を與ふるに、還つて釋迦老子を見るや。)妍醜分る迷雲開く。(一線道を放つ、偏に許す箇の轉身の處有ること。を。爭奈せん只だ是れ箇の外道なることを。)慈門何の處にか塵埃を生せん。(徧界曾て藏さず、退後退後、達磨來也)因つて思ふ良馬の鞭影を窺ふことを。(我に拄杖子有り、偏が我に與ふることを消ひす、且く道へ、什麼の處か是れ鞭影の處、什麼の處か是れ良馬の處。)千里の追風喚び得て回す。(佛殿に騎つて三門を出で去る、身を轉せば即ち錯る、放過せば即ち不可なり、便ち打つ。)喚び得て回らば指を鳴すこと三下す。(前、村に構らす、後、店に迭らす、拄杖子を拗折して什麼の處に向つてか去る、雪竇雷聲甚大にして雨點全く無し。)

【評唱】「機輪曾て未だ轉せず、轉すれば必ず兩頭に走る」と。機は乃ち千聖の靈機、輪は是れ從本已來諸人の命脈なり。見すや古人道く、「千聖の靈機親み易からず、龍、龍子を生ず。因循すること莫れ、趙州奪ひ得たり連城の壁、秦王相如總て身を喪ふ。」外道卻つて是れ把得住し作得主して、未だ嘗て動著せず。何が故ぞ、他道ふ、有言を問はず、無言を問はず」と、豈に是れ全機の處ならずや。世尊風を見て帆を使ひ、病に應じて藥を與ふことを會す、所以に良久全機提起す。外道全體會し去つて、機輪便ち阿鞞鞞地に轉す。亦轉じて有に向はず、亦轉じて無に向は

① 已下身を喪ふに至る、此れ靈寶庭前柏樹子の話を頌す、祖英集及び頌古聯珠集十九に見ゆ。
② 因循とは、古きに任せて改めざるを云ふ。

す、得失に落ちず、凡聖に拘らず、二邊一時に坐斷す。世尊纔かに良久、他便ち禮拜す。如今の人多く無に落在す、然らずんば有に落在す、只管有無の處に在つて兩頭に走る。雪竇道く、「明鏡忽ち臺に臨む、當下に妍醜を分つ。這箇曾て動著せず、只だ箇の良久を消して、明鏡の臺に臨むが如くに相似たり、萬象其の形質を逃るること能はず。」外道云く、「世尊大慈大悲、我が迷雲を開いて、我をして得入せしむ」と。且く道へ、是れ什麼の處か是れ外道の入處、這裏に到つて、須らく是れ箇箇自ら參じ自ら究め、自ら悟り自ら會して始めて得べし。便ち一切處に於て、行住坐臥、高低を問はず、一時に現成して、更に一絲毫を移易せず。纔かに計較を作し、絲毫の道理有らば、即ち人を礙塞殺して更に入作の分無からん。後面に世尊大慈大悲、我が迷雲を開いて、我をして得入せしむるを頌す。當下に忽然として妍醜を分つ、「妍醜分れ迷雲開く、慈門何の處にか塵埃を生せん」と。盡大地是れ世尊大慈大悲の門戸、偏若し透得せば、一捏を消せず、此れ亦是れ放開底の門戸。見すや世尊三七日の内に於て、是の如きの事を思惟す、我寧ろ說法せずして、疾かに涅槃に入らんと。因つて思ふ良馬の鞭影を窺ふことを。千里の追風喚び得て回す、追風の馬、鞭影を見て便ち千里を過ぐ、回らしむれば即ち回る。雪竇の意、他を賞して道ふ、「若し俊流を得ば、方に一撥すれば便ち轉じ、一喚すれば便ち回る可し。若し喚び得て回らば、便ち指を鳴すこと三下せん」と。且く道へ、是れ點破か、是れ沙を撒するか。

第六十六則

垂示に云く、當機觀面、陷虎の機を提げ、正按傍提、擒賊の略を布く。明合暗合、雙放雙收、死蛇を弄することを解するは、他の作者に還す。

【本則】 舉す、巖頭、僧に問ふ、「什麼の處より來る。」(未だ口を開かざる時敗缺を納れ了れり、鬪體を穿過す、來處を知らんと要するも也た難からず)僧云く、「西京より來る。」(果然として一箇の小賊)頭云く、「黃巢過ぎて後、還つて劍を收得すや。」(平生曾て草賊と做らず、頭の落ちんことを懼れず、便ち恁麼に問ふ、好大膽)僧云く、「收得す。」(敗也、未だ轉身の處を識らず、茅廣の漢麻の如く粟に似たり)巖頭頭を引べて近前して云く、「因。」(也た須らく機宜を識りて始めて得べし、陷虎の機、是れ什麼の心行ぞ)僧云く、「師の頭落ちぬ。」(只だ錐頭の利を見て鑿頭の方を見ず、甚の好惡をか識らん、着也)巖頭呵阿大笑す。(盡天下の衲僧奈何ともせじ、天下の人を欺殺す。這の老漢の頭の落處を尋ぬるに得ず)僧後に雪峯に到る。(依前として顛預憶憶、這の僧往往十分に敗缺を納れ去る)峰問ふ、「什麼の處より來る。」(來處を説かすんばある可らず、也た勘過せんことを要す)僧云く、「巖頭より來る。」(果

【本則】 東嶺禪師云く、六十六則、便ち宗門向上の一事は、尤も知音を貴ぶことを明す、此の黃巢の一則、若し知音底の雙峰に非ざれば、巖頭に和して一場の敗鬪なり。

然として敗缺を納る)峯云く、「何の言句かありし。」(舉し得て免れず棒を喫することを)僧前話を舉す。(便ち好し趕ひ出すに)雪峰打つこと三十棒して趕ひ出す。(然も釘を斬り鐵を截ると雖も甚に因つてか只だ打つこと三十棒、拄杖子也た未だ折るゝに到らざること有り、且つ未だ是れ本分にあらず、何が故ぞ、朝打三千暮打八百、若し是れ同參にあらずんば争か端的を辨せん、然も是の如しと雖も、且く道へ、雪峯巖頭什麼の處にか落在す)

【評唱】 大凡そ囊を挑げ鉢を負ふて、撥草瞻風せんには、也た須らく是れ行脚の眼を具して始めて得べし。這の僧眼流星に似たるも、也た巖頭に勘破し了られて、一串に穿卻せらる。當時若し是れ箇の漢ならば、或は殺或は活、舉著せば便ち用ひん。這の僧 研郎當にして、卻つて道ふ收得すと。恁麼の行脚に似ば、閻羅老子、偏に問うて飯錢を索むること有らん。知んぬ他多少の草鞋を踏破して、直に雪峯に到る、當時若し些子の眼筋有つて、便ち瞥地にし去ることを解せば、豈に快ならざらんや。這箇の因縁、節角誦詆の處有り、此の事然も得失無しと雖も、得失甚だ大なり。然も揀擇無しと雖も、這裏に到つて、卻つて眼を具して揀擇せんことを要す。看よ他の龍牙行脚の時、箇の問端を致して徳山に問ふ、「學人鑊の劍に仗つて、師の頭を取らんと擬する時如何。」徳山頭を引いて近前して云く、「因。」龍牙云く、「師の頭落ちぬ。」山便ち方丈に歸る。牙後に洞山に

① 研一に逆を作る、音相通ず、曉逆と連れ用ひて、心中不平の時發する聲なり、「さて」と云ふて、といきをつくに同じ、研郎當は「つてもよぼけたり」と譯す。

舉似す、洞山云く、「徳山當時什麼とか道ひし。」牙云く、「他無語。」洞山云く、「佗無語なることは則ち且置く、我に徳山落つる底の頭を借し來れ看ん。」牙言句下に於て大悟す。遂に香を焚いて遙かに徳山を望んで禮拜懺悔す。僧有り傳へて徳山の處に到る。徳山云く、「洞山老漢、好惡を識らず、この漢死し來ること多少時ぞ、救ひ得るも什麼の用處か有らん、這箇の公案、龍牙底と一般なり。」徳山方丈に歸る、則ち暗中最も妙なり、巖頭大笑す、他の笑中に毒有り、若し人有つて辨得せば天下に横行せん。這の僧當時若し辨得出せば、千古の下檢責を免れ得ん。巖頭門下に於て、已に是れ一場の蹉過。看よ他の雪峯老人、是れ同參にして便ち落處を知る、也た他の與に説破せず、只だ打つこと三十棒して院を起ひ出す、以て光前絶後なるべし。這箇は是れ作家の衲僧の鼻孔を拈じて、人の爲にする底の手段なり、更に他の與に之を如若何ともせず、他をして自ら悟り去らしむ。自分の宗師人の爲にするに、有る時は籠罩、伊をして出頭せしめず、有る時は放つて、死郎當地ならしむ、卻つて須らく出身の處有るべし。大小大の巖頭雪峰、箇の喫飯の禪和に勘破せらるゝに到つて、只だ巖頭、黄巢過ぎて後、還つて劍を收得す麼と道ふが如きんば、諸人且く道へ、這裏合に什麼の語を下

①通鑿に、僖宗乾符二年、黄巢亦來千餘人を聚めて、王仙芝に應ず、巢少うして仙芝と皆私鑿を販を以て事と爲す、巢騎射を善くし、任侠を喜み、粗に書傳に渉る云云。廣明元年巢皇帝の位に即く、國を大齊と號す云云。又云く、物有り天より落つ、之を見れば乃ち劍なり、銘に曰く、天黄巢に賜ふと。又傳燈を按ずるに、巖頭光啓丁未を以て寂するときは、黄巢の乾符二年に起つて、中和四年に至りて滅すると、則ち相距ること五年なり、此の公案當に其の四年の間に在るべし。

し得てか、他の笑を免れ得ん。又雪峰の棒を行じて起ひ出すことを免れ得ん。這裏誦説、若し曾て親しく證し、親しく悟らすんば、縦使ひ口頭快利にして究竟に至るとも、生死を透脱することを得ず。山僧尋常人をして這の機關の轉處を觀せしむ、若し擬議すれば則ち遠くして遠し。見ずや投子延平の僧に問うて云く、「黄巢過ぎて後、劍を收得す麼。」僧手を以て地を指す、投子云く、「三十年馬駒を弄す、今日卻つて驢子に撲せらる」と。看よ這の僧也た妨げず是れ箇の作家なることを。也た收得と道はず、也た收不得と道はず、西京の僧と海を隔つるが如くなること有り。眞如拈じて云く、「他の古人、一箇は頭を做し、一箇は尾を做すこと定れり」と。雪竇の頌に云く、
【頌】 黄巢過ぎて後曾て劍を收む。(孟八郎の漢什麼の用處か有らん、只だ是れ錫刀子一口。) 大笑は還つて應に作者知るべし。(一子親み得たり、能く幾箇か有る、是れ渠儂にあらすんば争か自由を得ん。) 三十山藤且く輕恕す。(同條に生じ同條に死す、朝三千暮八百、東家の死すれば西家の人哀を助く、卻つて與に救ひ得て活せしむ。) 便宜を得るは是れ便宜に落つ。(欸に據つて案に結す、悔らくは當初を愼まざりしことを。也た些子有り。)
【評唱】 黄巢過ぎて後曾て劍を收む、大笑は還つて應に作者知るべし。雪竇便ら這の僧と巖頭大笑の處とを頌す、這箇の些子、天下の人摸索不著。且く道へ、箇の什麼をか笑ふ、須らく是れ作家にして

②幻住曰く、傳燈會元を按ずるに、僧は即ち疎山の第二世證禪師なり、延平は福建の延平府。

方に知るべし。這の笑中に權有り實有り、照有り用有り、殺有り活有ることを。三十山藤且く輕恕す。這の僧後に雪峰の面前に到る、這の僧舊に依つて莽鹵なり。峯便ち令に據つて行じて、打つこと三十棒して趕ひ出すことを頌す。且く道へ、什麼と爲てか卻つて此の如くなる、備情を盡して這の話を會せんと要す麼。便宜を得るは是れ便宜に落つ。

第六十七則

【本則】 擧す、梁の武帝、傳大士を請じて、金剛經を講せしむ。(達磨の兄弟來也、魚行酒肆は即ち無くんばあらず、稍僧門下は即ち不可、這の老漢老老大大して這般の去就を作す。)大士便ち座上に於て、案を揮ふと一下して、便ち下座す。(直に得たり火星迸散することを、似たることは則ち似たり、是なることは則ち未だ是ならず、葛藤を打することを煩はさす。)武帝愕然たり。(兩回三度人に瞞せらる、也た他をして摸索不着ならしむ。)誌公問ふ、「陛下還つて會すや。」(理に黨して情に黨せず、肘膊外に向はず、也た好し三十棒を與ふるに。)帝云く、「不會。」(可惜許。)誌公云く、「大士講經し竟んぬ。」(也た須らく國を逐ひ出して始めて得べし、當時誌公に和して與に國を趕ひ出して始めて是れ作家、兩箇の漢、同坑に異土無し。)

【本則】 東嶺禪師云く、六十七則、便ち看經の眼、此の大士に依つて別に消息を通じ、衲子の基と爲すを明す。看經の眼を明すに、一句と并に五事と有り、初めの一句は、阿舍小乘誠に圓數大乘に超ゆること、百千萬倍と、先師此の句を以て諸子を誡め、汝等若し此の理に通ぜば、是れ眞の禪匠、若し此の理に通ぜずんば、吾が兒孫に非ず、第二に、五事は一は、梵網の十重四十八、二は曰く、遺教經の大事、三は曰く、楞嚴經の大事、四は曰く、涅槃經の大事、五は曰く、法華經の大事。

し、當時誌公に和して與に國を趕ひ出して始めて是れ作家、兩箇の漢、同坑に異土無し。

【評唱】 梁の高祖武帝は蕭氏、諱は衍、字は叔達、功業を立て、以て齊の禪を受くるに至る。即位の後、別に五經を註して講議す、^①黃老に奉すること甚だ篤し、而も性、至孝なり。一日出世の法を得て、以て^②劬勞に報いんことを思ふ。是に於て道を捨て佛に事へ、^③廻ち菩薩戒を婁約法師の處に受く。佛袈裟を披て、自ら放光般若經を講じ、以て父母に報す。時に誌公大士、異を顯し衆を惑すを以て、獄中に繋がる、誌公乃ち身を分つて城邑に遊化す。帝一日之を知り感悟して、極めて之を推重す。^④誌公數ば遮護を行じて、隱顯測る可らざるに逮ぶ。時に^⑤婺州に大士と云ふ者有り、雲黄山に居す、手ら二樹を栽ゑて、之を雙林と謂ふ、自ら當來の善慧大士と稱す。一日書を修して弟子に命じ、表を上つて帝に聞す、時に朝廷、其の君臣の禮無きを以て受けず。傳大士將に金陵の城中に入つて魚を賣らんとす、時に武帝誌公を請じて金剛經を講せしむることあり。誌公曰く、「貧道講すること能はず、市中に傳大士と云ふ者有り、能く此の經を講

① 吾が兒孫に非ず、第二に、五事は一は、梵網の十重四十八、二は曰く、遺教經の大事、三は曰く、楞嚴經の大事、四は曰く、涅槃經の大事、五は曰く、法華經の大事。
② 黃帝、老子なり。
③ 詩の凱風に云く、「子有り七人、母子劬勞す。」
④ 詳に佛祖統紀三十八、佛祖通載第九、普通元年に見ゆ。
⑤ 福本に云く、「志公常に帝の前に在りて、幾回か遮り難回か掩ひ、忽ち暗忽ち明、忽ち邪忽ち正。」
⑥ 編年通論に云く、「婺州義烏縣の雙林大士は、姓は傅氏、名は翕、法號は善慧なり、年十六にして劉氏の女を納る、名は妙光、普通、善成の二子を生む。」
⑦ 傳燈に云く、大士松山の頂に於て、連理樹を遮りて行道す、

す。帝詔を下して、之を召して禁中に入る。傅大士既に至る、講座の上に於て、案を揮ふこと一下、便ち下座。當時便ち與に推轉せば、一場の狼藉を見ることを免れん。卻つて誌公に「陛下還つて會す麼」と云はる。帝云く、「不會。」誌公云く、「大士講經竟んぬ」と。是れ一人頭を作せば、一人尾を作す、誌公恁麼に道ふ、還つて夢にだも傅大士を見る麼、一等に是れ精魂を弄す、這箇中に就いて奇特なり。是れ死蛇なりと雖も、弄することを解すれば也た活す。既に是れ講經、甚と爲てか卻つて大いに分つて二と爲さざる。一に尋常の座主の道ふが如きんば、金剛の體は堅固にして、物物壞すること能はず、利用なるが故に能く萬物を摧くと。此の如く講說するを、方に喚んで講經と作す。然も是の如くなりと雖も、諸人殊に知らず、傅大士、只だ向上の關椀子を拈じて、略鋒鏝を露して、人をして落處を知らしむ、直截して偈が與に壁立萬仞なることを。恰好に誌公に好惡を識らすして、卻つて大士講經竟んぬと云はる。正に是れ、好心好報を得す、美酒一盞、卻つて誌公に水を以て撻過せらるゝが如く、一盞の羹、誌公に一顆の鼠糞を將て汚し了らるゝが如し。且く道へ、既に是れ講經にあらずんば、畢竟喚んで什麼とか作さん。頌に云く、

【頌】 雙林に向つて此の身を寄せず。(只だ他の把不住なるが爲なり、囊裏豈に錐を藏す可けんや。)

卻つて梁土に於て埃塵を惹く。(若し草に入らずんば争か端的を見ん、風流ならざる處也た風流。)當時誌公老を得ずんば、(賊と作つて本を須ひす、伴を牽く底の癩兒有り。)也た是れ栖々として國を去る人ならん。(正に好し一狀に領過するに、便ち打つ。)

【評唱】 「雙林に向つて此の身を寄せず、卻つて梁土に於て埃塵を惹く」と。傅大士、沒板齒の老漢と一般に相逢ふ。達磨初め金陵に到つて武帝に見ゆ、帝問ふ、「如何なるか是れ聖諦第一義。」磨云く、「廓然無聖。」帝云く、「朕に對する者は誰ぞ。」磨云く、「不識。」帝契はず、遂に江を渡つて魏に至る。武帝舉して誌公に問ふ、公云く、「陛下還つて此の人を識るや否や。」帝云く、「不識。」誌公云く、「此は是れ觀音大士、佛心印を傳ふ。」帝悔いて遂に使を遣して去つて取らんとす。誌公云く、「道ふこと莫れ陛下、使を發し去つて取らんとす。合國の人去るとも、他亦回らじ」と。所以に雪竇道く、「當時誌公老を得ずんば、也た是れ、栖栖として國を去る人ならん」と。當時若し是れ誌公、傅大士の爲に氣を出すにあらずんば、也た須らく是れ國を起ひ出さるべし。誌公既に饒舌、武帝卻つて他に熱瞞一上せらる。雪竇大意に道く、「須ひす他梁土に來つて、講經して案を揮ふことを。」所以に道く、「何を雙林に向つて此の身を寄せ、喫粥喫飯分に隨つて時を過さずして、卻つて梁土に來つて、恁麼に指注し、案を揮ふこと一下、便ち下座す」と。便ち是れ他埃塵を惹く處なり、既に是れ殊勝を要す。則ち目に雲霄を視て、

七佛相隨つて釋迦前に引き、維摩後に接することを感じず、唯だ釋尊のみ數ば顧みて共に語る、我が補處なるが爲なり、其の山忽ち黃雲を起す、盤旋すること蓋の若し、因つて雲黃山と號す。

① 達磨を謂ふなり。むかふ齒のかけた也。
② 栖栖は韻會に、「安んぜざる貌。」論語の註に、「栖栖は癩は皇皇の如きなり。」すこゝとして。

上佛有ることを見ず、下衆生有ることを見ず。若し出世邊の事を論せば、免れず灰頭土面にして、無
を將て有と作し、有を將て無と作し、是を將て非と作し、麤を將て細と作す。魚行酒肆、橫拈倒用、
一切の人をして、此箇の事を明めしめん。若し恁麼に放行せずんば、直に彌勒下生に到るも、也た一
箇半箇も無けん。傳大士既にはれ拖泥帶水、頼にはれ知音有り。若し誌公老を得ずんば、幾乎と國を
趕ひ出したらん。且く道へ、即今什麼の處にか在る。

第六十八則

垂示に云く、天關を掀げ、地軸を翻し、虎兇を擒へ、龍蛇を辨ずることは、須らく是れ箇の活潑々
の漢にして、始めて句々相投じ、機々相應するを得べし。且く從上來什麼人か合に恁麼なるべき。請
ふ舉す看よ。

【本則】 舉す、仰山、三聖に問ふ、「汝の名は何ぞ。」(名實相奪ふ、勾
賊破家。) 聖云く、「慧寂。」(舌頭を坐斷す、旗を擡き鼓を奪ふ。) 仰山云く、
「慧寂は是れ我れ。」(各自に封疆を守る。) 聖云く、「我が名は慧然。」(鬧市
裏に奪ひ去る、彼此卻つて本分を守る。) 仰山呵呵大笑す。(謂つ可し是れ
箇の時節と、錦上に花を鋪く、天下の人落處を知らず、何が故ぞ、土廣く人稀にして相逢ふ者少し、

【本則】
東嶺禪師云く、六十八則、兩
千別に宗門向上の機に通じ、
三聖、仰山是れ此の人にして
參詳すべきことを明す。

一に巖頭の笑に似たり、又巖頭の笑に非ず、一等には是れ笑什麼と爲てか卻つて兩段と作る、具眼の
者始めて定當して看よ。

【評唱】 三聖は是れ臨濟下の尊宿なり、少より出群の作略を具して、大機有り大用有り、衆中に在つ
て、昂昂藏藏、名諸方に聞ゆ。後臨濟を辭して、徧く淮海に遊ぶ、到る處の叢林、皆高賢を以て
之を待す。向北より南方に至る、先づ雪峰に造つて便ち問ふ、「網を透る金鱗、未審し何を以て食と爲
ん。」 峯云く、「汝が網を出で來らんを待つて、即ち汝に向つて道はん。」 聖云
く、「一千五百人の善知識、話頭も也た識らす。」 峯云く、「老僧住持事繁し。」
峰寺莊に往く、路に獼猴に逢うて乃ち云く、「這の獼猴各各一面の古鏡を佩
ぶ。」 聖云く、「歷劫に名無し、何を以てか彰して古鏡と爲す。」 峯云く、「瑕生
せり。」 聖云く、「一千五百人の善知識、話頭も也た識らす。」 峯云く、「罪過、
老僧住持事繁し」と。後に仰山に至る、山極めて其の俊利なるを愛して、之を
明窓下に待す。一日官人有り、來つて仰山に參す、山問ふ、「官何の位にか居す。」 云く、「推官。」 山拂
子を堅起して云く、「還つて這箇を推得す麼。」 官人無語、衆人下語すれども、俱に仰山の意に契はず。
時に三聖病んで 延壽堂に在り、仰山侍者をして此の語を持して之を問はしむ。 聖云く、「和尚事有り
や」と。再び侍者をして「未審し什麼の事か有る」と問はしむ。 聖云く、「再犯容さす。」 仰山深く之を

①類書纂要に、昂昂は軒昂の
貌。
②淮は南京に屬す、淮安府なり、
海は海州なり。
③推官は諸使の官屬なり、推は
窮め詰るなり。
④延壽堂は病僧寮なり。

肯ふ。百丈當時禪版蒲團を以て黃檗に付し、拄杖拂子を瀉山に付す。瀉山後に仰山に付す、仰山既に大いに三聖を肯ふ。聖一日辭し去る、仰山拄杖拂子を以て三聖に付せんとす。聖云く、「某甲已に師有り。」仰山其の由を詰るに、乃ち臨濟の的の子なり、只だ仰山の三聖に問ふが如きんば、汝名は何ぞと、佗其の名を知らずんばある可らず。何が故ぞ、更に恁麼に問ふ、所以に作家人を驗して子細を知ることを得んと要す。只だ等閑に似て問うて云く、「汝名は何ぞ」と、更に道ふに計較無し。何が故ぞ、三聖慧然と云はす、卻つて慧寂と道ふ。看よ佗の具眼の漢、自然に同じからざることを。三聖恁麼、又是れ顛するにあらず、一向に旗を掲ぎ鼓を奪ふ、意仰山の語外に在つて、此の語常情に墮せず、摸索を爲し難し、這般の漢の手段、卻つて人を活す。所以に道ふ、「佗活句に參じて、死句に參せざれ」と、若し常情に順せば、則ち人を欺むことを得ざらん。看よ佗の古人道を念する此の如きことを。精神を用ひ盡して始めて能く大悟す、既に悟り了つて用ふる時、還つて未悟の時に人に同じく相似たり。分に随つて一言半句、常情に落つることを得ず。三聖佗の仰山の落處を知つて、便ち佗に向つて道ふ、我が名は慧寂と。仰山三聖を收めんと要す、三聖倒に仰山を收む。仰山只だ就身打劫を得て道く、「慧寂は是れ我れ」と、是れ放行の處なり。三聖云く、「我が名は慧然」と、亦是れ放行す。所以に雪竇後面に頌して云く、「雙收雙放若爲が宗とせん」と、只だ一句の内、一時に頌了る。仰山呵呵大笑す。也た權有り實有り、也た照有り用有り、佗の八面玲瓏たるが爲に、所以に用處大自在を

得たり。這箇の笑と巖頭の笑と同じからず、巖頭の笑は毒藥有り、這箇の笑は、千古萬古、清風凜凜地。雪竇の頌に云く、

【頌】 雙收雙放若爲が宗とせん。(知んぬ他幾人か有る、八面玲瓏、將に謂へり眞箇恁麼の事有りと。) 虎に騎る由來絶功を要す。(若し是れ頂門上に眼有り肘臂下に符有るにあらずんば争か這裏に到ることを得ん。騎ることは則ち妨げす只だ恐らくは備下り得ざらんことを。是れ恁麼の人にあらすんば争か恁麼の事を明めん。) 笑ひ罷んで知らず何の處にか去る。(盡く四百軍州恁麼の人を覓むるに也た得難し、言猶ほ耳に在り、千古萬古清風有り。) 只だ應に千古悲風を動すべし。(如今什麼の處にか在る、咄、既に是れ大いに笑ふ、什麼と爲てか卻つて悲風を動す、大地黒漫漫。)

【評唱】 雙收雙放若爲が宗とせん、放行して互に賓主と爲る。仰山云く、「汝の名は何ぞ。」聖云く、「我が名は慧寂」と、是れ雙放なり、仰山云く、「慧寂は是れ我れ。」聖云く、「我が名は慧然」と、是れ雙收なり。其の實は是れ互換の機、收むる則んば大家收め、放つ則んば大家放つ、雪竇一時に頌し盡し了れり。佗の意に道く、「若し放收せず、若し互換せずんば、備は是れ備、我は是れ我ならん。」都來只だ四箇の字、甚に因つてか卻つて裏頭に於て出沒卷舒す。古人道く、「備若し立たば我れ便ち坐す、備若し坐すれば我れ便ち立つ、若し也た同坐同立せば、二り俱に瞎漢」と、此は是れ雙收雙放、以て宗要と爲す可し。虎に騎る由來絶功を要す、此

④四箇の字は、慧寂慧然なり。

の如きの高風、最上の機要有り、騎らんと要すれば便ち騎り、下らんと要すれば便ち下る、虎頭に據ることも亦得たり、虎尾を收むることも亦得たり。三聖仰山、二り俱に此の風有り、笑ひ罷んで知らず何の處にか去る。且く道へ、佗箇の什麼をか笑ふ、直に得たり清風凜凜たることを。什麼と爲てか、末後に卻つて道ふ、只だ應に千古悲風を動すべし、也た是れ死して弔せず、一時に彌が與に注解了る。爭奈せん天下の人、啗啄すれども入らず、落處を知らざることを。縦ひ是れ山僧も、也た落處を知らず、諸人還つて知る麼。

第六十九則

垂示に云く、啗啄無き處、祖師の心印、狀鐵牛の機に似たり。荊棘林を透るの衲僧家、紅爐上一點の雪の如し。平地七穿八穴なることは則ち且く止く。寅縁に落ちざる、又作麼生。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、南泉・歸宗・麻谷、同じく去つて忠國師を禮拜せんとす。中路に至つて、(三人同行必らず我が師有り、什麼の奇特か有る、也た端的を辨せんと要す。)南泉地上に於て、一圓相を畫して云く、「道ひ得ば即ち去らん。」(風無きに浪を起す、也た人の知らんことを要す、陸沉の船を擲卻す、

○禮記檀弓に云く、「死して弔せざる者三、畏と、壓と、溺となり。」注に畏とは人非罪を以て己を攻む、説くこと能はずして之に死するを謂ふ、壓とは危險の所に止して、壓死する者を謂ふ、溺とは輪船に乗せずして溺死する者なり。

【本則一】

東嶺禪師云く、六十九則、宗門只だ知音を貴ぶ、言句、作處、外人、知る可らざるを明す。

若し驗過せずんば争か端的を辨せん。歸宗圓相の中に於て坐す。(一人鑪を打てば同道方に知る。)麻谷使ち女人拜を作す。(一人鼓を打てば三箇也た得。)泉云く、「恁麼ならば則ち去らす。」(半路身を抽んづ是れ好人、好一場の曲調、作家作家。)歸宗云く、「是れ什麼の心行ぞ。」(頼に識破することを得たり、當時好し一掌を與ふるに、孟八郎の漢。)

【評唱】當時馬祖、化を江西に盛にす、石頭の道。湖湘に行はる、忠國師の道。長安を化す、他は親しく六祖に見え來る。是の時南方に頭を擧げ角を帯ぶる者、其の堂に升り其の室に入らんことを欲せざるもの有ると無し、若し爾らざれば人の爲に耻しめらる。這の老漢三箇、去つて忠國師を禮拜せんと欲す、中路に至つて這の一場の敗缺を做す。南泉云く、「恁麼ならば則ち去らじ」と。既に是れ一一道ひ得たり、什麼と爲てか卻つて道ふ去らじと。且く道へ、古人の意作麼生。當時他の恁麼ならば則ち去らじと道はんを待つて、劈耳に便ち掌して、他什麼の伎倆を作すかを看ん。萬古綱宗を振ふ、只だ是れ這の些子機要なり。所以に慈明道く、「牽かんと要すれば、只だ索頭邊に在つて撥著す。」點著すれば便ち轉ず、水上に荷蘆子を捺すが如くに相似たり、人多く喚んで相肯はざる語と作す。殊に知らず、此の事極則の處に到つて、須らく泥を離れ水を離れ、楔を抜き釘を抽くべし。爾若し心行の會を作さば、則ち沒交涉。古人轉變し得て好し、這裏に到つて、恁麼な

① 湖は洞庭湖なり、湘は瀟湘なり。
② 長安は西京なり。
③ 此れ慈明牧童の歌の句、僧寶傳二十一に出づ。
④ 此れ圓悟の語。

らざることを得ず、須らく是れ殺有り活有るべし。看よ他の一人は圓相の中に去つて坐し、一人は女人拜を作す、也た甚だ好し。南泉云く、「恁麼ならば則ち去らじ。」歸宗云く、「是れ什麼の心行ぞ。」孟八郎の漢、又恁麼にし去るや。他恁麼に道ふ大意、南泉を驗せんことを要す。南泉尋常道ふ、「喚んで如と作すも、早く是れ變じ了れり」と。南泉歸宗麻谷、卻つて是れ一家裏の人、一擒一縱、一殺一活、妨げず奇特なることを。雪竇の頌に云く、

【頌】 由基が箭猿を射る。(當頭の一路誰か敢て向前せん、觸處妙を得たり、未だ發せざるに先づ中る) 樹を遠ると何ぞ太だ直なる。(若し承當せずんば争か敢て恁麼ならん、東西南北一家風、已に周遮すること多時) 千箇と萬箇と。(麻の如く粟に似たり、野狐精の一隊、南泉を得ることを争奈何) 是れ誰か曾て的中つ。(一箇半箇、更に一箇没し、一箇も也た用ひ得ず) 相呼び相喚んで歸去來

(一隊泥團を弄する漢、如かじ歸り去つて好からんには、卻つて此子に較れり) 曹溪路上登陟することを休めよ。(大勞生、想ひ料るに是れ曹溪門下の客にあらず、低低の處之を平ぐるに餘有り、高の處之を觀るに足らず) 復云く、「曹溪路坦平、什麼としてか登陟することを休む。」(唯だ南泉半路に身を抽んづるのみにあらず、雪竇も亦乃ち半路に身を抽んづ、好事も無きには如かず、雪竇也た這般の病痛を患ふ。)

【評唱】 「由基が箭猿を射る、樹を遠ること何ぞ太だ直なる」と。由基は乃ち是れ楚の時の人、姓は養、

名は叔、字は由基。楚の莊王、出でて獵す、一の白猿を見て、人をして之を射しむ。其の猿箭を捉へて獻る、群臣に勅して之を射しむるに、中る者有ること莫し。王、遂に群臣に問ふ、群臣奏して曰く、「由基と云ふ者射を善くす」と、遂に之を射しむ。由基、弓を彎くに方つて、猿乃ち樹を抱いて悲號す。箭の發する時に至つて、猿樹を遠つて之を避く、其の箭も亦樹を遠つて中つて殺す、此れ乃ち神箭なり。雪竇何が故ぞ、卻つて言ふ太だ直なる。若し是れ太だ直ならば則ち中らじ、既に是れ樹を遠る、何が故ぞ、卻つて云ふ太だ直なりと。雪竇其の意を借る、妨げず用ひ得て好し。此の事は春秋に出づ、有る者は道ふ、「樹を遠るは是れ圓相」と。若し眞箇此の如くならば、蓋し語の宗旨を識らず、太だ直なる處を知らず。三箇の老漢、途を殊にして歸を同じうすることを。一揆一齊に太だ直なり、若し是れ他の去處を識得せば、七縱八橫、方寸を離れず、百川異流、同じく大海に歸す。所以に南泉道く、「恁麼ならば則ち去らじ」と。若し是れ禪僧正眼に觀著せば、只だ是れ精魂を弄す。若し喚んで精魂を弄すと作さば、卻つて是れ精魂を弄せず。五祖先師道く、「他の三人は是れ 慧炬三昧、莊嚴王三昧。」然も此の如く女人拜を作すと雖も、他終に女人拜の會を作さず。圓相を畫くと雖も、他終に圓相の會を作さず、既に恁麼に會せずんば、又作麼生か會せん。雪竇道く、「千箇と萬箇と、是れ誰か曾て的中つ」と。能く幾箇有つてか百發

⑤ 孟子朱註に云く、揆は度なり、其の揆一なりとは、之を度るに其の道同じからざることを無きなり。

⑥ 法華妙音品支贊に曰く、慧炬は眞俗諸の境界を照明する故に。莊嚴王とは、能く内外の二莊嚴を具するが故に。

百中す、「相喚び相喚んで歸去來。」南泉の恁麼ならば則ち去らじと道ふことを頌す、南泉此れより去らず、故に云く、「曹溪路上登陟することを休む」と、荆棘林を滅却す。雪竇把不定にして復た云く、「曹溪路坦平、什麼と爲てか登陟することを休む。」曹溪の路塵を絶し迹を絶す、露蹠赤灑灑、平坦坦、儼然地なり。什麼と爲てか卻つて登陟を休む、各自に脚下を看よ。

第七十則

垂示に云く、快人の一言、快馬の一鞭。萬年一念、一念萬年。直截を知らんと要せば、未だ舉せざる已前。且く道へ、未だ舉せざる已前、作麼生か摸索せん。請ふ舉す看よ。

【本則】 舉す、瀉山・五峰・雲巖、同じく百丈に侍立す。(阿呵呵、終始誦訛、君は西秦に向ひ我は東魯に之く)百丈、瀉山に問ふ、「咽喉唇吻を併卻して、作麼生か道はん。」(一將は求め難し)瀉山云く、「卻つて請ふ和尚道へ。」(路を借りて經過す)丈云く、「我れ汝に向つて道ふことを辭せず、恐らくは已後我が兒孫を喪せんことを。」(免れず老婆心切なることを。面皮厚きこと三寸、和泥合水、就身打劫。)

① 説文に陟は登なり。
② 坦は安なり、平なり。
③ 儼然は韻會に、疾飛の貌。
【本則】 東嶺禪師云く、第七十則、君子兒孫を思ふの因縁、中に就いて、三義有り、初め公案を圓にするに通じ、次に未だ公案を圓にせざるに通じ、終りに公案則を失ふに通じて、向後別に一宗を起し、遠く兒孫に垂る、是れを曹洞の旨と名づくることを明す。
④ 瀉山五峰共に百丈に嗣ぐ、雲巖は藥山に嗣ぐ。

【評唱】

瀉山・五峰・雲巖、同じく百丈に侍立す、百丈、瀉山に問ふ、「咽喉唇吻を併卻して作麼生か道はん。」山云く、「卻つて請ふ和尚道へ。」丈云く、「我れ汝に向つて道ふことを辭せず、恐らくは已後我が兒孫を喪せんことを。」百丈然も此の如くなりと雖も、鍋子已に別人に奪ひ去らる。丈復た五峰に問ふ、峯云く、「和尚也た須らく併卻すべし。」丈云く、「人無き處 研額して汝を望まん。」又雲巖に問ふ、巖云く、「和尚有りや也た未だしや。」丈云く、「我が兒孫を喪せん」と。三人各是れ一家。古人道く、「平地上に死人無數、荆棘林を過ぎ得ば是れ好手」と。所以に宗師家、荆棘林を以て人を驗す。何が故ぞ、若し常情の句下に於て、人を驗するを得ずんば、衲僧家須らく是れ句裏に機を呈し、言中に的を辨すべし。若し是れ擔板漢ならば、多く句中に向つて、死卻して便ち道はん、「咽喉唇吻を併卻して更に口を下す處無し」と。若し是れ變通底の人ならば、逆水の波有らん。只だ問頭の上に向つて、一條の路有り、鋒を傷り手を犯さず。瀉山云く、「卻つて請ふ和尚道へ」と。且く道へ、他の意作麼生、箇裏に向つて擊石火の如く、閃電光に似て相似たり。他の問處を撈して便ち答ふ、自ら出身の路有つて、纖毫の氣力を費さず。所以に道ふ、「他活句に參じて死句に參せざれ」と。百丈卻つて他を采せず、只だ云ふ、「汝に向つて道ふことを辭せず、恐らくは已後我が兒孫を喪せん」と。大凡そ宗師人の爲にする、釘を抽き楔を抜く。若し是れ如今の人ならば便ち道はん、「此の答他の領話せざることを肯はず」と。殊に知らず、箇裏一路生機の處、

⑤ 雲門の語。
⑥ 采は取なり。

壁立千仞にして、賓主互換、活潑潑地なることを。雪竇他の此の語、風措宛轉自在にして、又能く封疆を把定することを。所以に頌して云く、

【頌】 卻つて請ふ和尚道へ。(函蓋乾坤、已に是れ鋒を傷り手を犯す。)虎頭に角を生じて荒草を出づ。(可煞だ群を驚す、妨げず奇特なることを。)十洲春盡きて花凋殘。(觸處清涼、讚歎するに及ばず。)珊瑚樹林日杲杲(千重百匝、爭奈せん百草頭)上に他を尋ぬるに得ざることを。答處蓋天蓋地。

【評唱】 此の三人の答處、各各同じからず、也た壁立千仞なる有り、也た照用同時なる有り、也た自救不了なる有り。卻つて請ふ和尚道へ」と。雪竇便ち此の一句の中に向つて、機を呈し了れり、更の中に就いて輕輕に拶して、人をして見易からしむ。云く、「虎頭に角を生じて荒草を出づ」と。瀉山の答處、一に猛虎頭上に角を安するに似たり、什麼の近傍の處か有らん。見すや僧、羅山に問ふ、「同生不同死の時如何。」山云く、「牛の角無きが如し。」僧云く、「同生亦同死の時如何。」山云く、「虎の角を戴くが如し。」雪竇只だ一句に頌し了れり、佗轉變の餘才有つて、更に云ふ、「十洲春盡きて花凋殘」と。海上に三山十洲有り、百年を以て一春と爲す、雪竇の語風措を帯びて宛轉盤礴す。春盡の際、百千萬株の花一時に凋殘す、獨り珊瑚樹林のみ有つて、凋落を解せず、太陽と相

①風措、風流の義と爲す、恐らくは不可ならん、下の宛轉自在と照し見れば、風指なるべし。
②幻住曰く、各自に土界を守注して他人を容れざる、之を封疆を把定すと謂ふ。

奪うて、其の光交映す、正當恁麼の時、妨げず奇特なり。雪竇此を用て佗の卻つて請ふ和尚道へと云ふことを明す。十洲は皆海外諸國の附する所なり。一には祖洲、①反魂香を出す。二には瀛洲、芝草、玉石、泉酒味の如くなるを生ず。三には玄洲、僊藥を出す、之を服すれば長生す。四には長洲、木瓜、玉英を出す。五には炎洲、火浣布を出す。六には元洲、靈泉の蜜の如くなるを出す。七には生洲、山川有つて寒暑無し。八には鳳麟洲、人鳳喙鱗角を取つて、續弦膠を煎す。九には聚窟洲、獅子銅頭鐵額の獸を出す。十には檀洲(一には洲流と作す。)琨吾石を出す、劍を作つて玉を切るに泥の如し。珊瑚は外國雜傳に云く、「大秦の西南、漲海の中、七八百里可りにして、珊瑚洲に到る、洲底に盤石あり、珊瑚其の石上に生ず。人鐵網を以て之を取る」と。又十洲記に云く、「珊瑚は南海の底に生ず、樹の如し、高さ三二尺、枝有つて皮無し、玉に似て紅潤なり、月に感じて生ず、凡そ枝頭に皆月暈有り。」(此の一則是八卷の首の公案と同じ、看よ。)

①拾遺傳に、漢の延和元年、西胡の月氏國より使を遣して、香四兩を獻す、大さ雀卵の如く、色桑椹の如し、至始元年に京城大いに疫死する者大半、帝香を取りて之を焚く、其の死して未だ三日ならざるもの皆活す、香氣三月まで歇ます云云。

②郭註山海經に云く、今の扶南の東萬里、番瀾國有り、復た五千里許に、火山國有り、其の山霖雨と雖も火常に燃ゆ、火中に白鼠あり、時に出で山邊に食を求む、人之を捕へ得て、毛を以て布を作る、之を火浣布と名く。

國譯佛果園悟禪師碧巖錄卷第七終

國譯佛果園悟禪師碧巖錄卷第八

第七十一則

【本則】 擧す、百丈復た五峰に問ふ、「咽喉唇吻を併卻して、作麼生か道はん。」(呵呵呵、箭新羅國を過ぐ)峰云く、「和尚も也た須らく併卻すべし。」(旗を捲き鼓を奪ふ、一句截流萬機寢削す。)丈云く、「人無き處斫額して汝を望まん。」(土曠く人稀にして相逢ふ者少し。)(此の一則是七卷の末の公案と同じ、看よ)。

【評唱】 瀉山は封疆を把定し、^①五峯は衆流を截斷す、這の些子、是れ箇の漢にして當面に提掇せんことを要す。馬前の相撲の如く、擬議を容れず。直下に便ち用て、緊迅危峭なり。瀉山の盤礴滔滔地なるに似す。如今の禪和子、只だ架下に向つて行いて、他の一頭地を出づること能はず。所以に道ふ、「親切を得んと欲せば、問を將ら來つて問ふこと莫れ」と、五峯の答處、當頭に坐斷す、妨げず快俊なることを。百丈云く、「人無き處斫額して汝を望まん」と。且く道へ、是れ他を肯ふか、是れ他を肯はざるか、是れ殺か是れ活か、他の阿鞞鞞地なるを見て、只だ他に一點を與ふ。雪竇の頌に云く、

【本則】 東嶺禪師云く、七十一則、便ち君子、孫を思ふの中、未だ公案を圓かにせざるを明す。
^①五峰常觀は、南嶽下三世百丈海の法嗣、傳燈第九、會元第四に只だ機語數則を載せて、生緣入滅等の跡無し。

【頌】 和尚も也た併卻すべし。(已に言前に在り了る、衆流を截斷す。)龍蛇陣上に謀略を看る。(須らく是れ金牙にして始めて七事身に隨ふことを解す、戰に慣るる作家。)人をして長に李將軍を憶はしむ。(妙手多子無し、疋馬單鎗、千里萬里、千人萬人。)萬里の天邊一鶚を飛ばす。(大衆見るや、且く道へ、什麼の處にか落在する、中れり。打して云く、飛び過ぎ去る。)

【評唱】 「和尚也た併卻すべし」と、雪竇一句の中に於て、撻一撻して云く、「龍蛇陣上に謀略を看る」と。兩陣を排して、突出突入、七縱八橫、鬪將底の手脚有り、大謀略底の人有つて、疋馬單鎗にして、龍蛇陣上に向つて、出沒自在なるが如し、備作麼生か他を圍繞し得ん。若し是れ這箇の人にあらずんば、爭か此の如きの謀略有ることを知らん。雪竇の此の三頌、皆裏頭に就いて狀出する底の語、此の如し。大いに李廣が神箭に似たり、「萬里の天邊一鶚を飛ばす」と。一箭一鶚を落すことは定れり、更に放過せず。雪竇百丈の間處一鶚の如く、五峯の答處一箭の如くに相似たることを頌す、山僧只管に五峯を讚歎して、覺えず渾身泥水に入り了れり。

第七十二則

【本則】 擧す、百丈雲巖に問ふ、「咽喉唇吻を併卻して、作麼生か道は

① 史記に、「李廣人と爲り獲臂、其の善く射ること天性なり、云云。」
 【本則】 東嶺禪師云く、七十二則、君子、孫を思ふの中、公案則を失ふ、別に一則を補ふて、遠く曹洞一宗の旨に通ずることを明す。

ん。」(蝦蟇窟裏より出で来る、什麼とか道はん。)巖云く、「和尚有りや也た未だしや。」(皮に粘じ骨に着く、拖泥滞水、前村に構らす後店に迭らす。)丈云く、「我が兒孫を喪せん。」(灼然として此の答へ得て半前落後なる有り。)

【評唱】 雲巖百丈に在つて二十年侍者と作る、後道吾と同じく藥山に至る。山問うて云く、「子百丈の會下に在つて、箇の什麼の事をか爲す。」巖云く、「生死を透脱す。」山云く、「還つて透脱するや也た未だしや。」巖云く、「渠に生死無し。」山云く、「二十年百丈に在つて、習氣も也た未だ除かず。」巖辭し去つて南泉に見ゆ、後復た藥山に歸つて方に契悟す。看よ他の古人、二十年參究するに、猶は自ら半青半黃、皮に粘じ骨に著いて、穎脱すること能はず。是は則ち也た是、只だ是れ前村に構らす、後店に迭らす。道ふことを見ずや、語窠臼を離れずんば、焉んぞ能く蓋纏を出でん、白雲谷口に横はる、幾人の源をか迷卻す」と。洞下に之を觸破と謂ふ。故に云く、「仙仗の鳳凰樓を躍開す。時の人當今の號に躡るることを嫌ふ」と。所以に道ふ、「荆棘林須らく是れ透過して始めて得べし、若し透過せずんば、終始廉纖に涉つて斬不斷ならん。適來道ふ、「前村に構らす、後店に迭らす。」雲巖只管に去つて他人底を點檢す。百丈他の此の如くなるを見て、一時に把り來つて、打殺し了れり。雪竇の頰に云く、

①雲巖は、青原下三世藥山の法嗣、傳燈十四、會元第五に傳あり。
②以下、迷却すに至る、會元十、雲峰悅禪師上堂の語なり、蓋纏は五蓋十纏を謂ふ。
③三體詩の注に、仙仗は御前の儀仗なり。以下二句古符道者、策中道の頰の後半なり。

【頌】 和尚有りや也た未だしや。(公案現成す、隨波逐浪、和泥合水。)金毛の獅子踞地せず。(灼然、什麼の用處か有らん、可惜許。)兩々三々舊路に行く。(咽喉唇吻を併卻して作麼生か道はん、身を轉じ氣を吐く、脚跟下蹉過了れり。)大雄山下空しく彈指す。(一死更に再活せず、悲む可し痛む可し、蒼天の中更に怨苦を添ふ。)

【評唱】 和尚有りや也た未だしや、雪竇歎に據つて案に結す、是は則ち是、只だ是れ金毛の獅子、爭奈せん踞地せざることを。獅子物を捉ふるに、牙を藏し爪を伏して、踞地返擲す。物大小と無く、皆以て威を全うす、其の功を全うせんことを要すればなり。雲巖云く、「和尚有りや也た未だしや」と。只だ是れ舊路の上に向つて行く。所以に雪竇云く、「百丈大雄山下に向つて空しく彈指す」と。

第七十三則

垂示に云く、夫れ說法とは、無説無示。其れ聽法とは、無聞無得。説既に無説無示、争か説かざるに如かん。聽既に無聞無得、争か聽かざるに如かん。而も無説又無聽、卻つて些子に較れり。只だ如今諸人、山僧が這裡に在つて説くことを聽く。作麼生か此の過を免れ得ん。透關の眼を具する者、試み

①雪竇祖英集に、師曼禪者を送る偈の末句に云く、「大丈夫此の如くなるに到る、行行頰に彈指することを川ひす。」賸庵の注に、「雲巖最初百丈の海に參す、左右に侍すること二十年、玄旨を悟らず、彈指して悵然として山を下る、後に藥山に謁して、方に乃ち契悟す。」

に擧す看よ。

【本則】 擧す、僧、馬大師に問ふ、「四句を離れ、百非を絶して、請ふ師某甲に西來意を直指せよ。」
 (什麼の處よりかこの話頭を得來る、那裏よりかこの消息を得たる。) 馬師云く、「我れ今日勞倦す、汝
 が爲に説くこと能はず、知識に問取し去れ。」(退身三步、蹉過することも也た知らず、身を藏し影
 を露す、妨げず是れ這の老漢、別人に推過し與ふことを。) 僧、智藏に問ふ。(也た須らく他に一撈を
 與ふべし、蹉過するも也た知らず。) 藏云く、「何ぞ和尚に問はざる。」(草
 裏より焦尾の大蟲出で來る、也た什麼と道ふぞ。直に得たり草繩自縛する
 ことを、死を去ること十分。) 僧云く、「和尚教へ來つて問はしむ。」(人の
 處分を受く、前箭は猶は軽く後箭は深し。) 藏云く、「我れ今日頭痛す、汝
 が爲に説くこと能はず、海兄に問取し去れ。」(妨げず是れ八十四員の善知識、一様に這般の病痛を
 患ふることを。) 僧、海兄に問ふ。(別人に轉與す、臆を抱いて屈と叫ぶ。) 海云く、「我れ這裡に到つて
 卻つて不會。」(切切たることを用ひず、從教あれ千古萬古黑漫漫) 僧、馬大師に擧示す。(這の僧卻
 つて些子の眼睛有り。) 馬師云く、「藏頭白海頭黑。」(寰中天子の勅、塞外は將軍の令。)

【本則】
 東嶺禪師云く、七十三則、便
 ち佛祖向上の一著、知解の徒、
 及ぶ可らざるを明す。

【評唱】 這箇の公案、山僧舊日、成都に在つて、眞覺に參す。覺云く、「只だ馬祖の第一句を看んこと
 を消せば、自然に一時に理會し得ん」と。且く道へ、這の僧是れ會し來つて問ふか、會し來らずして

問ふか、此の問妨げず深遠なることを。四句を離ると云ふは、有と無と、
 非有と非無と、非非有と非非無と。此の四句を離るれば、其の百非を絶す、
 只管道理を作さば、話頭を識らず、頭腦を討ぬとも見えず。若し是れ山僧
 ならば、馬祖の道ひ了らんを待つて、便ち與に坐具を展べて禮三拜して、
 他の作麼生かと道はんを看ん。當時馬祖ならば、若し這の僧の來つて、四
 句を離れ百非を絶して、請ふ師某甲に西來意を直指せよと問はんを見て、
 拄杖を以て劈脊に便ち棒して、趕ひ出して、他の省するか省せざるかを看ん。馬大師、只管他の與に葛
 藤を打す、以て這の漢當面に蹉過して、更に去つて智藏に問はしむ。殊に知らず馬大師、來風深く辨する
 ことを。這の僧憶憶として走り去つて智藏に問ふ。藏云く、「何ぞ和尚に問はざる。」僧云く、「和尚教へ
 來つて問はしむ。」看よ他這の些子、撈著すれば便ち轉ず、更に閑暇の處無きことを。智藏云く、「我れ
 今日頭痛す、汝が爲に説得すること能はず。」海兄に問取し去れ。這の僧又去つて海兄に問ふ、海兄
 云く、「我れ這裏に到つて却つて不會」と。且く道へ、什麼と爲てか一人は頭痛と道ひ、一人は不會と
 道ふ、畢竟作麼生。這の僧却回し來つて、馬大師に擧似す、師云く、「藏頭白海頭黑」と。若し解路を
 以て卜度せば、卻つて之を相瞞すと謂ふ。有る者は道ふ、「只だ是れ相推過す」と、有る者は道ふ、
 「三箇總に他の問頭を識る。所以に答へず」と。總に是れ拍盲地、一時に古人の醍醐上味を將て、

① 黃龍の惟騰眞覺禪師は、南嶽
 下十二世黃龍南和尚の法嗣、
 會元十七に傳あり。
 ② 海兄は百丈海なり。
 ③ 推過は、ゆづりあひしなり。
 ④ 馬祖、智藏、百丈海の三人。
 ⑤ 拍盲は、盲人の人の肩に手を
 打ち掛け行くをいふ。

毒藥を著けて裏許に在く。所以に馬祖道く、「汝が一口に西江水を吸盡せんを待つて、即ち汝に向つて道はん」と、此の公案と一般なり。若し藏頭白海頭黒を會得せば、便ち西江水の話會せん。この僧一擔の擔板を將て、箇の不安樂に換へ得たり、更に他の三人の尊宿を勞して、泥に入り水に入らしむ。畢竟この僧警地ならず、然も一に恁麼なりと雖も、この三箇の宗師、卻つて箇の擔板漢に勘破せらる。如今の人、只管に語言の上へ去つて活計を作して云ふ、「白は是れ明頭合、黒は是れ暗頭合」と、只管に鑽研計較す、殊に知らず、古人一句に意根を截斷することを。須らく是れ正脈裏に向つて、自ら見て始めて穩當なることを得べし。所以に道ふ、最後の一句始めて牢關に到る、要津を把斷して、凡聖を通せず、若し此の事を論せば、當門に一口の劍を按するが如くに相似たり、擬議せば則ち喪身失命せん。又道く、「譬へば劍を擲つて空に揮ふが如し、及と不及とを論すること莫れ」と。但だ八面玲瓏の處に向つて會取せよ。見すや古人道く、「この漆桶。或は云く、「野狐精」或は云く、「瞎漢」と。且く道へ、一棒一喝と是れ同か是れ別か、若し千差萬別、只だ是れ一般なりと知らば、自然に八面に敵を受けん。藏頭白海頭黒を會せんと要す麼。五祖先師道く、「封后先生」し。雪竇の頌に云く、

【頌】藏頭白海頭黒、(半合半開、一手擡一手搦、金聲玉振。)明眼の衲僧も會不得。(行脚三十年せよ、終に是れ人に偏が鼻孔を穿却せらる、山僧故に是れ口區擔に似たり。)馬駒踏殺す天下の人。(叢林中也た須らく是れ這の老漢にして始めて得べし、這の老漢を放出す。臨濟未だ是れ白拈賊ならず。(癩兒伴を牽く、直饒好手も也た人に捉へ了らる。)四句を離れ百非を絶す。(什麼と道ふぞ、也須らく是れ自ら點檢して看るべし、阿爺阿爹に似たることを。)天上人間唯我知る。(我を用て什麼か作ん、拄杖子を奪却せん、或は若し人無く我無く得無く失無くんば什麼を將てか知らん。)

【評唱】藏頭白海頭黒、且く道へ、意作麼生、這の些子、天下の衲僧も跳不出。看よ他の雪竇後面に合殺し得て好きことを。道く、「直饒ひ是れ明眼の衲僧も也た會不得」と。這箇些子の消息、之を神仙の秘訣、父子不傳と謂ふ。釋迦老子一代時教を説き、末後心印を單傳す、喚んで金剛王寶劍と作し、喚んで正位と作す。恁麼の葛藤、早く是れ事已むことを獲ず、古人略些子の鋒鏘を露す。若し是れ透得底の人ならば、便ち乃ち七穿八穴、大自在を得ん。若し透不得にして、從前悟入の處無くんば、轉た説かば轉た遠からん。

①此の條、傳燈第八に載す。
 ②以下不安樂に換へ得たりに至る、統要續集第四に、五祖演此の則を拈じて云く、「馬大師懸壺を著くる處無し、只だ箇の藏頭白、海頭黒と道ひ得たり、這の僧一擔の擔板を擔うて、一箇の不會に換へ得たり、若し也た眼流星に似たらば、多少の人失錢遺罪。」
 ③傳燈第七に、盤山積禪師衆に示して云く、「禪德譬へば劍を擲つて空に揮ふが如し、及と不及とを論すること莫れ、云云。」
 ④野狐精は妖精「げげもの」なり。
 ⑤方語に、善く兵法を談じ、知りて用ひざるを、封后先生と云ふ、不二抄に帝王世紀を引く。

⑥震旦より羅漢僧に至る、祖庭事苑第八に云く、「此れ馬大師法を讓和尚に得るの縁を盡す、別路無しとは、其の道一なり、故に馬大師を道一と名く、兒孫とは嗣子なり、脚下行とは、所謂一馬駒子天下の人を踏殺するなり、金雞米を銜むとは、讓和尚は金州の人なるを以てなり、難時を知りて鳴き以て未寤を覺す、羅漢僧とは、馬祖は漢州の什仿縣に生じて、讓師の法食の供を受く。」

馬駒踏殺す天下の人。西天の般若多羅、達磨を識して云く、「震日闍しと雖も別路無し、兒孫の脚下を假つて行かんことを要す、金雞一粒の粟を銜むことを解して、十方の羅漢僧に供養す。」又六祖、讓和尚に謂つて曰く、「向後佛法、汝が邊より去らん、已後一馬駒を出して、天下の人を踏殺せん」と。厥の後江西の法嗣、天下に布く、時に馬祖と號す、達磨六祖、皆先づ馬祖を識す。看よ他の作略、果然として別なることを。只だ道ふ藏頭白海頭黑と。便ち天下の人を踏殺する處を見る。只だ這の一句黑白の語、千人萬人咬不破、臨濟未だ是れ白拈賊ならず。臨濟一日衆に示して云く、「赤肉團上に一無位の真人有り、常に汝等諸人の面門に向つて出入す、未だ證據せざる者は看よ看よ。」時に僧有り、出でて問ふ、「如何なるか是れ無位の真人。」臨濟禪牀を下つて、拈住して云く、「道へ道へ。」僧無語、濟托開して云く、「無位の真人、是れ什麼の乾屎橛ぞ。」雪峯後に聞いて云く、「臨濟大いに白拈賊に似たり。」雪竇他の臨濟と相見せんことを要す。馬祖の機鋒を觀るに、尤も臨濟に過ぎたり、此れ正に是れ白拈賊、臨濟は未だ是れ白拈賊にあらず、雪竇一時に穿卻し了れり。卻つて這の僧を頌して道ふ、「四句を離れ百非を絶す、天上人間唯だ我れ知る。」且く鬼窟裏に向つて活計を作すこと莫れ。古人云く、「問は答處に在り、答は問處に在り」と。早く是れ奇特なり、懶作麼生か四句を離れ得ん、百非を絶し得ん。雪竇道く、「此の事唯だ我能く知る。」直饒ひ三世の諸佛も、也た覩不見、既に是れ獨り自ら箇れ知る。諸人更に上來箇の什麼をか求めん。「大溈の

以下乾屎橛に至る、臨濟錄に見ゆ。

真如、拈じて云く、「這の僧恁麼に問ひ、馬祖恁麼に答ふ。四句を離れ百非を絶す、智藏海兒都て知らず、會せんと要す麼。道ふことを見ずや、馬駒天下の人を踏殺す。」

第七十四則

垂示に云く、鏡鐲横に按じて、鋒前に葛藤窠を剪斷す。明鏡高く懸けて、句中に毘盧印を引出す。田地穩密の處、著衣喫飯、神通遊戲の處、如何が溲泊せん。還つて委悉すや。下文を看取せよ。

【本則】 擧す、金牛和尚、齋時に至る毎に、自ら飯桶を將て、僧堂前に於て舞を作して、呵々大笑して云く、「菩薩子喫飯來。」(竿頭の絲線君が弄するに従す、清波を犯さず意自ら殊なり、醍醐毒藥一時に行す、是なることは則ち是なり、七珍八寶一時に羅列す、爭奈せん相逢ふ者少なることを。)雪竇云く、「然も此の如くなりと雖も、金牛是れ好心にあらず。」(是れ賊賊を識り是れ精精を識る、來つて是非を説く者は便ち是れ是非の人。)僧、長慶に問ふ、「古人道ふ、菩薩子喫飯來と、意旨如何。」(妨げず疑着することを、元來落處を知らず、長慶什麼とか道ふ。)慶云く、「大いに齋に因つて慶讚するに似たり。」(席を相て令を打す、款に據つて案に結す。)

【本則】 東嶺禪師云く、七十四則、四句百非の上、祖師向上の一著子有り、一箇の金牛脫體現成して、受用親切なることを明す。

【評唱】 金牛は乃ち馬祖下の尊宿、齋時に至る毎に、自ら飯桶を將て、僧堂前に於て舞を作して、呵呵大笑して云く、「菩薩子喫飯來」と、此の如き者二十年、且く道へ、他の意什麼の處にか在る。若し只だ喚んで喫飯と作さば、尋常魚を敲き鼓を撃つて、亦自ら告報せん。又何ぞ須ひん更に自ら飯桶を將ち來つて、許多の伎倆を作すことを。是れ他顛すること莫し麼、是れ提唱建立すること莫し麼。若し是れ此の事を提唱せば、何ぞ寶華王座上去つて、床を敲き拂を堅てざる、此の如きことを須要して什麼をか作ん。今の人殊に知らず、古人の意言外に在ることを。何ぞ且く祖師當時初來底の題目什麼とか道ひしと、分明に説いて道ふ、「教外別傳、單傳心印」と。古人の方便、也た只だ懶を直截に承當し去らしむ。後來の人妄に自ら卜度して便ち道ふ、「那裏にか許多の事有らん」と。寒すれば則ち火に向ひ、熱すれば則ち涼に乗じ、飢うれば則ち喫飯し、困すれば則ち打眠す。若し怎麼に常情を以て、義解詮註せば、達磨の正宗、土を掃つて盡さん。知らず古人二六時中に向つて、念念捨てず、此の事を明めんと要することを。雪竇云く、「然も此の如くなりと雖も、金牛是れ好心にあらず」と。只だ這の一句、多少の人錯つて會す、所謂醍醐の上味、世の爲に珍とせらる。斯等の人に遇はば、翻つて毒藥と成る。金牛既に是れ落草して人の爲にす、雪竇什麼と爲てか道ふ、「是れ好心にあらず」と。什麼に因つてか卻つて怎麼に道ふ、衲僧家

① 金牛は南嶽下二世馬祖の法嗣、傳燈第八、會元第三に傳あり。
② 魚は木魚なり、鼓は庫前の大鼓なり。
③ 承當は「ひきうけ、吾が物にする」と譯す。

須らく是れ生機有つて始めて得べし。今の人古人の田地に到らずして、只管に道ふ、「什麼の心をか見ん、什麼の佛か有らん」と。若し這の見解を作さば、金牛老作家を壞卻し了らん、須らく是れ子細に看て始めて得べし。若し只だ今日明日、口快些子ならば、了期有ること無けん。後來長慶上堂、僧問ふ、「古人道く、菩薩子喫飯來と、意旨如何。」慶云く、「大いに齋に因つて慶讚するに似たり。」尊宿家忒慈悲、漏逗少からず、是なることは則ち是なり、齋に因つて慶讚すと。懶且く道へ、箇の什麼をか慶讚す。看よ他の雪竇の頌に云く、

④ 口頭快便なるなり、些子は意義なし、軽く見るべし。

【頌】 白雲影裡笑呵呵、笑中に刀有り、熱發して什麼か作ん、天下の衲僧落處を知らず。兩手に持し來つて他に付與す。(豈に怎麼の事有らんや、金牛を誘ふこと莫くんば好し、喚んで飯桶と作し得てんや、若し是れ自分の衲僧ならば這般の茶飯を喫せず。)若し是れ金毛の獅子子ならば、(須らく是れ他格外にして始めて得べし、他の具眼を許す、只だ恐らくは正しからざらんことを。)三千里外に誦詠を見ん。(半文錢に直らず、一場の漏逗、誦詠什麼の處にか在る、瞎漢。)

【評唱】 「白雲影裏笑呵呵」と。長慶道く、「齋に因つて慶讚す」と。雪竇道く、「兩手に持し來つて他に付與す。」且く道へ、只だ是れ他に與へて喫飯せしむるか、爲當別に奇特有るか、若し箇裏に向つて端的を知得せば、便ち是れ箇の金毛の獅子子ならん。若し是れ金毛の獅子子ならば、更に金牛の飯桶を將ち來つて、舞を作して大笑することを必とせず、直に三千里外に向つて、便ち他の敗缺の處を知らん。

古人道く、「鑿機先に在つて、一捏を消せず。」所以に衲僧家、尋常須らく是れ格外に向つて用ひて始めて本分の宗師と稱することを得べし。若し只だ語言に據らば、未だ漏逗を免れず。

第七十五則

垂示に云く、靈鋒寶劍、常露現前。亦能く人を殺し、亦能く人を活す。彼に在り此に在り、同得同失。若し提持を要せば、提持するに一任す。若し平展を要せば、平展するに一任す。且く道へ、賓主に落ちず。回互に拘らざる時如何。試みに擧す看よ。

【本則】 擧す、僧、定州和尚の會裡より來つて烏白に到る。烏白問ふ、「定州の法道、這裏と如何。」(言中に響有り、淺深を辨せんことを要す、探竿影草、太慈だ人を瞞す。)僧云く、「別ならず。」(死漢の中に活底有り、一箇半箇、鐵槩子一般實地に踏著す。)白云く、「若し別ならずんば、更に彼の中に轉じ去れ」と。便ち打つ。(灼然 正令當行)僧云く、「棒頭に眼あらば、草々に人を打つことを得ざれ。」(也た是れ這の作家にして始めて得ん、卻つて是れ獅子兒)白云く、「今日一箇を打著す」といつて、又打つ。二三下す。(什麼の一箇とか説かん、千箇萬箇)僧便ち出で去る。(元來

【本則】 東嶺禪師云く、七十五則、此の則祖師門下に於て、學者に棒を許すの語と爲す、是の義無きに非ず、此の僧二人共に作家爲り、古より評して、此の僧必ず林才下紙衣道者克符禪師なりと曰ふ、設ひ克符に非ざるも、知見作用彼れに齊しき底の作家のみ、初を能くし終を善くし、商量一則を全うする者、之れを離れて他無し。

是れ屋裏の人、只だ屈を受くることを得たり、只だ是れ機を見て作す。)白云く、「屈棒元來人の喫する在るあり。」(啞子苦瓜を喫す、放去又收來、點得して回りに來らしむるとも何の用を作すにか堪へん。)僧身を轉じて云く、「爭奈せん杓柄、和尚の手裏に在ることを。」(依前として三百六十日、卻つて是れ箇の伶俐の衲僧。)白云く、「汝若し要せば、山僧汝に回與せん。」(知んぬ阿誰か是れ君阿誰か是れ臣、敢て虎口に向つて身を横ふ、忒煞だ好悪を識らず。)僧近前して白の手中の棒を奪つて、白を打つこと三下す。(也た是れ一箇作家の禪客にして始めて得ん、賓主互換、縱奪時に臨む。)白云く、「屈棒屈棒。」(點、這の老漢什麼の死急をか着たる。)僧云く、「人の喫するある在り。」(呵呵、是れ幾箇の杓柄か卻つて這の僧の手裏に在る。)白云く、「草々に箇の漢を打著す。」(兩邊に落ちずんば、知んぬ他は是れ阿誰ぞ)僧便ち禮拜す。(危きに臨んで變せず、方には是れ丈夫兒)白云く、「和尚卻つて恁麼に去るや。」(點)僧大笑して出づ。(作家の禪客天然に有る在り、猛虎須らく清風の隨ふことを得べし、方に知んぬ始を盡し終を盡すことを、天下の人摸索不着)白云く、「消得恁麼、消得恁麼。」(惜む可し放過することを、何ぞ劈脊に便ち棒せざる、將に謂へり走りて什麼の處にか到り去る。)

【評唱】 僧、定州和尚の會裏より來つて 烏白に到る。白亦是れ作家、諸人若し這裏に向つて、此の二人の一出一入を識得せば、千箇萬箇只だ是

傳燈の四に、定州の石藏禪師、普寂禪師に嗣ぐ。
會元の三に、烏白和尚は馬祖に嗣ぐ。

れ一箇、主と作ることも也た恁麼、賓と作ることも也た恁麼、二人畢竟合して一家と成る。一期の勘辨、賓主問答、始終作家、看よ烏白這の僧に問うて云く、「定州の法道、這裏と何似。」僧便ち云く、「別ならず。」當時若し是れ烏白にあらずんば、這の僧を奈何ともし難し。白云く、「若し別ならずんば、更に彼の中に轉じ去れ」と云つて便ち打つ。爭奈せん這の僧是れ作家の漢なることを。便ち云く、「棒頭に眼有らば、草草に人を打つことを得され。」白一向に令を行じて云く、「今日一箇を打著す。」又打つこと三下、其の僧便ち出で去る。看よ他の兩箇轉轉地、俱に是れ作家にして這の一事を了すること。須らく細素を分ち休咎を別たんことを要すべし。這の僧出で去ると雖も、這の公案卻つて未だ了せざること有り、烏白始終他の實處を驗し、他を如何と看んことを要す。這の僧卻つて門を撐へ戸を挂ふるに似たり、所以に未だ他を見得せず。烏白卻つて云く、「屈棒元來人の喫する有る在り。」這の僧身を轉じ氣を吐かんことを要して、卻つて他と争はず、輕輕に轉じて云く、「爭奈せん杓柄和尚の手裏に在ることを。」烏白是れ頂門に眼を具する底の宗師、敢て猛虎口裏に向つて身を横へて云く、「汝若し要せば、山僧汝に回與せん」と。這の漢是れ箇の肘下に符有る底の漢、所謂

論語爲政篇の語。

義を見て爲ざるは勇無きなり、更に擬議せず、近前して烏白手中の棒を奪うて、白を打つこと三下。白云く、「屈棒屈棒。」爾且く道へ、意作麼生。頭上に道ふ、「屈棒元來人の喫する有る在り。」這の僧他を打つに到るに及んで、卻つて道ふ、「屈棒屈棒」と、僧云く、「人の喫する有る在り。」白云く、「草草に箇の漢を打著す。」頭上に道ふ、「草草に一箇を打著す」と、末後自ら棒を喫するに到つて、什麼と爲てか亦道ふ、「草草に箇の漢を打著す」と。當時若し是れ這の僧卓朔地なるにあらずんば、也た他を奈何ともせず。這の僧便ち禮拜す。這箇の禮拜最も毒なり、是れ好心にあらず、若し是れ烏白にあらずんば、也た他を識ること不破ならん。烏白云く、「卻つて恁麼にし去れり。」其の僧大笑して出づ。烏白云く、「消得恁麼、消得恁麼」と。看よ他の作家の相見、始終賓主分明にして、斷えて能く續ぐことを。其の實は只だ是れ互換の機なり、他這裏に到つて、亦箇の互換の處有りと道はず、自らは是れ他の古人情塵意想を絶す。彼此作家、亦得有り失有りと道はず。是れ一期の間の語言なりと雖も、兩箇活潑潑地にして、都て血脈針線有り、若し能く此に於て見得せば、亦乃ち十二時中に向つて、歴歴分明ならん。其の僧便ち出づ、是れ雙放、已下は是れ雙收、之を互換と謂ふなり。雪竇正恁麼地に頌出す。

消得恁麼は「しかた、もつともじや、なるほど、さうじや」と譯す。

【頌】 呼ぶことは即ち易く、天下の人總に疑着す、臭肉蠅を引き來る、天下の衲僧總に落處を知らず。遣ることは即ち難し。(妨げず勦絶することを、海上の明公秀。)互換の機鋒子細に看よ。(一出一入、二り俱に作家、一條の拄杖兩人扶る、且く道へ阿誰が邊にか在る。)劫石固うし來るも猶ほ壞すべし。(袖裏の金錠如何が辨取せん、千聖不傳。)滄溟深き處も立ちどころに須らく乾かすべし。(什

麼の處にか向つて安排せん、棒頭に眼有り、獨り許す他親しく得ることを。烏白老烏白老。(可惜許、
這の老漢好惡を識らす)幾く般ぞ。(也た是れ箇の端無き漢、百千萬重)他に杓柄を與ふ太だ端な
し。(已に言前に在り、洎と蔡州を打破すべし、好し三十棒を與ふるに、且く道へ過什麼の處にか在
る。)

【評唱】「呼ぶことは即ち易く、遣ふことは即ち難し。」二等に是れ落草、雪竇忒然だ慈悲、尋常道ふ、
「蛇を呼ぶことは易く、蛇を遣ふことは難し。」如今箇の瓢子を將て吹き來つて、蛇を呼ぶことは即ち易
く、遣らんと要する時は即ち難し。一に棒を將て他に與ふことは即ち易く、復た他の棒を奪つて
遣り去ることは即ち難きに似たり。須らく是れ本分の手脚有つて、方に能く他に遣り得去るべし。
烏白は是れ作家、蛇を呼ぶ底の手脚有り、亦蛇を遣る底の手脚有り、這の僧也た是れ瞌睡底にあらず。
烏白問ふ、「定州の法道、這裏と何似」と。便ち是れ他を呼ぶ、烏白便ち打つ、是れ他を遣る。僧云く、
「棒頭に眼有らば、草草に人を打つことを得ざれ」と。卻つて這の僧の處に轉在して便ち是れ呼び來
る。烏白云く、「汝若し要せば、山僧汝に回與せん。」僧便ち近前して棒を奪うて、也た打つこと三下す。
卻つて是れ這の僧遣り去る、乃至、這の僧大笑して出づ。烏白云く、「消得恁麼、消得恁麼。」此れ分明
に是れ他を遣り得て恰好なり。看よ他の兩箇、機鋒互換、^⑤絲來線去、打
成一片、始終賓主分明なることを。有る時は主卻つて賓と作り、有る時は

⑤衣を縫ふ針線。

賓卻つて主と作る。雪竇也た讚歎し及ばず、所以に道ふ、「互換の機、人をして且く子細に看せしむ」
と。劫石固うし來るも猶ほ壞す可し。謂はゆる此の劫石は、長さ四十里、^⑥廣さ八萬四千由旬、厚
さ八萬四千由旬、凡そ五百年に乃ち天人有つて下り來つて、六銖の衣袖を以て拂ふこと一下す、又去つ
て百年に至つて、又來つて此の如く拂ふ、此の石を拂ひ盡すを、乃ち一劫と爲す、之を輕衣拂石劫と
謂ふ。雪竇道く、「劫石固うし來るも猶ほ壞す可し。」石は堅固なりと雖も、尙ほ爾も消磨し盡す可し。
此の二人の機鋒は、千古萬古、更に窮盡有ること無し。滄溟深き處も立ろ
に須らく乾くべし。任ひ是れ滄溟、洪波浩渺、白浪滔天なるも、若し此の
二人をして内に向つて地に立たしめば、此の滄溟也た須らく乾き竭すべし。
雪竇此に到つて一時に頌したる、末後に更に道ふ、「烏白老烏白老。幾何く
般ぞ。」或は擒或は縱、或は殺或は活、畢竟是れ幾何く般ぞ、他に杓柄を與ふ太だ端無し。這箇の拄杖
子、三世の諸佛も也た用ひ、歷代の祖師も也た用ひ、宗師家も也た用ひて、人の與に釘を抜き杖を抜
き、粘を解き縛を去る、爭か輕易に人に分付し與ふことを得ん。雪竇の意に、獨り用ひんことを要
す。頼に這の僧當時只だ他の與に平展するに値ふ、忽ち若し早地に雷を起さば、看よ他如何が當抵せ
ん。烏白杓柄を過して人に與へ去る、豈に是れ太だ端無きにあらずや。

⑥增壹阿含經五十に出づ。

⑦以下厚さ八萬四千由旬に至る、蜀本に此れ無し、恐らくは衍ならん。

第七十六則

垂示に云く、細きことは米末の如く、冷かなることは氷霜に似たり。乾坤に冪塞して、明を離し暗を絶す。低低たる處、之を觀るに餘りあり。高々たる處、之を平ぐるに足らず。把住放行、總て這の裡許に在り。還つて出身の處ありや也た無や。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、丹霞、僧に問ふ、「甚の處よりか來る。」(正に是れ總に來處没くんばある可らず、來處を知らんと要するに難からず。)僧云く、「山下より來る。」(草鞋を着けて備が肚裏に入つて過ぐるも也た只だ是れ會せず、言中に響有り語合し來る、知んぬ他は是れ黄か是れ綠か。)霞云く、「飯を喫し了るや也た未だしや。」(第一杓の惡水澆ぐ、何ぞ必らずしも定盤星のみならん、端的を知らんと要す。)僧云く、「飯を喫し了る。」(果然として箇の露柱を撞着す、卻つて旁人に鼻孔を穿卻せらる、元來是れ箇の無孔の鐵鎚。)霞云く、「飯を將ち來つて汝に與へて喫せしむる底の人、還つて眼を具するや。」(然も是れ勢に倚つて人を欺くと雖も、也た是れ欸に據つて案に結す、當時好し禪床を掀倒するに、端無くして什麼に作ん。)僧無語。(果然として走ること得ず、這の僧若し是れ作家ならば他に向つて道はん、和尚の眼と一般。)長慶

【本則】東嶺禪師云く、七十六則、古人の講訛、此の因縁の如き底は、又有る可らざるを明す、先師曾て翠巖眉毛の則に超過すと道ふ、保福長慶の問答、躍り擧る可き底、劈腹腕心なり。

保福に問ふ、「飯を將て人に與へて喫せしむ、恩を報するに分あり。什麼としてか眼を具せざる。」(也た只だ一半を道ひ得たり、通身是遍身是、一刀兩段、一手擲一手搦。)福云く、「施者受者、二り俱に瞎漢。」(令に據つて行す、一句に道ひ盡す、其の人に遇ふこと罕なり。)長慶云く、「其の機を盡し來るに、還つて瞎と成るや否や。」(甚の好惡をか識る、猶ほ自ら未だ肯はず、什麼の碗をか討ねん。)福云く、「我を瞎すと道ひ得てんや。」(兩箇俱に是れ草裏の漢、龍頭蛇尾、當時他の其の機を盡し來るに、還つて瞎と成らんや否やと道はんを待つて、只だ他に向つて瞎と道はん、也た只だ一半を道ひ得たり、一等に是れ作家、什麼として前村に構らす、後店に迭らざる。)

【評唱】鄂州丹霞の天然禪師は、何れの許の人なるを知らず、初め儒學を習ひ、將に長安に入つて舉に應せんとす、方に②逆旅に宿す、忽ち白光室に滿つると夢む。占者の曰く、「解空の祥なり。」偶ま一禪客あり、問うて曰く、「仁者何にか往く。」曰く、「選官し去る。」禪客曰く、「選官何ぞ選佛に如かん。」霞云く、「選佛當に何れの所にか往くべき。」禪客曰く、「今江西に馬大師出世す、是れ選佛の場なり、仁者往く可し」と。遂に直に江西に造る、才かに馬大師を見て、兩手を以て「幞頭脚を托ぐ。(脚一に額に作る。)馬師顧視して云く、「吾れ汝が師に非ず、南嶽の石頭の處に去れ。」遽かに南嶽に抵つて、還つて前意を以て之に投す。石頭云く、

①丹霞天然は、青原下二世石頭の法嗣、傳燈十四、會元第五に傳あり。
②逆旅は左傳の註に「客舎なり。」
③幞頭は四方に垂れある頭巾なり。

「槽廠に著き去れ。師禮謝して、行者堂に入る、衆に隨つて作務すること凡そ三年。石頭一日衆に告げて云く、「來日佛殿前の草を剗らん」と。來日に至つて、大衆各鐵鋤を備へて草を剗る、丹霞獨り盆を以て水を盛つて淨頭して、師の前に於て膝を跪く、石頭見て之を笑ふ。便ち與に剃髮す、又爲に説戒す。丹霞耳を掩ふて出づ、便ち江西に往いて再び馬祖に謁す。未だ參禮せざるに、便ち僧堂の内に去つて、聖僧の頸に騎つて坐す。時に大衆驚愕して、急に馬祖に報す、祖躬ら堂に入つて之を視て曰く、「我が子天然」と。霞便ち下つて禮拜して曰く、「師の法號を賜ふを謝す。」因つて天然と名く。他の古人天然此の如く穎脫なり、所謂選官は選佛に如かず、傳燈錄の中に、其の語句を載す。直に是れ壁立千仞、句句人の與に釘を抜き楔を抜く底の手脚有り。這の僧に問ふに似たり。道く、「什麼の處より來る。」僧云く、「山下より來る。」這の僧卻つて來處を通せず、一に眼を具して倒に去つて主家を勘するが如くに相似たり。當時若し是れ丹霞にあらずんば、也た收拾を爲し難し。丹霞卻つて云く、「喫飯し了るや也た未だしや。」頭邊は總て未だ見得せず、此は是れ第二回他を勘す。僧云く、「喫飯し了れり。」僧云く、「僧無語、丹霞の意に道く、「爾這般の漢に飯を與へて喫せしめば、什麼を作すにか堪へん。」這の僧若し是れ箇の漢ならば、試みに他に一箭を與へて、他を如何と看ん。然も是の如しと雖も、丹霞也た未だ爾を放さざること有り、這の僧眼 眨眨地にして

槽廠は説文に「馬屋の壁無きなり。」

無語。保福・長慶、同じく雪峯の會下に在つて、常に古人の公案を擧して商量す、長慶、保福に問ふ、「飯を將て人に與へて喫せしむ、恩を報するに分有り、什麼と爲てか眼を具せざる」と。必らずしも盡く公案中の事を問はず、大綱此の語を借つて話頭と作して、他の誦當の處を驗せんことを要す。保福云く、「施者受者、二り俱に瞎漢」と。快なる哉、這裏に到つて、只だ當機の事を論ず、家裏に出身の路有り。長慶云く、「其の機を盡し來らんに還つて瞎と成らんや否や。」保福云く、「我を瞎すと道ひ得てん麼。」保福の意に謂らく、「我れ恁麼に眼を具して、爾が與に道ひ了れり。還つて我を瞎すと道ひ得てん麼。」然も是の如くなりと雖も、半合半開、當時若し是れ山僧ならば、他の其の機を盡し來るに、還つて瞎と成るや否やと道はんを等つて、只だ他に向つて瞎と道はん。可惜許。保福當時若し這箇の瞎の字を下し得ば、雪竇許多の葛藤を免れ得ん。雪竇亦只だ此の意を用て頌す。

眨眨は目動くなり。

【頌】 機を盡して瞎と成らず。(只だ一半を道ひ得たり、也た他を驗し過さんことを要す。言猶は耳に在り。)牛頭を按じて草を喫せしむ。(失錢遭罪、半は河南半は河北、殊に知らず鋒を傷り手を犯すことを。)四七二三の諸祖師、(條有れば條を攀ち、先聖を帶累す、唯只だ一人を帶累するのみにあらず。)寶器持し來つて過谷と成る。(盡大地の人手を換へて何を搵つ、我に拄杖を還し來れ、山僧を帶累して也た出頭不得ならしむ。)過谷深し、(可煞だ深し、天下の衲僧跳不出、且く道へ、深きこと多

少ぞ。尋ぬるに處無し。(備が脚跟下に在り、摸索不着)天上人間同じく陸沈す。(天下の衲僧一坑に埋卻す、還つて活底の人有りや、一着を放過す、蒼天蒼天。)

【評唱】機を盡して瞎と成らず、長慶云く、「其の機を盡し來らんに、還つて瞎と成らんや否や。」保福云く、「我れを瞎と道ひ得ん麼」と。一に牛頭を按じて草を喫せしむるに似たり、須らく是れ他の自ら喫せんを等つて始めて得べし。那裏にか他の頭を按じて喫せしめん。雪竇恁麼に頌す、自然に丹霞の意を見得す。「四七二三の諸祖師、寶器持し來つて過谷と成る」と。唯只だ長慶を帶累するのみにあらず、乃至西天の二十八祖、此土の六祖、一時に埋没す。釋迦老子、四十九年、一大藏經を説いて、末後に唯だ這箇の寶器を傳ふ。永嘉道く、「是れ形を標して虚しく事擬するにあらず、如來の寶杖親しく蹤跡す」と。若し保福の見解を作さば、寶器持ち來るも、都て過谷と成る、過谷深し、尋ぬるに處無し。這箇備が與に説くことを得ず、但だ去つて靜坐して、他の句中に向つて點檢して看よ。既に是れ過谷深し、什麼に因つてか卻つて尋ぬるに處無き、此れ小過に非ざるなり。祖師の大事を將て、一齊に陸地上に於て、平沈卻す。所以に雪竇道く、「天上人間同じく陸沈す」と。

●莊子の註に、陸沈とは、行路水無くして沈むなり。言ふは人、世と相違ふと雖も、而も心猶ほ清からず、敬せずして、市廛に墜る、禍を免るゝこと能はずして敗を致す、是れ乃ち平地に居して、水無くして沈むなり。

第七十七則

垂示に云く、向上に轉じ去らば、以て天下の人の鼻孔を穿つべし。鶻の鳩を捉ふるに似たり。向下に轉じ去らば、自己の鼻孔、別人の手里に在り。龜の殻に藏るゝが如し。箇の中忽ち箇の出で來つて、本來向上向下無く、轉を用ひて什麼をか作さんと道ふあらば、只だ伊に向つて道はん、我れも也た知る、備が鬼窟裡に向つて活計を作すことを。且く道へ、作麼生か箇の縞素を辨せん。良久して云く、條あらば條を攀ち、條なければ例を攀づ。試みに舉す看よ。

【本則】舉す、僧雲門に問ふ、「如何なるか是れ超佛越祖の談。」(開、早地の忽雷、拶)門云く、「餠餅。」(舌上の齶を拄ふ、過也。)

【評唱】這の僧雲門に問ふ、「如何なるか是れ超佛越祖の談。」門云く、「餠餅」と。還つて寒毛卓豎することを覺ゆる麼。衲僧家佛を問ひ祖を問ひ、禪を問ひ道を問ひ、向上向下を問ひ了つて、更に問ふことを得可き無うして、卻つて箇の問端を致して、超佛越祖の談を問ふ、雲門は是れ作家、便ち水長されば船高く、泥多ければ佛大なり。便ち答へて道く、「餠餅」と。謂つ可し。道虚りに行せず、功浪りに施さず。雲門復た衆に示して云く、「備作し了る可きこと勿うし

【本則】東嶺禪師云く、七十七則、雲門超佛越祖の談を以て、一箇の餠餅と作して、喫却了也と云ふことを明す。
①餠餅は胡麻餅なり。
②易蒙辭の下に云く、「苟も其の人に非ざれば、道虚りに行れず。」

て、人の祖師意を道著するを見て、便ち超佛越祖の談の道理を問ふ、備且く什麼を喚んで佛と作し、什麼を喚んで祖と作して、即ち超佛越祖の談を説く。便ち箇の出三界を問ふ、備三界を把り來れ見ん。什麼の見聞覺知の備を隔碍著する有らん。什麼の聲色佛法の、汝に與へて了せしむ可き有らん。箇の什麼の碗をか了せん、那箇を以てか差殊の見を爲さん。他の古聖、備を奈何ともすること勿うして、身を横へて物の爲にす、箇の舉體全眞、物物觀體と道ふも、不可得、我れ汝に向つて道ふも、直下に什麼の事か有らん、早く是れ埋没し了れり。此の語を會得せば、便ち餠餅を識得せん。五祖云く、「驢屎麝香に比す、(一に馬糞に作る。)所謂 直に根源を截るは佛の印し玉ふ所、葉を摘み枝を尋ぬるは我れ能はず」と。這裏に到つて、親切を得んと欲せば、問を將ち來つて問ふこと莫れ。看よ這の僧問ふ、「如何なるか是れ超佛越祖の談、門云く、「餠餅」と。還つて差慚を識る麼、還つて漏返することを覺ゆる麼。一般の人有つて、杜撰にして道ふ、「雲門兔を見て鷹を放つ、便ち道ふ、餠餅と」。若し恁麼に餠餅を將て、便ち是れ超佛越祖の談として見去らば、豈に活路有らんや。餠餅の會を作すこと莫れ、又超佛越祖の會を作さざれ、便ち是れ活路なり。麻三斤、解打鼓と一般な

① 什麼の碗は、猶ほ什麼の事と云ふがごとし、碗の字意義無し。
 ② 五祖演上堂舉す、僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ超佛越祖の談、門云く、「餠餅」、白雲は即ち然らず、忽ち人有りて、「如何なるか是れ超佛越祖の談と問はば、只だ伊れに向つて道はん、驢屎馬糞に似たり、」又云く、「破草鞋、」又云く、「靈龜尾を曳く、且く道へ、是れ同か、是れ別か、試みに辨じて看よ。
 ③ 已下我れ能はずに至る、永嘉の證道歌。
 ④ 第十二則。
 ⑤ 第四十四則。

り。然も只だ餠餅と道ふと雖も、其れ實に見難し。後人多く道理を作して云く、「龜言及び細語、皆第一義に歸す」と。若し恁麼に會せば、且く去つて座主と作つて、一生多知多解を贏得せよ。如今の禪和子道ふ、超佛越祖の時、諸佛も也た腳跟下に踏在し、祖師も也た腳跟下に踏在す。所以に雲門只だ他に向つて餠餅と道ふ、既にはれ餠餅、豈に超佛越祖を解せんや。試みに去つて參詳して看よ、諸方の頌極めて多し、盡く問頭邊に向つて言語を作す。唯だ雪竇頌得て最も好し、試みに舉す看よ。頌に云く、

【頌】 超談の禪客問偏に多し。(箇箇出で來つて便ち這般の見解を作す、麻の如く粟に似たり。)縫罽披離たり見るや。(已に言前に在り、開也自屎臭きことを覺えず。)餠餅壘し來つて猶ほ住ます。(木椀子を將て備が眼睛に換卻し了れり。)今に至つて天下諸訛あり。(箇の圓相を畫きて云く、是れ恁麼に會すること莫しや、人の言語を咬めば甚の了期か有らん。大地茫茫として人を愁殺す、便ち打つ。)

① 以下一義に歸すに至る、涅槃經二十の文、經には饜語に作る。
 ② 以下、便ち下座に至る、雲門本錄對機部に出づ。
 ③ 古鈔に云く、「茅坑は東司即ち廁なり、蟲子は糞蟲なり。」

【評唱】 「超談の禪客問偏に多し」と、此の語禪和家偏に問ふことを愛す。見すや雲門道く、「備諸人横に拄杖を擔うて、我れ參禪學道すと道つて、便ち箇の超佛越祖の道理を覺む。我れ且く備に問はん、十二時中、行住坐臥、屙屎放尿、茅坑裏の蟲子、市肆買賣羊肉案頭に至つて、還つて超佛越祖底の道理有り麼。道ひ得る底は出で來れ、我が東行西行を妨ぐることを莫れ」と。便ち下座。有る者は

更に好惡を識らず、圓相を作して、土上に泥を加へ、枷を添へ鎖を帶ぶ。縫罽披離たり見る也。廢、問を致す處、大小大の縫罽有り、雲門他の問處披離するを見る。所以に罽餅を將て、罽縫に塞定す。この僧猶ほ自ら肯て住まず、卻つて更に問ふ。是の故に雪竇道く、「罽餅」壅し來るも猶ほ住まず、今に至つて天下誦詛有り。「如今の禪和子、只管に罽餅の上に去つて解會す、然らざれば超佛越祖の處に去つて道理を作す。既にこの兩頭に在らずんば、畢竟什麼の處にか在る。三十年後、山僧が骨を換へて出で來らんを待つて、卻つて爾に向つて道はん。

第七十八則

【本則】 擧す、古十六開士あり。(群を成し隊を作す什麼の用處か有らん、這の一隊不啣喙の漢。)浴僧の時に於て、例に隨つて浴に入る。(露柱に撞着す、漆桶什麼をか作す。)忽ちに水因を悟る。(惡水驀頭に澆ぐ。)諸禪德、作廢生か他の妙觸宣明、更に別人の事に干らず、作廢生か他を會せん、撲落他物に非ず。成佛子住と道ふとを會す。(天下の禪僧這裏に到つて摸索不着、兩頭三面にして什麼か作ん。)也た須らく七穿八穴して始めて得べし。(一棒一條の痕、山僧に辜負すること莫くんば好し、撞着碇着、

①罽は孔なり、披は開なり。
②壅は塞なり。
【本則】 東嶺禪師云く、七十八則、妙觸の一句、德山亦此の中より出づることを明す。
③孤山曰く、跋陀婆羅、此には賢守と云ふ、亦賢護とも云ふ、賢德を守護し、亦衆生を守護す。
永覺云く、例に隨つて浴に入るに因つて、忽ち水因、本、自性無きことを悟る、水既に性無し、塵體も亦然り、故に

還つて曾て德山、臨濟を見るや。

【評唱】 楞嚴會上の跋陀婆羅菩薩、十六の開士と、各梵行を修す、乃ち各所證の圓通法門の因を説く、此れ亦二十五圓通の一數なり。他因に浴僧の時、例に隨つて浴に入つて、忽ち水因を悟る。云く、「既に塵をも洗はず、亦體をも洗はず」と。且く道へ、箇の什麼をか洗ふ。若し會得し去らば、中間安然として、所有無きことを得ん。千箇萬箇、更に近傍することを得ず、所謂無所得是れ眞の般若なるを以てなり。若し所得有らば、是れ相似の般若なり。見すや達磨、二祖に謂つて云く、「心を將ち來れ、汝が與に安せん。」二祖云く、「心を覓むるに了に不可得なり」と。這裏の些子、是れ禪僧が性命の根本、更に總に如許多の葛藤を消得せず。只た箇の忽ち水因を悟ると道ふことを消せば、自然に了當せん。既に塵をも洗はず亦體をも洗はず、且く道へ、箇の什麼をか悟る。這般の田地に到つて、一點も也た著くことを得ず。箇の佛の字を道ふも、也た須らく諱卻すべし。他道く、「妙觸宣明、成佛子住」と。宣は則ち是れ顯なり、妙觸は是れ明なり。既に妙觸を悟れば、佛子住を成して、即ち佛地に住す。如今の人も亦

曰く、塵をも洗はず、體をも洗はずと、水と塵體と既に寂、中間觸を覺する又安ぞ有らんや、此れより藏心に悟入す、故に觸摩頰に滅して、妙觸宣明して佛子住を成するなり、此の緣楞嚴第五に出づ。
④開は達なり明なり解なり、士は則ち士夫なり、經中に多く菩薩を呼んで開士と爲す、前秦の符堅、沙門德解有る者に賜うて開士と號す。
⑤以下相似の般若なりに至る、大品般若第十、二十善品の文なり。
⑥靜中不味を懼と曰ふ、大惠書に、百不思の時、懼懼と云ふ。
⑦禪林類聚十一に、玄沙初め雙峰に講す、後に諸方に編歷して知識に參尋せんと欲す、囊を携へて領を出づ、脚指頭を築著して、流血痛楚す、忽然として猛省して云く、是の身有

浴に入り亦水に洗ふ、也た恁麼に觸る、甚に因つてか卻つて悟らざる。皆塵境に惑障せられて、皮に粘じ骨に着く。所以に便ち惺惺として去ること能はず、若し這裏に向つて洗ふも亦無所得、觸るるも亦無所得、水因も亦無所得。且く道へ、是れ妙觸宣明か、是れ妙觸宣明にあらざるか。若し箇裏に向つて、直下に見得せば、便ち是れ妙觸宣明、成佛子住なり。如今の人も亦觸る、還つて妙處を見る麼、妙觸は常の觸るゝに非ず、觸する者と合する則は觸と爲り、離する則は非なり。玄沙嶺を過ぎて、脚指頭に磕著す。乃至、徳山の棒、豈に是れ妙觸にあらずや。然も恁麼なりと雖も、也た須らく是れ七穿八穴にして始めて得べし。若し只だ身上に向つて摸索せば、什麼の交渉か有らん。爾若し七穿八穴にし去らば、何ぞ浴に入ることを須ひん。便ち一毫端の上にて、寶王刹を現じ、微塵裏に向つて、大法輪を轉す。一處透得すれば、千處萬處一時に透る、只だ一窠一窟を守ること莫れ、一切處都て是れ觀音入理の門、古人亦聞聲悟道、見色明心有り。若し一人悟り去ることは、則ち故に是、甚に因つてか十六開士、同時に悟り去る。是の故に古人同修同證、同悟同解、雪竇他の教意を拈じて、

に非ず、痛何れよりか来る」と、遂に雲峯に回る、雲峯問うて云く、「那箇は是れ佛頭陀、師曰く、終に敢て人を誑さず、雪峰忽ち一日召して云く、「佛頭陀何ぞ偏參し去らざる、師云く、「遠磨東土に來らず、二祖西天に往かず、峰之を然りとす。

●禪林類聚第六に、徳山鑿禪師、初め龍潭に見ゆ、徳山に出世して佛殿を立てず、凡そ僧の門に入るを見ては便ち棒す。●楞嚴第四に云く、小の中に大を現じ、大の中に小を現す、道場を動かすして、十方界に徧し、身十方無盡の虚空を含んで、一毫端に於て、寶王刹を現じ、微塵裏に坐して、大法輪を轉す、故に眞如妙覺明の性を發す。●香嚴は擊竹の聲を聞いて悟

人をして妙觸の處に去つて會取せしむ。他の教眼を出で頌して、人の教網の裏に去つて籠罩、半醉半醒なることを免れ得て、人をして直下に灑灑落落たらしめんことを要す。頌に云く、

【頌】 丁事の衲僧一箇を消す。(現に一箇有り、朝打三千暮打八百、金剛圈を跳出す、一箇も也た消得せず。)長連床上脚を展べて臥す。(果然として是れ箇の瞌睡の漢、劫を論じて禪を論せず。)夢中曾て説く圓通を悟ると。(早く是れ瞌睡更に夢を説く、卻つて爾に許す夢に見ることを、寐語して什麼か作ん。)香水洗ひ來るも麤面に唾せん。(咄、土上に泥を加ふ又一重、淨地上に來つて扇する莫れ。)

【評唱】 「了事の衲僧一箇を消す」と、且く道へ、箇の什麼の事をか了得す。作家の禪客は、聊か擧著するを聞いて、剔起して便ち行く。恁麼の衲僧に似たるも、只だ一箇を消得す。何ぞ用ひん群を成し隊を作すことを、「長連床上脚を展べて臥す」と。古人道く、「明明として悟法無し、悟了せば卻つて人を迷はす。長に兩脚を舒べて睡れば、偽も無く亦眞も無し」と。所以に胷中一事無し。飢來れば飯を喫し、困じ來れば眠る。雪竇の意に道く、「爾若し浴に入つて妙觸宣明を悟得す、這般の無事衲僧分上に在りと説かば、只だ夢中に夢を説くに似たり。」所以に道く、「夢中曾て説く圓通を悟る、香水洗ひ來るも麤面に唾せん」と。恁麼に似たるも、只だ是れ惡水麤頭に澆ぐ、更に箇の什麼の圓通とか

道す。●雲は桃花を見て心を明む。●別は燧燭の心を「ちよいと切る」を云ふ、剔起は「ついと、たつて行く」なり。●以下眞も無しに至る、會元第五に、夾山善會禪師僧に示す、偈なり。

説かん。雪竇道く、「這般の漢に似たるも、正に好し慕頭慕面に唾せん。」山僧は道ふ、「土上に泥を加ふ又一重。」

第七十九則

垂示に云く、大用現前、軌則を存せず。活捉生擒、餘力を勞せず。且く道へ、是れ什麼人か曾て恚麼にし來る。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、僧、投子に問ふ、「一切の聲は是れ佛聲と、是なりや否や。」(也た虎鬚を捋づること
を解す、青天霹靂を轟す、自屎臭きを覺えず。)投子云く、「是。」(一船の人を賺殺す、身を賣りて憫
に與へ了れり、一邊に拈放す、是れ什麼の心行ぞ。)僧云く、「和尚尿沸碗
鳴聲すること莫れ。」(只だ錐頭の利を見て鑿頭の方を見ず、什麼と道
ふぞ、果然として敗缺を納る。)投子便ち打つ。(着、好打、放過せば則ち
不可。)又問ふ、「麤言及び細語、皆第一義に歸すと、是なりや否や。」(第
二回虎鬚を捋づ、賊を抱いて屈と叫んで什麼か作ん、東西南北猶ほ影響の有る在り。)投子云く、
「是。」(又是れ身を賣りて憫に與へ了れり、陷虎の機、也た是れ什麼の心行ぞ。)僧云く、「和尚を喚
んで一頭の驢と作し得てんや。」(只だ錐頭の利を見て鑿頭の方を見ず、逆水の波有りとも雖も只だ是

【本則】
東嶺禪師曰く、七十九則、投
子機を盡して、機輪隔て無き
を明すのみ。

れ頭上に角無し、血を含んで人に喫ぐ。)投子便ち打つ。(着、放過す可らず、好打、拄杖未だ折るに
到らざるに、什麼に因つてか便ち休し去る。)

【評唱】投子 朴實頭にして、逸群の辯を得たり、凡を問を致すこと有つて、口を開かば便ち膽を見
る、餘力を費さずして、便ち他の舌頭を坐斷す。謂つ可し籌を帷幄の中に運して、勝を千里の外に決
すと。這の僧聲色佛法の見解を將て、他の額頭上に貼在して、人に逢うて便ち問ふ。投子は作家、來
風深く辨す。這の僧投子の實頭なることを知つて、台下に箇の ① 圈續子を做して、投子をして入り來
らしむ。所以に後語有り、投子卻つて陷虎の機を使ふて、他の後語を釣り
出し來る。這の僧他の答處を接して道ふ、「和尚 尿沸碗 鳴聲すること莫
れ」と。果然として一釣に便ち上る、若し是れ別人ならば、則ち這の僧を
奈何ともせず。投子は具眼、後に隨つて便ち打つ。咬猪狗底の手脚なり、
須らく作家に還して始めて得べし。左轉も也た他に隨つて阿轆轤地、右轉も也た他に隨つて阿轆轤地、
這の僧既に是れ箇の圈續子を做して、來つて虎鬚を捋でんと要す。殊に知らず投子更に他の圈續頭上
に在ることを。投子便ち打つ、這の僧可惜許、頭有つて尾無し。當時他の棒を拈せんことを等つて、
便ち與に禪床を掀倒せば、直鏡ひ投子全機なりとも、也た須らく倒退三千里すべし。又問ふ、「龜言
及び細語、皆第一義に歸すと、是なりや否や。」投子亦云く、「是」と。一に前頭の語に似て異なること無

① 質朴篤實。
② 圈續は「わな」と譯す。後語は
再歩のこと。
③ 尿は正鶴海卷の七に、「尾蔽な
り。」沸碗鳴は熱き汁を碗にさ
ますこと。しゆん／＼。

し。僧云く、「和尚を喚んで一頭の驢と作し得てん麼。」投子又打つ、この僧然も窠窟を作すと雖も、也た妨げず奇特なることを。若し是れ曲柔木床上の老漢、頂門に眼無くんば、也た他を折挫し難し。投子轉身の處有り、這の僧既に箇の道理を做して、他の行市を攪かんことを要す。到り了らば舊に依つて投子老漢を奈何ともせず。見すや巖頭道く、「若し戰を論せば、箇箇轉處に立在す」と。投子放去は太だ遅く、收來は太だ急なり。這の僧當時若し身を轉じて氣を吐くことを解せば、豈に箇の口血盆に似たる底の漢と作り得ざらんや。衲僧家一做さざれば二休せず、這の僧既に擲卻すること能はず、投子に鼻孔を穿卻せらる。頰に云く、

「頰」投子投子。灼然、天下這の實頭の老漢無し、人家の男女を教壞す。機輪阻無し。(什麼の他を奈何ともする處か有らん、也た些子有り。)一を放つて二を得たり。(備が眼睛を換卻す、什麼の處にか投子を見ん。)彼に同じく此に同じ。(慳慳に來るも也た棒を喫し不慳慳に來るも也た棒を喫す、閑黎他に替る、便ち打たん。)憐むべし限りなき潮を弄するの人。(叢林の中一箇半箇を放出す、這の兩箇の漢を放出す、天下の衲僧慳慳に去らんことを要す。)畢竟還つて潮中に落ちて死す。(可惜許、爭奈せん這の罔續を出づるを得ざることを、愁人愁人に向つて説くこと莫れ。)忽然として活せば、(禪床震動、山僧を驚殺す、也た倒退三千里ならしむ。)百川倒に流れて闊漉々たらん。(峻、徒に佇思するに勞す、山僧敢て口を開かず、投子老漢也た須らく是れ拄杖を拗折して始めて得べし。)

【評唱】「投子投子、機輪阻無し」と、投子尋常道ふ、「備總に道ふ、投子實頭なり」と。忽然として山を下ること三步せんに、人有つて備に問うて、「如何なるか是れ投子實頭の處と道はゞ、備作麼生か抵對せん。」古人道く、「機輪轉する處、作者猶は迷ふ」と。他機輪轉すること機輪地にして、全く阻隔無し。所以に雪竇道く、「一を放つて二を得たり」と。見すや僧問ふ、「如何なるか是れ佛。」投子云く、「佛。」又問ふ、「如何なるか是れ道。」投子云く、「道。」又問ふ、「如何なるか是れ禪。」投子云く、「禪。」又問ふ、「月未だ圓ならざる時如何。」投子云く、「三箇四箇を吞卻す。」圓なる後如何。「七箇八箇を吐卻す。」投子人を接するに、常に此の機を用ふ、這の僧に答ふるに、只だ是れ一箇の是の字、這の僧兩回打たる。所以に雪竇道く、「彼れに同じく此れに同じ。」四句一時に投子を頌し了れり。末後に這の僧を頌して道く、「憐む可し限り無き潮を弄するの人。」這の僧敢て旗を擡き鼓を奪うて道ふ、「和尚尿湧礮鳴聲すること莫れ。」又道ふ、「和尚を喚んで一頭の驢と作し得てん麼。」此れ便ち是れ潮を弄する處なり。這の僧伎倆を盡して、依前として投子の句中に死在す。投子便ち打つ、此の僧便ち是れ畢竟還つて潮中に落ちて死す。雪竇這の僧を出して云く、「忽然として活して便ち與に禪床を掀倒せば、投子も也た須らく倒退三千里すべし。直に得ん百川倒流して闊漉々たらんことを。」唯だ禪床震動するのみに非ず、亦乃ち山川、岌嶸、天地、陡暗たら

① 漉は字彙に活と同じ、水流る聲。
 ② 韻會に、岌は高山なり、嶸は崖なり。
 ③ 字書を考ふるに、未だ陡の字を見ず、當に陡に作るべし、陡は正韻に韻なり。まつくらやみ。

ん。苟し或は箇箇此の如くならば、山僧且く退鼓を打たん、諸人什麼の處に向つてか、安身立命せ

第八十則

【本則】 擧す、僧、趙州に問ふ、「初生の孩子還つて六識を具するや也た無や。」(閃電の機什麼の初生の孩兒子とか説かん。)趙州云く、「急水上に毬子を打す。」(過也、俊鶴趣へども及ばず、也た驗過せんことを要す。)僧復た投子に問ふ、「急水上に毬子を打するの意旨如何。」(也た是れ作家、同じく驗過す、還つて會すや過也。)子云く、「念々不停流。」(葛藤を打する漢。)

【評唱】 此の六識、教家に立つて正本と爲す、山河大地、日月星辰、其れに因つて生ずる所以なり。來るときは先鋒爲り、去るときは殿後爲り。古人道く、「三界唯心、萬法唯識」と。若し佛地を證すれば、八識を以て轉じて四智と爲す、教家に之を名を改めて體を改めすと謂ふ。根塵識是れ三つ、前塵は元分別を會せず、勝義根能く識を發生し、識能く色の分別

【本則】 東嶺禪師云く、八十則、便ち二老の問答、意到り句到る、驚く可く敬す可し、隱隱法眼宗の機用有ることを明す。
① 圓覺略疏に曰く、「諸經論俱に説く、萬法一心、三界唯識」と、唯識論第七、華嚴五十四等に出づ、文大同少異。
② 大藏一覽第八秘藏註に云く、「佛、八識を轉じて、四智と成すとは、八を用つて大圓鏡智と爲し、七を平等性智と爲し、六を妙觀察智と爲し、前五を成所作智と爲す、識は分別なり、智は能く決斷す。」

を顯す、即ち是れ第六の意識なり。第七識の末那識、能く去つて世間一切の影事を執持して、人をして煩惱して自由自在を得ざらしむ、皆是れ第七識なり。第八識に到つては、亦之を阿頼耶識と謂ふ、亦之を含藏識と謂ふ。一切善惡の種子含藏す。この僧教意を知つて、故に將ち來つて趙州に問うて道く、「初生の孩子、還つて六識を具するや也た無や」と。初生の孩兒六識を具して、眼能く見、耳能く聞くと雖も、然も未だ曾て六塵を分別せず。好惡長短、是非得失、他恁麼の時總て知らず、學道の人、復た嬰孩の如くならんことを要す。榮辱功名、逆情順境、都て他を動することを得ず。眼色を見て盲と等しく、耳聲を聞いて聾と等し。癡の如く兀に似たり、其の心動せざること、須彌山の如し。這箇は是れ衲僧家、眞實得力の處なり。古人道く、「衲被蒙頭萬事休。此の時山僧都て不會。」若し能く此の如くならば、方に少分の相應有らん。然も此の如くなりと雖も、爭奈せん一點も也た他を瞞じ得ざること。山は舊に依つて是れ山、水は舊に依つて是れ水、造作無く、緣慮無し。日月大虚に運つて未だ嘗て暫くも止らざるが如し。亦我れ許多の名相有りと道はず、天の普く蓋ふが如く、地の普く撃ぐるに似たり。

③ 六根、六塵、六識。
④ 末那、唯識に意と翻す、或は執我と云ふ、或は分別と云ふ、此の識、我癡、我見、我慢、我愛の四惑と常に俱にするが故に、染汚と名く、藏識所變の影像を執持して、諸識を引いて分別せしむ。
⑤ 阿頼耶識、能藏と所藏と執藏とを具す、故に藏識と名く。
⑥ 已下聾と等しに至る、維摩經弟子品に出づ、譬曰く、「盲とは美惡の異を見ざるを謂ふ、目を閉づるを謂ふに非ざるなり、未だ山の響に因つて喜怒哀致すこと有らざるなり。」
⑦ 法華序品に、「安住不動なること、須彌山の如し。」
⑧ 已下不會に至る、傳燈二十九石頭草庵の歌。つむりにものをかぶつてゐること。

無心なるが爲の故に、所以に萬物を長養す、亦我れに許多の功行有りと道はず。天地無心なるが爲の故に、所以に長久なり。若し有心ならば則ち限齊有らん、得道の人も亦復た是の如し。無功用の中に於て功用を施す、一切の違情順境、皆慈心を以て攝受す。這裏に到つて、古人尚ほ自ら呵責して道く、「了了の時了了す可き無く、玄玄の處直に須らく呵すべし。」又道く、「事事通じ物物明かなり、達者之を聞いて暗裏に驚く。」又云く、「聖に入り凡を超えて聲を作さず、臥龍長に怖る碧潭の清きことを、人生若し長く此の如きことを得ば、大地那ぞ能く一名を留めん」と。然も恁麼なりと雖も、更に須らく窠窟を跳出して始めて得べし。豈に見ずや教中に道く、「第八不動地の菩薩、無功用の智を以て、一微塵の中に於て、大法輪を轉す、一切時中、行住坐臥に於て得失に拘らず、任運に薩婆若海に流入す。」納僧家這裏に到つて亦執著す可らず、但だ時に隨つて自在なり。茶に遇うては茶を喫し、飯に遇うては飯を喫す、這箇向上の事、箇の定の字を著くることも也た得ず、箇の不定の字を著くることも也た得ず。石室の善道和尚衆に示して云く、「汝小兒出胎の時を見ずや、何ぞ曾て我れ看教を會すと道はん、恁麼の時に當つて、亦有佛性の義、無佛性の義を知らず、

① 已下呵すべしに至る、同安十玄談。
 ② 已下暗裏に驚くに至る、紫塞野人雲子の吟、禪門諸祖偈頌の上に載す。
 ③ 已下一名を留めんに至る、龍牙和尚の偈、禪門諸祖偈頌の上に載す。
 ④ 第八以下薩婆若海に流入すに至る、華嚴第八地の文なり。
 ⑤ 大論二十七に云く、「薩婆若、泰には一切智と言ふ、幻住曰く、教に二智三智の差別を説く、然も今は佛智を指して云ふ。」
 ⑥ 論に云く、「定、不定法とは、色界の四禪、無色界の四禪は、是れ定法、是れ不定法、眞定

長大に至るに及んで、便ち種種の知解を學び出で來つて便ち道く、「我れ能くし我れ解す」と。知らず是れ客塵煩惱なることを。十六觀行の中、嬰兒行を最と爲す。哆哆呬呬の時、學道の人の、分別取捨の心を離るるに喩ふ。故に嬰兒を讚歎して、況喩して之を取る可し。若し嬰兒是れ道と謂はゞ、今時の人錯つて會す。南泉云く、「我れ十八上にして、作活計を解す」と。趙州道く、「我れ十八上にして、破家散宅を解す」と。又道く、「我れ南方に在つて二十年、粥飯の二時、是れ雜用心の處なるを除く。」曹山、僧に問ふ、「菩薩定中に、香象の河を渡るを聞くこと歴歷地なりと、什麼の經にか出でたる。」僧云く、「涅槃經。」山云く、「定前に聞くか定後に聞くか。」僧云く、「和尚流せり。」山云く、「灘下に接取せよ。」又楞嚴經に云く、「湛入合湛、識の邊際に入る。」又楞伽經に云く、「相生は執礙、想生は妄想、流注生は則ち妄を逐ふて流轉す。」若し無功用地に到るも、猶ほ流注相の中に在り、須らく是れ第三の流注相を出得して、方に始めて快活自在なるべし。所以に瀉山仰山に問うて云く、「寂々如何。」仰山云く、「和尚他の見解を問ふか、他の行解を問ふか。若し他の行解を問はゞ、某甲知らず、

に非ざるが故に、生滅有るが故に、三乘出世の寂滅定は、是れ定法、是れ不定法、皆取捨の法有るが故に、一乘法界禪は、是れ定法、是れ不定法、是れ寂用自在なるが故に、一切凡夫の法は、是れ不定法、一切諸佛の法は、是れ定法、故に一切の凡聖皆定法無く依止無きが故に。」
 ⑦ 以下錯りて會すに至る、傳燈十四に出づ。
 ⑧ 客塵煩惱は、即ち見惑思惑、楞嚴第一に詳かなり。
 ⑨ 涅槃經十一聖行品に云く、爾の時佛迦葉菩薩に告ぐ、云云、專心に五種の門を思惟せよ、何等か五と爲す、一には聖行、二には梵行、三には天行、四には嬰兒行、五には狗行。あるひは云く、天台の支義に、此の五行の中、天行を除いて、四教に配す、然る時は則ち四

若し是れ見解ならば、一瓶の水を一瓶の水に注ぐが如し」と。若し此の如くなることを得ば、皆以て一方の師と爲る可し。趙州云く、「急水上に毬子を打す」と。早く是れ轉轉地、更に急水上に向つて打する時、眨眼すれば便ち過ぐ。譬へば楞嚴經に云ふが如し、急流水の、望まば恬靜と爲るが如し。古人云く、「譬へば駛流水の如し、水流れて定止無し、各各相知らず、諸法も亦是の如し」と。趙州の答處意、渾て此れに類す。其の僧又投子に問ふ、「急水上に毬子を打すと、意旨如何。」子云く、「念念不停流」と。自然に他の問處と恰好なり。古人の行履綿密に、答へ得て只だ一箇に似たり、更に計較を消せず。備纒かに他に問はば、早く備が落處を知り了れり。孩子の六識、然も無功用なりと雖も、爭奈

四十六を成す、聖行は二乘、梵行は菩薩行、天行は如來、嬰兒は人天、病行は四病趣なり。⑦涅槃經二十に嬰兒行品あり。⑧從容錄第一に、「哆哆和和は嬰兒の言語眞ならざる勢。」⑨上は誤會に、「通なり、登なり。」今十八度、十八回の義。これは大悟十八小悟その數を知らずの如き自在を云ふ。⑩曹山は青原下五世洞山の法嗣、傳燈十七、會元十三に傳あり。⑪上の漢は六識即ち見精閉、精等、下の漢は八識。永覺曰く、識の湛を以て、入れて眞湛に合するを、亦識の邊際と名づく。眞妄和合、正に第八識と名づくるを以てなり。⑫人天眼目第四に、鴻山、仰山に謂うて曰く、「吾れ境智を以て宗要と爲して、三種生を出す、所謂想生と相生と流注生となり、楞嚴經第四に云く、「想

は相を塵と爲し、識情を垢と爲す二俱に遠離すれば、即ち汝が法眼時に應じて精明なり、云何ぞ無上智覺を成ぜざらん」と。想生は即ち能思の心雜亂す、相生は即ち所思の境歷然たり、微細流注俱に塵垢と爲る、若し能く淨盡すれば方に自在を得ん。⑬楞嚴第十に云く、「又汝精明湛として搖かざる處を恒常と名づくとは云云、阿難當に知るべし、湛の眞に非ざることを、急流の水の望めば恬靜なるが如く、流急なれば見えす、是れ流無きに非ざるが如し云云、」溫陵曰く、「湛眞湛に非ず、特に幽潛して覺えざるのみ、故に急流の水の幽潛流注して、測知す可らざるに譬ふ。」是れ眞の憶想の元、妄を容るゝの體なり。⑭晉譯華嚴經第六に、「譬へば駛

せん念念停らずして、密水の流るゝが如きことを。投子恁麼に答ふ、謂つ可し深く來風を辨すと。雪竇の頌に云く、

【頌】六識無功一問を伸ぶ。(眼有つて盲の如く耳有つて聾の如し、明鏡臺に當り明珠掌に在り、一句に道盡す。)作家曾て共に來端を辨す。(何ぞ必らずしもせん、也た箇の細素を辨せんことを要す、唯だ證して乃ち知る。)茫茫たる急水に毬子を打す。(始終一貫、過也、什麼と道ふぞ。)落處停らず誰か看ることを解せん。(看ば即ち瞎、過也、灘下に接取せよ。)

【評唱】六識無功一問を伸ぶ、古人の學道養うて這裏に到る、之を無功の功と謂ふ、嬰兒と一般なり。眼耳鼻舌身意有りと雖も、而も六塵を分別すること能はず、蓋し無功用なればなり。既に這般の田地に到つて、便乃ち龍を降し虎を伏し、坐脱立亡す。如今の人但だ目前の萬境を將て、一時に歇卻す、何ぞ必らずしも八地以上にして方に乃ち是の如くならん。然も無功の處なりと雖も、舊に依つて山は是れ山、水は是れ水。雪竇前面に頌して云く、「活中に眼有り還つて死に同じ、藥忌何ぞ須ひん作家を驗みることを。」蓋し趙州投子はれ作家なるが爲に、故に云ふ、「作家曾て共に來端を辨す、茫茫たる急水に毬子

を打す。投子道く、「念念不停流。」諸人還つて落處を知る麼。雪竇末後に人をして自ら眼を著けて看せしむ、是の故に云く、「落處停らす誰か看ることを解せん」と。此れは是れ雪竇の活句、且く道へ、什麼の處にか落在する。

國譯佛果園悟禪師碧巖錄卷第八終

國譯佛果園悟禪師碧巖錄卷第九

第八十一則

垂示に云く、旗を擡ぎ鼓を奪ふ、千聖も窮むることなし、諸訛を坐斷して、萬機到らず。是れ神通妙用にあらず、亦本體如然にあらず。且く道へ、箇の什麼に憑つてか、恁麼に奇特なることを得たる。

【本則】 擧す、僧、藥山に問ふ、「平田淺草、麀鹿群を成す。如何が塵中の塵を射得せん。」(髻を把つて衝に投す、頭を撃げ角を帯びて出で来る、腦後に箭を抜く。)山云く、「箭を看よ。」(就身打劫、下坡に走らすんば、快便逢ひ難し、着。僧身を放つて便ち倒る。(灼然として同じからず、一死更に再活せず、精魂を弄する漢。)山云く、「侍者這の死漢を拖き出せ。」(令に據つて行す、再勘するに勞せず、前箭は猶ほ軽く後箭は深し。)僧便ち走る。(棺木裏に瞠眼す、死中に活と得たり、猶ほ氣息の有る在り。)山云く、「泥團を弄する漢、什麼の限りかあらん。」(可惜許、放過することを、令に據つて行す、雪上に霜を加ふ。)雪竇拈じて云く、「三步には活すと雖も、五歩には須らく死すべし。」

【本則】 東嶺禪師云く、八十一則、便ち宗門の死活別に長處有り、世人知る可らざるを明す。

（一手擡一手搦、直饒ひ走ること百歩するも也た須らく喪身失命すべし。復た云く、箭を看よ、且く道へ、雪竇の意什麼の處にか落在す、若し是れ同死同生せば、藥山直に得たり目證し口呿すること。一向に無孔の鐵鎚に似たらば何の用を作すにか堪へん。）

【評唱】 這の公案、洞下に之を借事問と謂ひ、亦之を辨主問と謂ふ、用て當機を明す。鹿と麀とは尋常射易し、唯だ麀中の麀のみ有つて、是れ鹿中の王なり、最も是れ射難し。此の麀鹿、常に崖石の上に於て、其の角を利すること、鋒鏑の穎利なるが如し。身を以て群鹿を護惜す、虎も亦近傍すること能はず。這の僧亦惺惺なるに似たり、引き來つて藥山に問うて、用て第一機を明す。山云く、「箭を看よ」と。作家の宗師、妨げず奇特なることを。擊石火の如く、閃電光に似たり。豈に見すや、三平初め、石鞏に參す、鞏才かに來るを見て、便ち弓を彎く勢を作して云く、「箭を看よ。」三平胸を撥開して云く、「此れは是れ殺人箭か、活人箭か。」鞏弓弦を彈すること三下、三平便ち禮拜す。鞏云く、「三十年、一張の弓、兩隻の箭、今日只だ半箇の聖人を射得す」と云つて、便ち弓箭を拗折す。三平後に大顛に舉似す、顛云く、「既に是れ活人箭、什麼と爲てか弓弦上に向つて辨す。」三平無語、顛云く、「三十年後、人の此の話を舉せんことを要すとも也た得難し。」

① 陸佃曰く、「名苑に云ふ、鹿の大なるを麀と曰ふ、群鹿之に隨ひ、皆麀の往く所、麀尾の轉する所を視て、準と爲す、文に於て主鹿を麀と爲す、古の談は、馬を揮ふ其に是れが爲なり、其の尾塵を許く。」
② 會元第五に、漳州三平の義忠禪師、初め石鞏に參す云云、青原下三世大顛の法嗣。
③ 石鞏は南嶽下二世馬祖の法嗣、傳燈第六、會元第三に傳あり。

し。法燈頌有り、云く、「古石鞏師有り、弓矢を架して坐す、是の如くすること三十年、知音一箇も無し、三平的に中り來る、父子相投和す、子細に返つて思量すれば、元伊れ是れ塚を射る」と。石鞏の作略藥山と一般なり、三平頂門に眼を具して、一句下に向つて便ち的中る、一に藥山の箭を看よと道ふに似たり。其の僧便ち麀と作つて、身を放つて倒る。這の僧也た作家に似たり、只だ是れ頭有つて尾無し、既に圈縲を做して、藥山を陥れんことを要す。爭奈せん藥山は是れ作家、一向に逼め將ち去ることを。山云く、「侍者這の死漢を拖き出せ」と。陣を展べて向前するが如くに相似たり、其の僧便ち走る。也た好し是なることは則ち是、爭奈せん脱灑ならずして、脚に粘じ手に粘じること。所以に藥山云く、「泥團を弄する漢、什麼の限りか有らん。」藥山當時、若し後語無くんば、千古の下、人の檢點に遭はん。山云く、「箭を看よ。」這の僧便ち倒る。且く道へ、是れ會か是れ不會か、若し是れ會と道はば、藥山什麼に因つてか卻つて恁麼に道ふ、「泥團を弄する漢」と。這箇最も惡し、正に僧の徳山に問ふに似たり。「學人鏡鈿の劍に仗つて、師の頭を取らんと擬する時如何。」山頭を引いて近前して云く、「團。」僧云く、「師の頭落ちぬ。」徳山低頭して方丈に歸る。又、巖頭僧に問ふ、「什麼の處より來る。」僧云く、「西京より來る。」巖頭云く、「黃巢過ぎて後會て劍を收得す麼。」僧云く、「收得す。」巖頭頭を引いて近前して云く、「團。」僧云く、「師の頭落ちぬ。」巖頭呵呵大笑す。這箇の公案、都て是れ

④ 法燈泰欽は、青原下九世法眼の法嗣、傳燈二十五、會元第十に傳あり。
⑤ 六十六則の評に見えたり。
⑥ 六十六則。

陷虎の機、正に此れに類す。恰も是れ藥山他に管せず、只だ識得破するが爲に只管に逼め將ち去る。雪竇云く、「この僧三步には活すと雖も、五歩には須らく死すべし。」この僧甚だ箭を看ることを解して、便ち身を放つて倒ると雖も、山云く、「侍者這の死漢を拖き出せ」と。僧便ち走る。雪竇道く、「只だ恐らくは三步の外活せざらんことを。」當時若し五歩の外に跳出せば、天下の人は他を奈何ともせず。作家の相見、須らく是れ賓主始終互換間斷有ること無く、方に自由自在の分有るべし。この僧當時既に始終すること能はず、所以に雪竇の檢點に遭ふ。後面に亦自ら他の語を用て頷して云く、

【頷】塵中の塵、高く眼を着けて看よ、頭を撃げ角を戴き去れり。君看取せよ。(何似生、第二頭に走る、射んと要せば便ち射よ、見て什麼か作ん。)一箭を下す。(中れり、須らく知るべし藥山好手なことを。)走ること三步。(活潑潑地、只だ三步を得たり、死し了ること多時。)五歩にして若し活せば、(什麼をか作ん、跳ると百歩、忽ち箇の死中に活と得ること有らん時如何。)群を成して虎を趁はん。(二り俱に並べ照す、須らく他の與に倒退して始めて得べし、天下の禪僧他に出頭を放す、也た只だ草窠裏に在り。)正眼從來獵人に付す。(爭奈せん藥山未だ肯て這の話を承當せざること。藥山は則ち故に是、雪竇又作塵生。也た藥山の事に干らす、也た雪竇が事に干らす、也た山僧が事に干らす、也た上座が事に干らす。)雪竇高聲に云く、「箭を看よ。」(一狀に領過す、也た須らく他の與に倒退して始めて得べし。打して云く、已に爾が咽喉を塞卻し了れり。)

【評唱】「塵中の塵、君看取せよ」と、禪僧家須らく是れ塵中の塵底の眼を具し、塵中の塵底の頭角有り、機關有り作略有るべし。任ひ是れ翼を挿む猛虎、角を戴く大蟲も、也た只だ身を全うして害に遠ざかることを得ん。この僧當時身を放つて便ち倒れて自ら道ふ、「我は是れ塵」と。一箭を下す、走ること三步。山云く、「箭を看よ。」僧便ち倒る。山云く、「侍者這の死漢を拖き出せ。」この僧便ち走る、也た甚だ好し。爭奈せん只だ三步を走り得ることを。五歩に若し活せば、群を成して虎を趁はん。雪竇道く、「只だ恐らくは五歩せば須らく死すべし。當時若し五歩の外に跳出して活せん時、便ち能く群を成し去つて虎を趁はん」と。其の塵中の塵、角の利なること鎗の如し、虎も見て亦之を畏れて走る。塵は鹿中の王爲り、常に群鹿を引いて、虎を趨うて別山に入らしむ。雪竇後面に藥山亦當機出身の處有ることを頷す、「正眼從來獵人に付す」と。藥山射を能くする獵人の如し、其の僧塵の如し。雪竇是の時因に上堂、此の語を舉し束ねて一團の話と爲して、高聲に一句を道つて云く、「箭を看よ」と。坐者立者、一時に起つことを得す。

此の上堂の語、雪竇後錄に出づ。

第八十二則

垂示に云く、竿頭の絲線、具眼方に知る。格外的機、作家方に辨す。且く道へ、作麼生か是れ竿頭の絲線、格外的機。試みに舉す看よ。

【本則】 擧す、僧、大龍に問ふ、「色身は敗壞す、如何なるか是れ堅固法身。」(話兩概と作る、分開して也た好し。) 龍云く、「山花開いて錦に似たり、澗水湛へて藍の如し。」(無孔の笛子、鼈拍板に撞着す、渾崙擊けども破れず、人は陳州より來りて卻つて許州に往き去る。)

【評唱】 此の事若し言語上に向つて免めば、一に棒を掉けて月を打つが如し、且得没交涉。古人分明に道ふ、「親切を得んと欲せば、問を將ち來つて問ふこと莫れ。」何が故ぞ、問は答處に在り、答は問處に在り。この僧一擔の芥齒を擔ふて、一擔の鶻突に換ふ、箇の間端を致す、敗缺少からず。若し是れ 大龍にあらすんば、争か蓋天蓋地なることを得ん。他恁麼に問ふ、大龍恁麼に答ふ、一合相にして、更に一絲毫頭を移易せず。一に兔を見て鷹を放ち、孔を看て楔を著くるに似たり。三乘十二分教、還つて這箇の時節有らん變、也た妨げず奇特なることを。只だ是れ言語無味にして、人口を杜塞す。是の故に道ふ、「一片の白雲谷口に横ふ、幾多の歸鳥か夜巢に迷ふ」と。有る者は道ふ、「只だ是れ口に信せて答へ將ち去る」と。若し恁麼に會せば、盡く是れ胡種族を滅するの漢。殊に知らず、古人の一

【本則】

東嶺禪師云く、擧す、僧大龍に問ふ、「色身敗壞、如何なるか是れ堅固法身。」龍曰く、「山花開いて錦に似たり、澗水湛へて藍の如し。」

右八十二則、便ち堅固法身則ち意味有るを明す、正月只だ大龍の語を拈じ、初講の日に至り元旦の例の如し、是れ先格なり、元日より五日の夜に至り、心頭に掛在し、此の夜因に先師に見ゆ、等間に大龍の語を見了して、全く微頭ならず、這回斯の言語に非ず、道斷に非ざるの處に至りて、始めて句中に入得し、大龍別に長處有ることを知れり。

①大龍は、青原下七世白兆の四の法嗣、傳燈二十三、會元第八に傳あり。

②金剛經に云く、若し世界實に

機一境、枷を敲き鎖を打つて、一句一言、渾金璞玉なることを。若し是れ諸僧の眼腦ならば、有る時は把住し、有る時は放行し、照用同時、人境俱奪、雙放雙收、時に臨んで通變す。若し大用大機無くんば、争か恁麼に天を籠め地を罩むることを解せん。大いに明鏡の臺に當つて、胡來れば胡現じ、漢來れば漢現するに似たり。此の公案 花藥欄の話と一般なり、然も意卻つて同じからず。この僧の問處明かならず、大龍の答處恰好なり。見すや僧、雲門に問ふ、「樹凋み葉落つる時如何。」門云く、「體露金風。」此れ之を箭鋒相拄ふと謂ふ。この僧大龍に問ふ、「色身は敗壞す、如何なるか是れ堅固法身」と。大龍云く、「山花開いて錦に似、澗水湛へて藍の如し」と。一に君は西秦に向ひ、我は東魯に之くと云ふが如し。他は既に恁麼に行き、我は卻つて不恁麼に行く、他の雲門と一倍相返く。那箇の恁麼に行くは卻つて見易し、這箇の卻つて不恁麼に行くは卻つて見難し。大龍妨げず三寸甚だ密なることを。雪竇の頌に云く、

【頌】 問會て知らず、(東西辨せず、物を弄して名を知らず、帽を買ふに頭を相す。) 答還つて會せず。(南北分たす、觸體を換卻す、江南江北。) 月

有らば、則ち是れ一合相、如來一合相と説くも、則ち一合相に非ず、是れを一合相と名く、須菩提一合相とは、即ち是れ不可説、但だ凡夫の人其の事に食着す。

③洞山初云く、「無味の談、人口を塞斷す、五十八則に見えたり。」

④禪林類聚第一に云く、僧洛浦に問ふ、「百千の諸佛を供養せんより、一無心の道人を供養せんには如何す、未審し百千の諸佛に何の過か有り、無心の道人に何の徳か有る。」師云く、「一片の白雲谷口に横ふ、幾多の歸鳥か夜巢に迷ふ。」

- ⑤第三十九則。
- ⑥第二十七則。
- ⑦三寸は舌なり。

冷かに風高し、(何似生、今日正當這の時節、天下の人眼有つて曾て見ず、耳有つて曾て聞かず。)古巖寒槍、(雨ならざる時更に好し、無孔の笛子甞拍板に撞着す。)笑ふに堪へたり路に達道の人に逢うて、(也た是れ須らく這裏に到つて始めて得べし、我に拄杖子を還し來れ、群を成し隊を作し恁麼に來る。)語黙を將て對せざることを。(什麼の處に向つてか大龍を見ん、箇の什麼を將てか他に對して好からん。)手に白玉の鞭を把つて、(一より七に至るまで拗折し了れり。)驪珠盡く擊碎す。(後人に留與して看せしむ、可惜許。)擊碎せずんば、(一着を放過す、又恁麼に去る。)瑕類を増さん。(泥團を弄して什麼か作ん、轉た即當たることを見る、過犯彌天。)國に憲章あり、(法を識る者は懼る、朝打三千暮打八百。)三千條の罪。(只だ一半を道ひ得ること有り、八萬四千無量劫來無間の業に墮すれども、也た未だ一半を還し得ざること在らん。)

【評唱】 雪竇頌し得て、最も工夫有り、前來雲門の話を頌するに、卻つて云く、「問既に宗有り、答亦同じき攸なり。」這箇は卻つて不恁麼。卻つて云く、「問曾て知らず、答還つて會せず。」大龍の答處 傍瞥にして、直に是れ奇特なり。分明に是れ誰か恁麼に問ふ、未だ問はざる已前、早く敗缺を納了れり。他の答處俯して能く恰好、機宜に應じて道ふ、「山花開いて錦に似、澗水湛へて藍の如し」と。備諸人如今作麼生か大龍の意を會せん。答

②第二十七則、曉露會風の話を謂ふ。
①瞥は目を過すなりと註す、直指の旨は學人淺泊しがたき故、旁邊に一線道を通じ「ちらり」と消息を見せたるを旁瞥と云ふ。

處傍瞥にして、直に是れ奇特なり。所以に雪竇頌出して、人をして月冷かに風高し、更に古巖寒槍に撞著すと道ふことを知らしむ。且く道へ、他の意作麼生か會せん。所以に適來道ふ、「無孔の笛子、甞拍板に撞著す」と、只だ這の四句に頌了れり。雪竇又人の道理を作さんことを怕れて卻つて云く、「笑ふに堪へたり路に達道の人に逢うて、語黙を將て對せざることを。」此の事且つ是れ見聞覺知にあらず、亦思量分別に非ず。所以に云ふ、「①的的兼帶無し、獨運何ぞ依頼せん、路に達道の人に逢うて、語黙を將て對せず」と。此れは是れ香嚴の頌なり、雪竇引き用ふ。見すや 僧、趙州に問ふ、「語黙を將て對せず、未審し什麼を將てか對せん。」州云く、「漆器を呈す」と。這箇便ち適來の話に同じ、備が情塵意想に落ちず、一に什麼にか似たる。手に白玉の鞭を把つて、驪珠盡く擊碎す。是の故に祖令當行、十方坐斷。此は是れ劔及上の事、須らく是れ恁麼の作略有るべし。若し不恁麼ならば、總に従上の諸聖に辜負せん。這裏に到つて、要らず些子の事無うして、自ら好處有り、便ち是れ向上の人の行履の處なり。既に擊碎せずんば、必らず瑕類を増さん、便ち漏逗を見ん、畢竟是れ作麼生か是なることを得ん。國に憲章有り、三千條の罪、②五刑の屬三千、不孝より大なるは莫し。憲は是れ法、章は是れ條、三千條の罪、一時に犯した

②香嚴の頌、傳燈二十九に出づ。
①會元第四に云く、僧趙州に問ふ、「道人相見の時如何、師曰く、「漆器を呈す。」是何物ぞ。」
②祖庭事苑第五に云く、墨刑の屬千、刺割の屬千、刺割の屬五百、宮罰の屬三百、大辟の屬二百。其の類を刺んで之を涅にするを墨と曰ふ、鼻を截るを劓と曰ふ、足か則ちを刖と曰ふ、宮は淫刑なり、男は其の勢を割り、婦人は幽閉す、大辟は死刑なり。

れり。何が故に此の如くなる、只だ本分の事を以て人を接せざるが爲なり。若し是れ大龍ならば、必ず恚麼ならず。

第八十三則

【本則】 擧す、雲門衆に示して云く、「古佛と露柱と相交る。是れ第幾機ぞ。」(三千里外没交涉、七花八裂。)自ら代つて云く、「東家の入死すれば西家の入哀を助く、一合相不可得。」(南山雲起れば、(乾坤觀ること莫し、刀斫れども入らず。)北山雨下る。) (点滴も施さず、半は河南半は河北。)

【評唱】 雲門大師、八十餘員の善知識を出す、遷化の後七十餘年にして、塔を開いて之を觀るに、儼然として故の如し。他見地明白にして、機境迅速なり。大凡そ垂語別語代語、直下に孤峻なり。只だ這の公案、擊石火の如く、閃電光に似たり、直に是れ神出鬼没。慶藏主云く、「一大藏教に、還つて這般の説話有り麼。」如今の人多く情解の上に向つて、活計を作して道く、「佛は是れ三界の導師、四生の慈父、既に是れ古佛、什麼と爲

【本則】

東嶺禪師云く、八十三則、便ち雲門の言句、益々意味に多し可きことを明す、雪竇の頌中に曰く、「苦中の樂、樂中の苦、誰れか道ふ黄金薑土の如し」と、先師曰く、「是れ雪竇の一家風、又東山下の調最絶唱なり。」

① 幻住曰く、「會元に七十六人を載す、佛祖宗派圖に九十四人を載す、今八十餘員と謂ふ者は、其の大數を擧ぐるのみ。」
② 七十餘年當に十七年と作すべし、本録に云く、「師歸寂の後十七載にして、夢を雄武軍節

てか御つて露柱と相交る。」若し恚麼に會せば、卒に摸索不着ならん。有る者は喚んで無中に唱へ出すと作す。殊に知らず宗師家の説話、意識を絶し、情量を絶し、生死を絶し、法塵を絶して、正位に入つて更に一法を存せざることを。爾纒かに道理計較を作さば、便ち脚に纏ひ手に纏はん。且く道へ、他の古人の意作麼生、但只心境をして一如ならしむれば、好惡是非、他を撼動することを得ず。便ち有と説くも也た得たり、無も也た得たり、有機も也た得たり、無機も也た得たり。這裏に到つて、拍拍是れ令五祖先師道く、「大小の雲門、元來膽小なり、若し是れ山僧ならば、只だ他に向つて第八機と道はん。」他道ふ、「古佛と露柱と相交る、是れ第幾機ぞ。」一時の間且く目前に向つて包裹す。僧問ふ、「未審し意旨如何。」門云く、「一條の條三十文に買ふ」と。他乾坤を定むる底の眼有り、既に人の會する無し。後來自ら代つて云く、「南山雲起れば、北山雨下る」と。且く後學の與に、箇の入路を通ず、所以に雪竇只だ他乾坤を定むる處を拈じて人をして見せしむ。若し纒かに計較を犯して、箇の鋒銛を露さば、則ち當面に蹉過せん。只だ他の雲門の宗旨に原いて、他の峻機を明さんことを要す。所以に頌出して云く、

度推官阮紹莊に感ず云云、會元にも亦謂ふ「後、十七載にして夢を阮紹莊に示す」と。
③ 並に本録に見ゆ。垂語とは、學人に垂示するの語、別語とは、古人曾て答話有り、今、別に一見を出して答話するを謂ふ、代語とは、古人答話無し、今、之に代つて答話するを謂ふなり。
④ 三界は欲界、色界、無色界、即ち依報なり。
⑤ 四生は卵、胎、濕、化、即ち正報なり。
⑥ 摸索不着は「さぐりあてえず」と譯す。
⑦ 拍手の一拍、一拍は是れ號令なり。
⑧ 五祖上堂の語、四面錄に出づ、又禪林類聚第二に出づ。